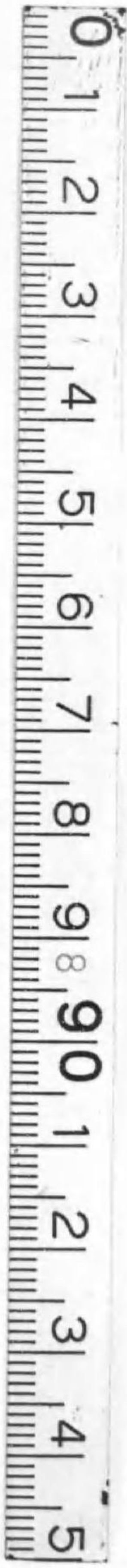


355
532



始



特218
57



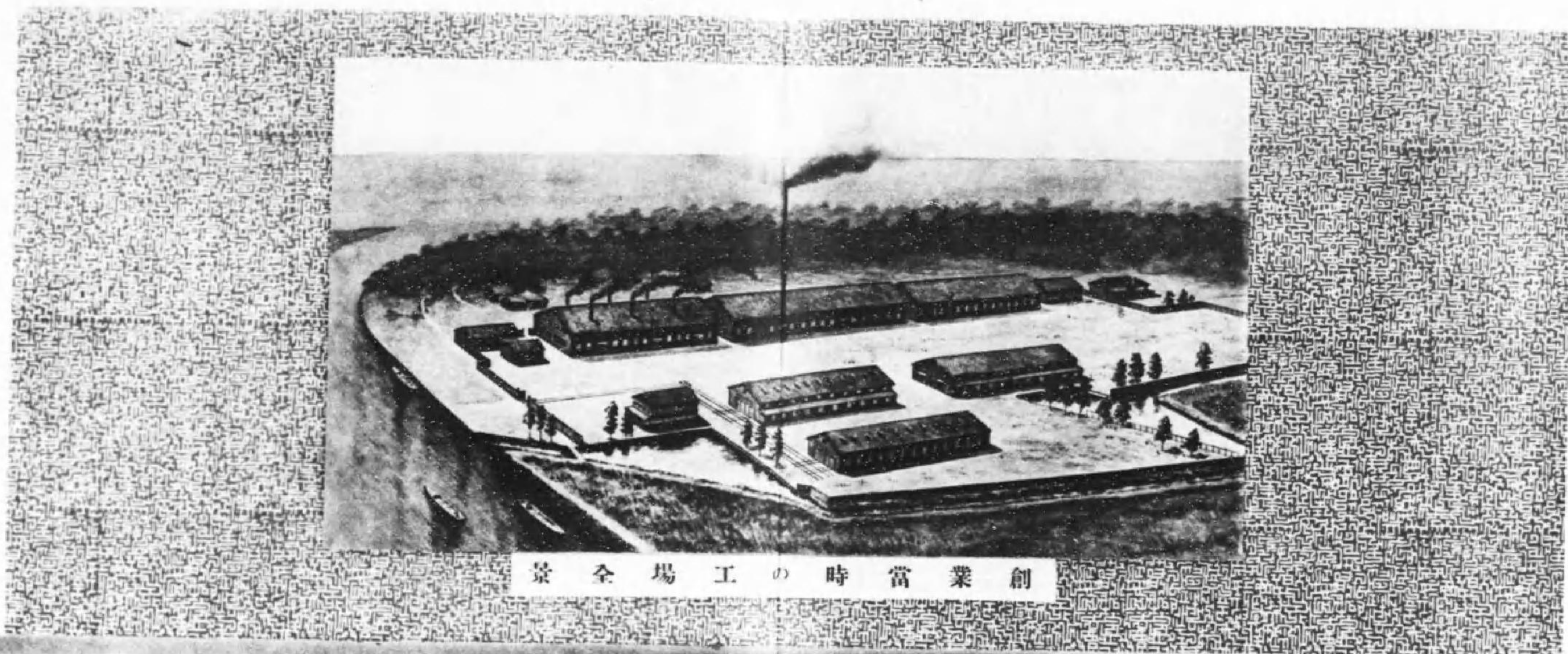
工所四十率史



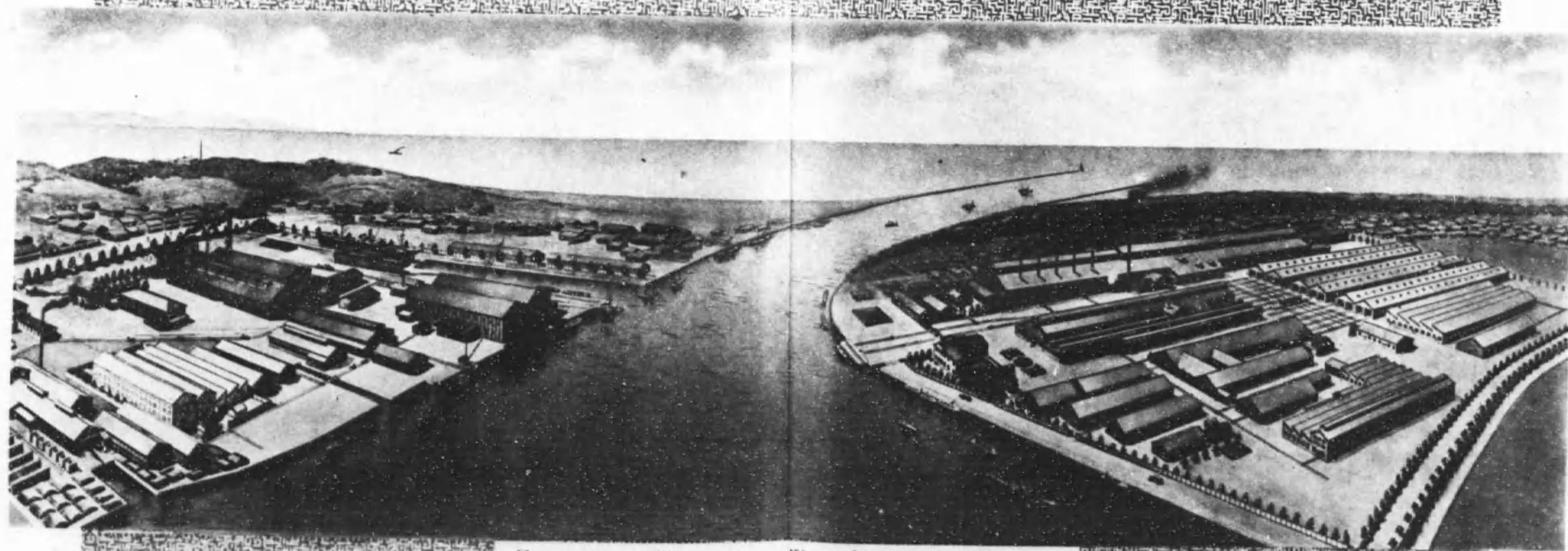
鐵工報國

梁垚題



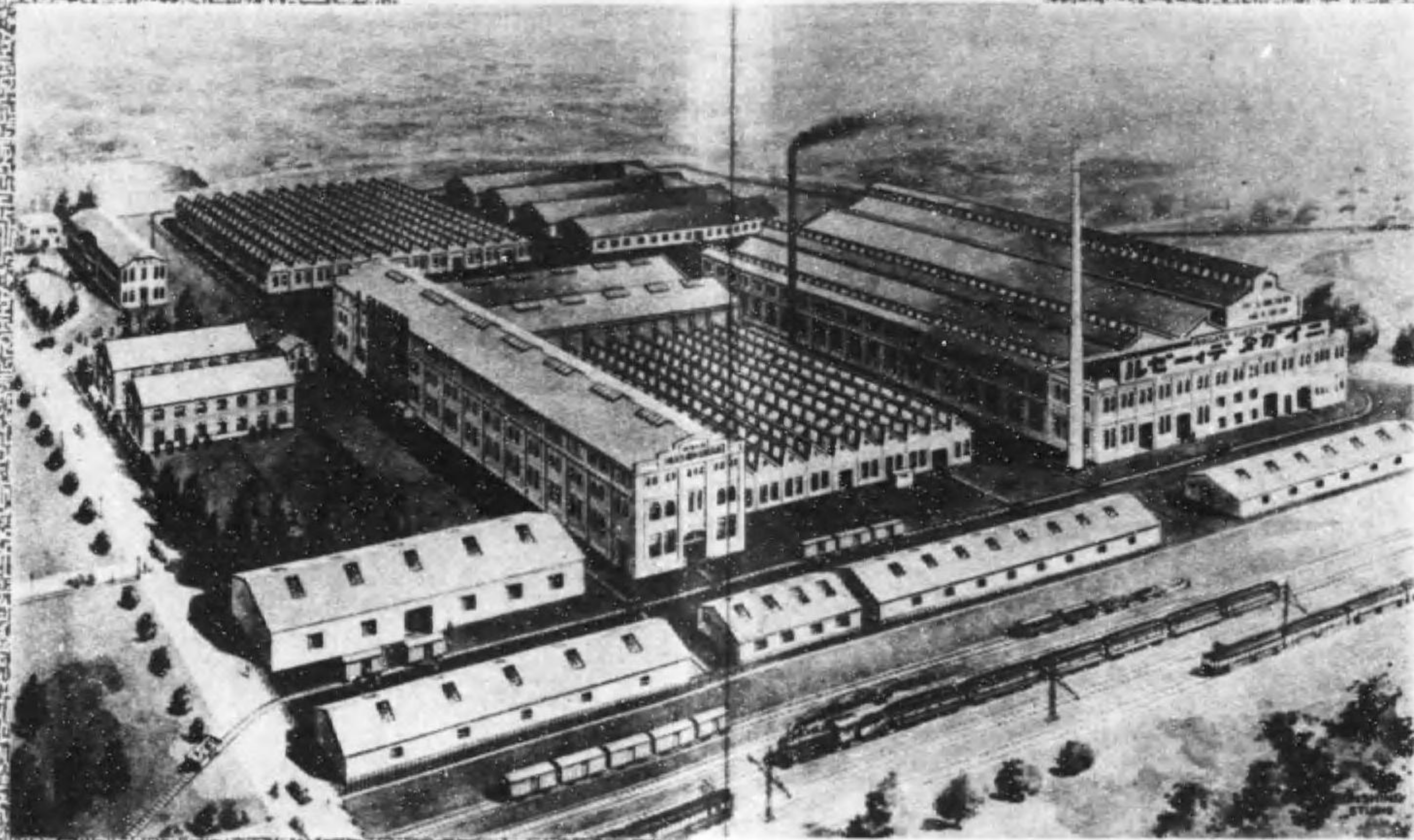


創業者當時の工場全景

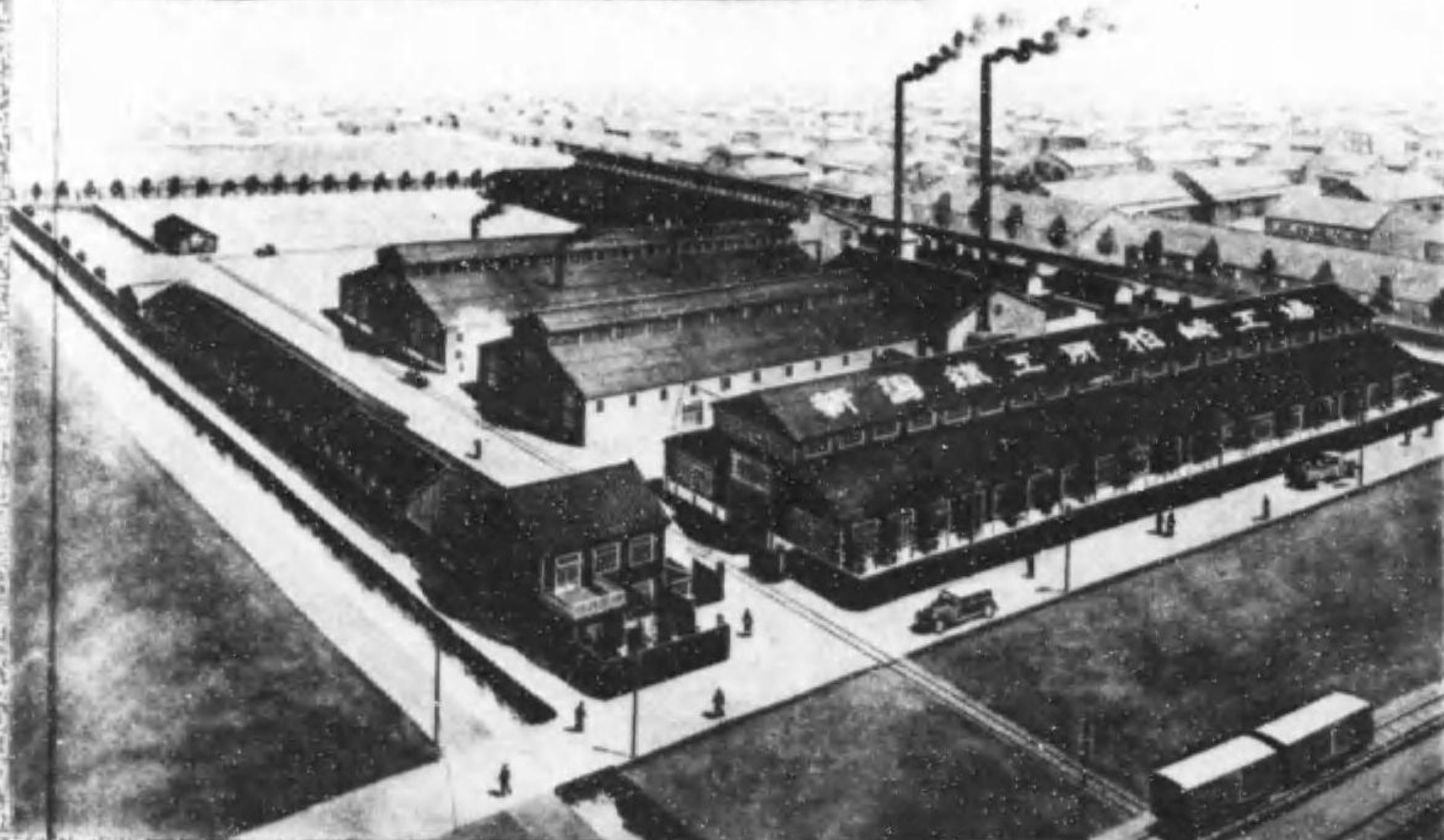


現在の新潟工場全景

景全場工田蒲の在現



景全場工岡長の在現



景全場工崎柏の在現



創立主唱者
故山口權三郎氏



前顧問 工學博士
故寺野精一氏



前顧問 工學博士
故坂田貞一氏



前社長
内藤久寛氏



前社長
故山口達太郎氏



社長
笹村吉郎氏



役 締 取
氏 郎 太 誠 口 山



役 締 取
氏 郎 三 圭 本 橋



役 締 取
氏 作 三 富 鍵



役 締 取 務 専
氏 郎 次 吉 島 長



役査監前
氏一貫野中故



役締取前
氏作新聞本



役査監前
故
氏郎三秀美須久



役査監
氏次孝野中



役査監
氏助之庫藤齋



前監督查役
中野忠太郎氏



前監督查役
齋藤喜十郎氏



前監督查役
久須美東馬氏



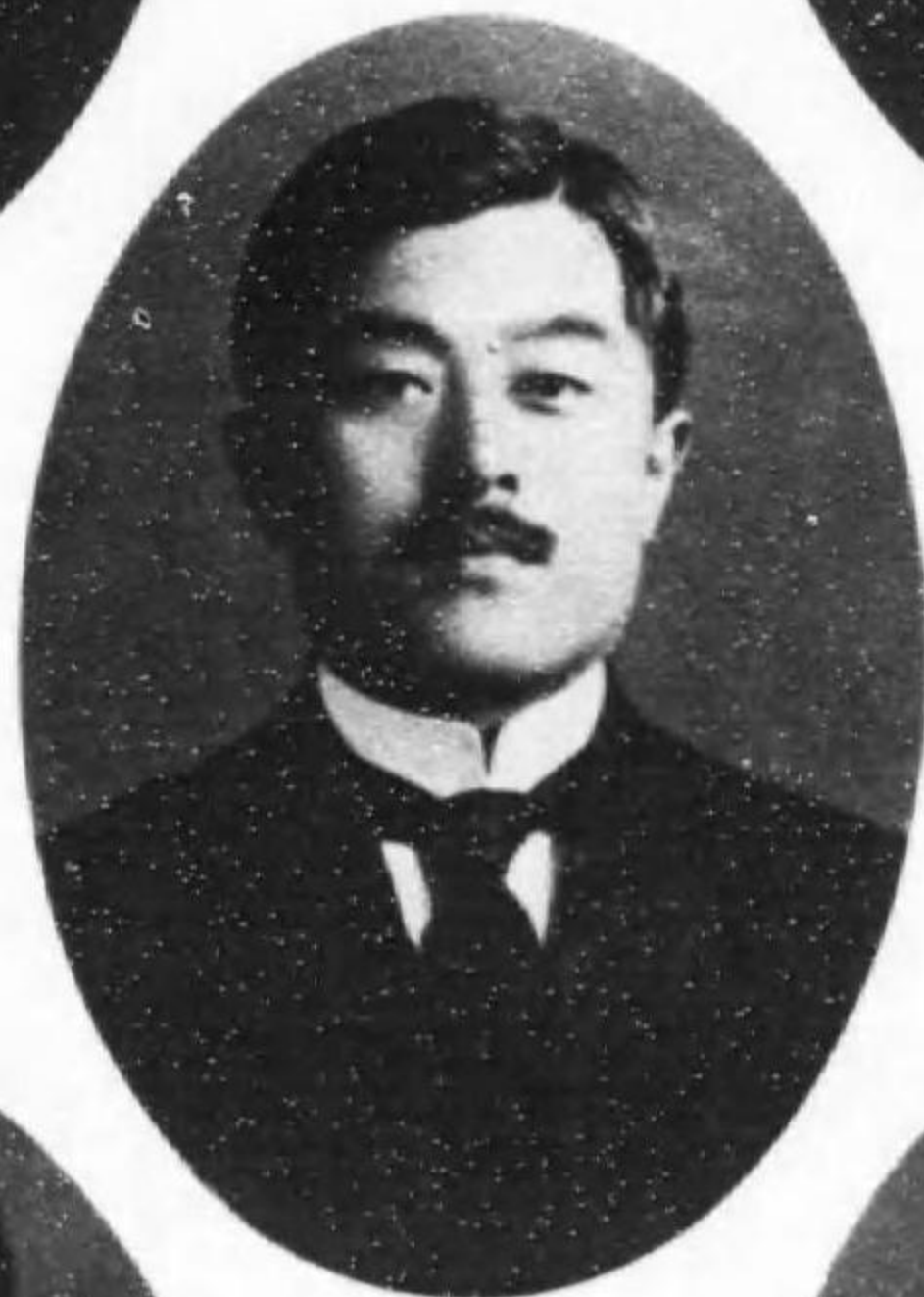
前非常務取締役
本儀正氏



新潟工場長參事
鈴木春雄氏



支那人
山口八次氏



前新潟工場長
木川行藏氏



柏崎工場長
野口善平氏



蒲田工場長參事
加藤重男氏



長部業營社本
氏朗沚川品



長部造鑄場工田蒲
氏吉春浦松



長部業營場工湯新
氏吉禮山中



長部計設場工田蒲
氏治新谷仲



長部査調社本
氏彦良下山



蒲田工場經理部長
加納憲治氏



長岡工場長
渡邊儀助氏



京城出張所長
來山源藏氏



大阪出張所長
久須美泰治氏



問 顧
氏次宗穴小



問 顧
氏雄貞村松



長部機造場工湯新前
氏郎五鐵淵大



問 顧
氏郎一丈島留久

序

新潟鐵工所は明治二十八年日本石油株式會社の附屬事業として設立せられ、其後明治四十三年同社より分離獨立せるもので、創設以來本年にて正に四十年に達する。

抑も新潟鐵工所は創立の目的が石油事業に關する機械類の製作を主とし、兼て裏日本方面に於ける産業開發に資するにあつたので、地を新潟港に定め、明治三十八年には小規模の造船業をも經營することゝなつたのであるが、港灣の不備と本社偏在の故を以て當社の發達は誠に遅々たるものであつた。然るに大正年代に入つて本邦工

業の發達頗る著しく、當社事業の發展の爲めには是非共中央に進出せざるべからざるを痛感し、同六年本店を東京に移轉するに至つた。其際新潟市に於ては、之を以て土地の繁榮に影響する所頗る大なりとし、相當反對の聲が高かつたけれども、私は當社事業の發展はやがて新潟工場の隆昌を齎らし、却て土地の繁榮を誘致する所以であることを力説して漸く其諒解を得、遂に移轉を決行したのであるが、果して本店の中央進出に依り新潟工場は豫想通り逐年業務の繁忙を來し、直接間接市に寄與する所のもの大なるに至つた。即ち其従業員の如きも常時四百名内外に過ぎざりしもの、現在に於ては一千二百名を超ゆるの盛況であるのみならず、此外長岡、柏崎兩工場及縣

下下請工場等を合すれば其従業員數は實に二千名を算し、而も其註文品の九割内外は之を縣外より吸收することを思へば、當社が縣市の繁榮に貢獻する所尠からざるを喜ぶものである。而して本社の移轉は其事業を全國的ならしめ、特に蒲田工場に於けるディーゼル機關の製造は、著しく其營業を擴張せしむるに至つた。之を四十年前創立の當時に比しては勿論、大正六年本社移轉當時に比するも、今日に於ては其規模の擴大せること、製品の種類及數量の増加せること、技術の進歩せること、信用並に聲價の加はれること、固より同日の談でない。尤も此間に於て大震火災等の損害、長期に互る深刻なる不景氣等の爲打撃を受くること尠からざりしも、之を大體より

見れば漸次順調且つ堅實なる發達を續けて今日に及び、吾國の國防及産業に幾分の貢献をなすを得た。是れ重役従業員一致の努力と株主各位の援助とに因るといへども、江湖の深厚なる同情と後援あるに非ざれば得て期す可からざる所である。顧みて誠に感謝の念禁ずる能はざるものがある。

併しながら私は四十年の長き歴史を有する新潟鐵工所に三十八年間關係して其發達の現情を省みる時頗る遺憾の點多く、誠に慚愧に堪へざるものあり、今後倍舊の努力を以て之に當らんと決心するものである。特に帝國の現状は、軍事の方面に於ても産業の方面に於ても鐵工業に俟つ所のもの頗る多く、斯業の盛衰は直ちに國運の隆

替に關するものあるを感ぜしめる。此際吾人としては一段の奮勵に依り事業の進展を計り、以て報國の誠を效さんとするの情、甚だ切なるものがある。今茲に創業四十年に當り『新潟鐵工所四十年史』を編纂刊行する所以は、今日の小成に意滿ち心足れるが爲にあらずして、一は之に依り過去の記録を纏めて將來の發展に資すると共に、一は此機會に於て聊か大方諸賢に謝意を表し且つ今後一層の鞭撻を冀はんとする微衷に出づるものである。幸に之を諒とせられんことを。

昭和九年六月

株式會社新潟鐵工所

取締役社長 笹村 吉郎

新潟鐵工所四十年史目次

新潟鐵工所沿革概要	一
創立の由來	一
創業當時	四
開業より明治末まで	九
大正年代	二五
昭和時代	四〇
當社の現状	四五
當社の光榮	四九
歴代社長小傳	五一

前々社長故山口達太郎氏 五一

前社長内藤久寛氏 五三

現社長笹村吉郎氏 五八

重役支配人の異動 六五

新潟鐵工所年表 六九

主要製品發達史 九九

一、石油機械 九九

二、車輛 一二七

三、一般諸機械 一三五

四、造船及運輸業 一五一

五、内 燃 機 關 一六五

六、工 作 機 械 一九九

七、鑄 物 二二一

當社の業態 二二七

會社設立並に資本増減沿革 二二七

株金拂込高、損益金及配當率年表 二二九

新潟鐵工所四十年史

新潟鐵工所沿革概要

創立の由來

石油事業と鐵工業

由來本邦日本海岸地方は、何時の頃よりか裏日本と呼ばれ、太平洋岸の所謂表日本に比して科學文明の浸潤稍遅き觀があつた。殊に北越の地は商工業の中心を距ること比較的遠く、交通亦便を缺いた爲に、其産業は久しく米作の外に出でなかつた。此間に於て獨り石油事業は、往古此地に萌芽したものであつて、多年原始的稼行の域を脱しなかつたが、明治二十一年日本石油株式會社の創立以來舊殻を破り、近代的の經營、作業の機械化に成功して飛躍的大發展

をなすや、茲に斯業の勃興を促し、一時は北越の天地、石油を措いて他に語るものなしと云ふ盛況を呈するに至つた。同社は更に翼を各方面に張つて逐年事業の擴張に努め、今や石油事業は國防上にも産業上にも重要缺く可からざる國家的大事業となつたのであるが、我が新潟鐵工所は實に此日本石油株式會社の附屬事業として生れたものである。

今、當社創立の由來を按ずるに、明治二十三年日本石油株式會社は米國より鑿井機械を輸入し、初めて機械鑿井に依る成功を收め、斯業に劃紀的新生面を開いたのであるが、當時北越地方には適當なる鐵工所が無く、機械の一部分を修繕するにも一々之を東京方面に送つて僅に措辦する有様であつた。加之、其頃直江津以北には汽車の便が無く、同地と石油事業地たる三島郡尼瀬との間は主として小蒸汽船による外に運搬の方法が無いといふ誠に不便極まる状態であつた。時の取締役山口權三郎、内藤久寛等の諸氏は頗る之を遺憾として、遂に會社自ら鐵工所を設くることに決し、明治二十

七年八月五日尼瀬の本社に臨時株主總會を招集して附屬鐵工所設立の案を附議可決した。時恰も日清戦争の火蓋が切られ、皇軍は成歡、牙山に清兵を破つて、最初の大捷に意氣冲天北上しつゝ、あつたのである。

日本海方面には從來云ふに足るべき鐵工所が無いのであるから、本鐵工所は石油事業に必要な機械の製作及修理を行ふと共に、併せて此方面の産業開發に資せんが爲に一般機械類をも製作するを目的とした。従て工場的位置は之を石油事業地に求めずして、北越地方に於て交通運輸の最も便なりと目せらるゝ新潟港に定め、新潟鐵工所と命名した。

當時恰も直江津新潟間を連絡する北越鐵道株式會社創立せられ、同社も車輛修繕其他の爲に鐵工所設立の必要を感じて居た事として、我が鐵工所の設立せらるゝや、其企圖を捨て、當所を利用する口約の成立を見た。是は相互の利益であり、殊に當所にとつては開業早々よき顧客を得た譯で、一般機械類の製作以外に車輛をも製作すること

となり、甚だ好都合であつた。明治二十九年六月より翌三十年に互つて同社から引受けた客貨車の数は百輛を超え、當時としては相當に大きな工事であつたのである。

創業當時

敷地の買収

工場の敷地は初め新潟市内に於て信濃河口に近い入船町に選んだけれども、種々の事情に妨げられて目的を達せず、已むを得ず對岸松島村山ノ下に變更し、幾多の困難を経て翌二十八年六月迄に漸く五千四百餘坪を買収することが出来た。此敷地には數條の里道が通じて居た爲に、其位置變更其他整理上頗る煩雜なる手續を要し、同年十二月十三日に至つて漸く道路變更、潰地上地等に關する九月十七日付の認可書を交付せられた。此地は其後沼垂町に編入せられ、更に數年前新潟市に併合せられたけれども、其當時は寂寥たる一寒村で、固より従業員を收容するに足る住家も無かつた。工場に接して合宿所を設け、獨身社員の宿泊所に充てた

が、其他の社員職工の殆ど全部は新潟市又は沼垂町から信濃川又は阿賀野川支流を渡船で通勤したのである。渡船と云つても手押の小舟で、信濃川を渡るに通常三十分間も掛り、殊に冬期吹雪の時或は春期上流から雪解水の流下する頃には危険の爲に交通杜絶して屢々操業休止を餘儀なくせられ、時に渡船顛覆して人命を失ふ悲惨事すらあつた。明治三十六年九月發動機船第一鐵工丸が竣功して従業員を安全に且無料で渡すことになつた時には、一同非常に喜んだものである。

設立 當時其筋に提出した設立登記願は左の通りである。

登記を受くべき事項

- | | |
|------------|-----------------|
| 一社名 | 日本石油株式會社支店新潟鐵工所 |
| 一營業所 | 越後國中蒲原郡 |
| 一會社の種類及支店 | 株式會社支店 |
| 一會社の目的 | 鐵工營業 |
| 一會社設立免許年月日 | 明治二十一年四月十八日 |

一會社營業年月日 明治二十一年七月一日
 一會社存立時期 明治二十一年四月十八日より滿三十ヶ年
 同五十二年四月十七日まで
 一資本總額 參拾萬圓
 一株式の總數 參百株
 一壹株の金額 壹千圓
 一拂込金額 拾五萬圓、壹株に付五百圓也
 一取締役の氏名

住 所	新潟縣刈羽郡石地町百十四番戶	氏 名	內 藤 久 寬
	同 縣同 郡横澤村四十四番戶		山 口 權 三 郎
	同 縣同 郡荒濱村三十六番戶		牧 口 莊 三 郎
	同 縣中蒲原郡新關村大字下新一番戶		本 間 新 作

右登記相成度別紙定款株主名簿相添及申請候也
 日本石油株式會社支店新潟鐵工所
 專務取締役 內 藤 久 寬

工場の建設に關しては東京高等工業學校（現東京工業大學の前身）教授工學博士阪田貞一氏の斡旋盡力に俟つこと頗る多かつた。技師長も同氏の推薦により明治二十七年七月同校卒業生野村亭作氏を招聘するに決し、現業見習の爲に一時東京平岡工場に入らしめた。

斯くて二十八年六月支配人山口政治氏及野村技師長の著任と共に工場の建築其他諸般の準備に著手し、二十九年五月八日諸機械の設備完成を待つて試運轉を了り、茲に愈々營業を開始する運となつた。

工場の設備

創業當時の敷地五千四百七十三坪、工場は三百十一坪の木造であつた。設備機械は阪田博士の意見に基いて決定したもので、其主要なるものは高田商會を通じて英國から輸入し、其他は内地で調へた。而して輸入機械は左の如きものであつた。

英國グラスゴー、ラウドン・ブラザー會社製

- レース 六呎一臺、八呎一臺、二十呎一臺
- ドリ、ング・マシン 二呎一臺、三呎一臺
- プレーナー 一臺
- ポンチング・エンド・シャリング・マシン 一臺
- シェーパー 一臺
- ベンディング・ロール 一臺
- 四分三噸蒸汽鎚 一臺
- バンドソー 一臺
- ウッド・プレーナー 一臺
- 五十馬力横置冷擬式汽機 一臺

尙原動機用直徑四呎十吋、長二十呎のコルニッシュ汽罐は工場自ら製作したが、機械類の到着以前であるから工事は總て手工であつた。

主なる職員 創業當時の主なる職員は左の諸氏であつた。

支配人 山口 政治 技師長 野村 亭 作

技師 本間 常松 會計係 益子 祐敬
 庶務係 遠藤 雨作 倉庫係 木村 秀郎

開業より明治末まで

開業劈頭の火災

開業後僅に半歳、明治二十九年十一月十一日午後九時二十分、工場から出火して全工場忽ち灰燼に歸して仕舞つた。劈頭の此災厄は當所にとつて實に致命的のものと見えたのであるが、同夜長岡に在つた内藤取締役は急報に接して翌十二日新潟に來り、同時に驅付けた本間取締役と共に再起の計畫を立てた。幸に車輛工場の建築用材が焼失を免れたので之を利用することにし、本間技師は工場の建築を、野村技師は機械の修理を各分擔し、全員交代徹夜作業を續け、罹災後二週間に於て全部復興を告げ、同月二十五日薄暮試運転を終つた。木造の小工場とは云ひながら當時の情勢に於ては非常に迅速なもので、従業員の意氣と努力には

誠に驚くべきものがあつた。

一〇

稀有の洪水

火災の翌年には更に水の災害を受けた。其頃は治水事業も幼稚不完全な時代であつて、信濃川、阿賀野川等の沿岸は屢々水害に見舞はれたのであるが、明治三十年八月の出水は此地方としても稀なる大洪水で、工場の内外見渡す限り濁流氾濫、物凄い状態を呈し、六日午後十一時に至つては工場内の浸水五六寸に及び、宿直員等徹夜で防衛に努めた。水は翌朝から漸次減退したけれども、其餘の工場は九日に至るも尙操業不能の有様であつた。

難工事引受と

明治三十年三月株式會社安進社から外輪式汽船安進丸用の汽機汽罐の製作を、又同年五月清水芳藏氏から汽船六甲丸の汽機汽罐の製作を何れも引受けた。然るに兩工事共元來工場の設備に對して無理な仕事であつたのと、技術者の經驗に乏しかつたとの爲に大失敗を演じ、工場の運命にも關する程の痛手を蒙つた。此工事半ばに入社して圖らずも難關に直面し、其解決

工場廢止問題

の重荷を背負つたのは、現社長、當時の技師長笹村吉郎氏であつた。同氏が野村技師長辭職の後を承けて三十年八月著任した時には是等の工事は方に進行中であつたのである。

前記安進丸は翌三十一年一月試運轉を始めたが成績不良で、調査の結果設計の誤りが主たる原因であること判明し、重役以下の苦心折衝も其甲斐無く、同年十月に至つて遂に汽機汽罐を船から取外して持戻ることになつた。又六甲丸は汽機主要部の製作に屢々失敗を重ね、苦心慘憺の末漸く竣功したのは三十二年三月であつた。幸に成績は良かつたけれども、此間實に滿二年を要したので、直接間接の損害は甚大であつた。

斯の如く創業以來打續く災厄に加へて難工事の失敗があり、業績は極度の不振に陥つた。此經營困難なる鐵工所の前途に對しては何人といへども悲觀するの外は無い。果然三十二年一月の株主總會に於て株主側から鐵工所廢止説が出た。之に對し山口、

一一

内藤等取締役諸氏が陳辯大に努めて漸く存続に決したが、當時旭日昇天の勢で躍進的發展を續けて居た日本石油株式會社の中で此處ばかりは慘風悲雨、暗澹たる別天地であつた。

笹村所長の刻苦

之より先明治三十年九月山口支配人退いて大塚太平治氏之に代つたが、三十二年四月同氏の辭職と共に支配人を廢して笹村技師長が所長となつた。同氏は一面難問題の解決や其善後策に苦心すると共に、他面弛廢せる工場内の規律矯正に努力した。出勤退場は常に職工に伍し、勤儉を奨め、本事業の隆替は即ち従業員各自の福祉に關する所以を説き、精勵恪勤身を以て範を示した。又英斷を以て社員職工の淘汰を執行したが、所謂渡り職人と稱する命知らずの多い時代で、一時は工場内殺氣立ち、甚しきは兇器を揮つて所長に肉薄する等の活劇も演せられた。併し同氏は身邊の危険を顧みず、決然所信に邁往し、爲に工場内の氣風及秩序を一變するに至つた。

業績漸く好轉す

斯の如き慘憺たる苦心の結果革正せられたる工場は、内藤氏始め取締役の激勵、笹村所長の献身的奮闘及び所員の一致協力によつて漸く頹廢を挽回し、明治三十二年前半期の決算には創業以來初めて相當の利益を計上し、前途の光明を認めらるゝに至つた。特に此當時新潟縣下の石油事業は目覺ましき勢を以て勃興し來つた爲、當所の事業も之に伴れて頓に活況を呈し、爾來業況順調となり、漸次發展の機運に向つた。

笹村所長の

海外視察

明治三十三年笹村所長は農商務省の囑託を受け、社用を兼ねて米露兩國に於ける石油關係機械類の製造業を視察した。同氏は此年四月出發、十二月歸朝したが、其半歳餘の視察は製品の改良、工場の經營等に資せること多きは勿論、其調査報告は三十四年農商務省より商工局臨時報告として刊行せられ、斯界に寄與するところ多大なるものがあつた。又同氏が彼地で購入した新式機械は翌三十四年に續々到着して、工場の内容も一段の充實を告ぐるに至つた。

米人技師傭聘

明治三十六年米國機械技師エーチ・エー・スチーブンス氏を聘し、

工場長新任

同時に米國製工作機械を輸入して其操作等を職工に教へた。同氏は東京高等工業學校の招聘に應じて來朝し、滿期歸國前當所に來たのであるが、技術の向上以外、其勤務振りが従業員に好模範を示し、爲に當所の裨益するところ多大であつた。

此年十月新たに工場長を設け、技師木川行藏氏入社就任した。

工場改築

當所の工場建物は明治二十九年火災後急造した頗る粗末な木造であつた。屋根の如きは土屋根と稱し、板の上に土壤で葺いたもので、雜草の茂るに任せてあつた。是は防火に有效な土壤の龜裂や雨に洗ひ流されることを防いだ當意即妙の良法であつたけれども、其外觀は誠に不體裁極まるものであつた。其上營業の發展に伴れて追々狹隘を感じて來たので、明治三十六年より三十七年に互つて工場の大改築を行つたのであるが、舊工場の外部に新建築をすると云ふ一種特別の方法

を採り、其完了後機械の移轉等も行つたけれども、殆ど操業を休止せず済ませたのであつた。

日露戦争と當所

明治三十七年二月勃發した日露戦争は、世界の強國を對手としての大戰で、國を擧げて報國の念に燃えたのであるが、當所は軍籍にある多數の従業員を召集せられた上に、東京砲兵工廠より急を要する軍需品の製作を命ぜられ、日夜職工を督勵して奉公の誠を致すべく、所長以下全力を擧げて奮勵した。所長の發意に依り連日連夜の作業に従事する職工の健康を保持する爲に毎夜若干の牛肉を支給したといふ如き、當時の状況を語る一話柄である。

徒弟の養成

當時此地方に云ふに足るべき鐵工所の無かつたことは前述の通りである。従て職工の大部分は之を東京、大阪方面から呼寄せたので、技術、素質其他に關する選擇の自由に乏しく、當面の經營上には勿論、將來の爲にも適當な方策を必要とした。其一法として當所では開業の當初より徒弟を養成することに

したのであるが、其中には技術優秀にして質朴、眞面目な良職工となるものが少なからずあつて、豫期以上の効果を挙げた。明治四十年からは徒弟學校を工場内に設け、操業時間を割いて必須學科を教授し、時期を定めて學科や技術の試験を課する等大に養成に努め、一時は徒弟の數八十餘名に達する盛況を呈した。

造船部及

運輸部設立

當所は石油機械の外に鐵道車輛其他一般機械をも製作して來たのであるが、更に一步を進めて造船事業の經營をも企つるに至つたことは當所の使命から云つて當然の歸結である。此計畫は明治三十六年に決定したのであつて、其準備中日露戰爭勃發により一時躊躇したけれども、戦後の状態を慮り意を決して計畫を進めた。敷地は創業當時目的を達し得なかつた新潟市入船町に先以て約一萬坪の買収に成功し、阪田博士の斡旋によつて東京工科大学教授工學博士寺野精一氏指導の下に工場の設備を整へ、三十八年七月操業を開始した。

最初に建造した汽船第一日本海丸は翌三十九年六月完成し、同時に開始した運輸部

の所屬船として専ら近海の運輸に従事せしめることとした。

資本金の増加

日本石油株式會社の資本金は創立當時十五萬圓で、爾來數次の増資を行ひ、明治三十五年には二百四十萬圓となつたが、更に三十九年には五百萬圓となり、翌四十年には一躍一千萬圓となつた。當所の元入金も最初の三萬圓から漸次増加して五十萬圓になつて居つたのを、此際二百萬圓に増額された。

東京出張店開始

明治四十一年四月末東京市京橋區本材木町三丁目の日本石油株式會社販賣店內に東京出張店を開始した。目的は從來製作し來つた石油發動機の大量製産を企てたので、之を全國的に賣擴めること、兼て近來頻繁を加へて來た東京方面の取引の便を圖るにあつて、當所が中央に進出した最初の足溜りであつたのである。其後四十三年當所の獨立と共に隣地に事務所を新築し、大正二年東京工場落成まで同所で執務した。

揚排水機、掘

鑿機の製作

明治四十年頃より各地共水田用揚排水機の需要が勃興して來たが、新潟縣下のものは大部分當所で製作した。此種の工事は大正二、三年頃まで相當多數あり、蒸汽機關直結の渦卷唧筒で、口徑三十吋程度のもので數臺を羅列せる相當大規模のものも數ヶ所に出來た。

又内務省の河川改修工事に使用される掘鑿機の製作も此頃に始まつたもので、荒川改修、大京津分水等の大工事に納入したものの頗る多數に上つた。其後滿鐵にも供給した。

漁船用石油

發動機の製作

明治四十一年丁抹國ダン式の型式を採つて漁船用石油發動機の製作を開始した。當時製作者、取扱者とも尙經驗に乏しく、技術も甚だ幼稚であつた上に、日本の漁船用としては型式の選擇當を得なかつた爲、豫期の成績を擧げ得ず、非常なる困難を嘗め、尠なからぬ犠牲を拂つたけれども、其後機關の型式を變更し苦心研究を重ねた結果、數年後には漸く世の信用を得

て逐次發達し、今日のニイガタ・ディーゼル機關製作の基礎となつたのである。

工場の擴張と

分工場設置

石油事業の隆盛と一般産業界の進運とに促がされて、當所の事業は益々繁忙を告げ、工場は漸次擴張して、明治年代の末期に於ては信濃河口の兩岸に各二萬餘坪、合計四萬數千坪の敷地を占むるに至つた。尙新たに開發せられ又は發展を來した石油鑛場に對しては其附近の交通便なる要地に分工場を設置して所要機械類の供給及修繕の便を圖り、尠なからず石油事業に貢献した。今明治年間に設置せる分工場を列記すれば

柏崎分工場

新潟縣西山油田に近く、日本石油株式會社柏崎製油所の隣接地に設けたもので、明治三十三年十月落成せる當所最初の分工場である。目的は勿論石油機械類の製作修理にあり、工場長野口善平氏は大正四年石油に關する機械類調査の爲渡米し、六年歸朝して一層其改良進歩に努力すると共に、長野縣下の製絲用汽罐汽機等を初め漸次製品の種類及販路を擴張し、油槽、鐵管等鋼板工事にも力を注い

で、廣く各方面に進出して居る。近來一層工場の擴張並に設備の改善を要するに至つたので、別に敷地を求めて新築し、昭和四年十一月落成と同時に移轉した。即ち現在の柏崎工場である。分工場開設當時建物坪數四百坪に足らなかつたが、現在二千二百餘坪の敷地に八百餘坪の建物を有するに至つた。

長岡分工場 明治三十五年三月長岡町(現在長岡市)鈴木常作氏所有の鐵工所を買収したもので、現在の長岡工場である。同地は新潟縣の中央に位し、當時寶田石油株式會社の所在地で、附近に有名なる東山油田を控へて居る。此地方は古來鑄物業が發達し、之と並んで幾多の小鐵工場があつたけれども、何れも個人經營の所謂町工場に過ぎなかつた。當社は此分工場を漸次擴張或は改築して内容を充實し、當地方の石油事業に貢獻すると共に、附近の水力發電工事等にも各種の機械類を供給した。當社が初めて石油發動機を製作したのは實に此工場であり、又最初に石油鑿井用原動機としての同機を提供したのも當工場であつた。現在敷地九百餘坪、建物約四百

坪、工場長は渡邊儀助氏である。

新津分工場 明治三十五年新津油田熊澤に設けたのであるが、同油田の中心移動に伴ひ三十九年高谷に移轉して高谷出張所と改稱した。其位置新潟市に近き爲、交通の便となるに従て漸次必要性を減じ、四十三年閉鎖した。

直江津分工場 明治三十六年落成、インターナショナル・オイル・コムパニーの直江津製油所に近く、新興の頸城地方油田を控へて有望視せられたものであるが、其後インター會社が日本石油會社に買収せられ、且油田も不振である爲に、四十三年七月に至り閉鎖した。

株式會社新潟鐵工所創立

當所創業以來十五年を經過して基礎確立し事業も大に擴張したので、茲に日本石油株式會社より分離獨立するを經營上便利と認むるに至り、同社は明治四十三年三月五日重役會に於て之を決定し、六日臨時株主總會に附議可決した。依て左の諸氏發起人となりて、資本金二百萬圓の株

式會社新潟鐵工所を創立し、日本石油株式會社所屬新潟鐵工所の財産全部を買收して、其營業及一切の權利義務を繼承することとした。

發 企 人 内 藤 久 寬 山 口 達 太 郎 飯 塚 彌 一 郎
 中 野 貫 一 本 間 新 作 久 須 美 秀 三 郎
 渡 邊 忠 山 口 政 治 松 方 乙 彦
 創 立 委 員 長 山 口 達 太 郎
 創 立 事 務 所 柏 崎 町 日 本 石 油 株 式 會 社 内

株式の募集に就ては、日本石油株式會社の株主は其所有の五株に對し一株の割合を以て應募優先權を認めた。

斯くて其年六月十七日、新潟商業會議所に創立總會を開き、茲に新會社の成立を告げた。其要項は次の通りである。

商 號 株 式 會 社 新 潟 鐵 工 所
 本 店 新 潟 市 入 船 町 四 丁 目 三 千 七 百 七 十 六 番 地

目 的

- 一、機械器具並車輛の製造及賣買
- 二、船舶の製造及賣買並海陸運送
- 三、以上の目的を達するに附帶する事項

設 立 明 治 四 十 三 年 六 月 十 七 日

存 立 の 時 期 滿 三 十 七 年

資 本 總 額 金 貳 百 萬 圓

一 株 金 額 金 五 拾 圓

各株につき拂込みたる株金額 金拾貳圓五拾錢

取締役會長	山 口 達 太 郎
專務取締役	笹 村 萬 藏
取 締 役	内 藤 久 寬
同	本 間 新 作
同	鍵 富 三 作
監 査 役	中 野 貫 一

同 松方乙彦
同 齋藤喜十郎

明治年代の概観

明治二十八年創立後明治三十二年までは、火災、水難、工事の失敗等踵を接し、創始時代のあらゆる困苦を嘗めた。然るに此難關を切り抜けて業況一轉後は概ね順調の経過を辿つて基礎を確立し、事業を擴張して漸次發展し得たのは、重役及所長以下の異常なる努力奮闘によるは勿論であるが、石油事業の興隆と日本石油株式會社の如き有力なる背景に負ふところ大なるものがあつた。鐵道車輛の製造を始めとし、三十八年以後の造船事業、日露戰爭時代の軍需品製造、明治末期の信濃川分水工事用機械等多方面の工事も漸増したには相違ないが、要するに明治年間の當社は日本石油株式會社の附屬として石油事業に休戚を託しながら發展したものである。

大正年代

東京工場設立

大正二年五月東京工場が落成した。當時發動機付漁船の發達著しく、當社製品の名聲を加ふるに従て需要益々旺盛となつて來たので、大に之が製産高を増加すると共に其改良進歩を圖る爲専門工場を東京に設くることとなり、京橋區月島一號地に於て市有地二千餘坪の借地權を東京精米株式會社から讓受け、技師山口八次氏(現支配人)擔任の下に工場を建設したのである。初め東京分工場と呼んだが、大正五年三月東京工場と改稱した。然るに世界大戰突發後市況頗る活況を呈し、石油發動機の製作も多忙を極めたが、他方工作機械の需要激増し、新潟工場で一般機械と共に製作して居つては之れに應じ切れぬので、東京工場構内に別に工作機械専門工場を新設し、大正六年竣功と同時に其製造を開始した。此兩機は當初より品質優良なりとの世評を得て、工作機械の如きは新潟工場と合せて年産額三百臺に上

り、大戦終局まで頗る盛況を呈した。

東京出張店の

移轉と改稱

東京出張店は、東京工場の落成と同時に同工場内に移轉し、東京出張所と改稱して、本社設計課長本儀正氏を所長に任じ、権限を擴張して、大に業務の發展を策することゝなつた。然るに同所は位置不便の爲營業上甚だ不利なので、大正五年三月麴町區有樂町の數寄屋橋畔に移轉した。

土崎分工場設立

大正三年五月、日本石油株式会社所屬秋田縣黒川油田に本邦空前に大噴油あり、日産實に一萬石と稱せられた。今方に發展の途上にあつた新進の秋田油田は爲に俄然股盛を來し、同社製油装置、貯油槽等の増設を始め機械類の需要激増したので、其要求に應ずる爲土崎分工場を設け、大正四年五月落成、技師久須美泰治氏主任として其經營に任じた。此工場は爾來十餘年を経て大正十五年十二月閉鎖した。

本社の東京移轉

之より先日本石油株式会社東京移轉の事あり、當社の中央に於ける業務は益々繁劇を加へて、本社の新潟に偏在するを許さざる事情となつた。茲に於て大正六年六月定時株主總會の決議を経て、同年七月一日愈々東京移轉を決行した。同時に東京出張所を廢止し取敢えず之を事務所に充てたけれども、漸次狹隘を告ぐるに至つたので、大正八年日比谷交叉點に近く木造三階建一棟を買取り移轉した。

祝賀會及披露會

本社の東京移轉に先だち同年六月二十四日新潟市の劇場改良座に於て創業二十周年の祝賀會を開き、縣内の官民有力者五百餘名を招待し、元東京高等工業學校長手島精一氏も列席せられ、席上同氏、知事、市長、阪田、寺野兩博士を始め多數の祝辭があつた。又翌二十五日縣内所在の工場従業員千餘名を同劇場に集めて慰安會を開き、社員職工中永年勤続者の表彰を行つたが、何れも頗る盛大で、當社創業以來空前の盛事であつた。

又同年十月一日には東京市築地精養軒に本社移轉披露會を開催した。折悪しく前夜暴風雨の爲月島一圓海嘯に襲はれ、東京工場は浸水四尺に及び、職工食堂倒壊し、社員職工の災害を蒙るもの尠ならず、尙市内外各所に被害があつて交通々信の故障多く、一時は豫定通りの開催を危まれたけれども、招待先に變更の通知をすることも出来ない始末で、來賓數の減じたのは是非もないことであるが、幸に朝野の名士三百名内外の臨席を得、席上山口社長の挨拶に對して仲小路農務大臣、澁澤子爵其他の祝辭あり、最後に笹村専務より會社の事業、將來の方針竝に抱負等を披瀝し、豫想以上の盛況裡に宴を閉じた。

世界大戦

大正三年より七年に互る世界大戦は空前の大事件で、世界の政治、經濟、思想等あらゆる方面に大影響を及ぼし、全然舊態を一變したのであるが、戦時中軍需品の製造、輸入杜絶及輸出激増の爲に我產業界は頗る股賑を極め、從て當社各工場とも未曾有の繁忙を告げ、深夜業を繼續して全力を傾倒し、相當の成績を収むるを得た。

績を収むるを得た。

ディーゼル機

關の製造開始

大正七年一月、英國マールリス・ピッカートン・エンド・デー社との間にディーゼル機關の製造特許權買収に關する契約が成立した。之より先同社との交渉順調に進捗して、其細目協定の爲本儀技師長は山下技師と共に六年七月渡英したのであるが、契約成立するや直に松浦技師は内山、小原の兩職長を帶同渡英して前記兩氏に合し、マールリス社の工場に入つて夫々専門部に就き調査研究を遂げた上、技師長以下四名は同年十一月、松浦技師は更に米國に於ける調査を終へて、翌八年九月、何れも歸朝した。

本儀技師長の一行は歸朝に際し郵船平野丸に便乗せんとしたが、船室を得ることが出来なかつた爲、已むなく汽船ラブランド號で米國に渡つた。然るに平野丸は其航海中圖らずもアイルランド沖で獨逸潛航艇の爲に撃沈せられ、乗客船員殆ど全部遭難したことは吾等の記憶に新なるところである。一行が同船に便乗し得なかつた爲に偶然

災厄を免れたのは誠に天佑と申すべきである。

大正九年六月十九日東京工場に於て發電機直結用三百馬力ディーゼル機關の試運轉を公開し、斯界の學者、専門家等多數を招請して、其批評を乞ふた。本機關はマーリス社の製造特許權の下に製作した最初のものであつたが、成績頗る優秀で、マーリス社の製品に比し遜色なしとの讃辭を得た。此機關は其後間もなく京都市外山科の日本絹布株式會社（現在の鐘紡山科工場）に納入した。船用機關としては漁船用百馬力のものが最初で、同年五月静岡縣の漁船に据付け、是亦寧ろ豫期以上の好成績で、今尙完全に使用されて居る。

蒲田工場の建設

内燃機關の需要増加とディーゼル機關製造開始とにより更に工場の擴張を必要とするに至つた。然るに月島の地は十分なる敷地を得るに難く、且重量品の運搬にも不便なので、大正七年新に東京市外蒲田村に地を相して内燃機關専門工場の建設に着手し、九年九月から一部操業を開始したが、全部

落成したのは十年秋であつた。此工場は内外各工場の長を採り粹を集めたもので、建築と云ひ、機械設備と云ひ、將又工場管理法と云ひ、最も嶄新なる理想的専門工場として當時斯界の注目を惹いたものである。之が現在の蒲田工場であつて、爾來東京工場は全部工作機械の専門工場となつた。

蒲田村は其後迅速なる發展を遂げて間もなく町政を布き、大東京の實現に際し市に編入せられ、工場所在地は蒲田區新宿町となつた。

大正十年十一月二十七日蒲田工場に朝野の名士、關係有力者を招請して工場の觀覽を乞ひ、構内に天幕を張つて落成披露會を開いた。來賓七百餘名で、内藤社長及笹村專務の挨拶に次で農商務次官田中隆三氏、東京帝國大學教授工學博士寺野精一氏其他の祝辭あり、頗る盛會であつた。

第一回増資

大正七年十二月の定時株主總會に於て現在資本金貳百萬圓を五百萬圓に増額の件を議決した。蒲田工場の建設及將來の事業擴張に備ふる

爲である。

大阪出張所開設

大正八年五月大阪出張所を開設した。歐洲大戰の休戦を告げた翌年で、事業界は尙戦時の活況を持続し、製品の販賣、材料の買付等相當に多忙であつた。依て本邦商工業の中心地としての幾多の便宜を利用して市内西區築港に臨時工場を設け、鐵槽、土運船等の建造を引受くる等、次いで來るべき不況對策に腐心した。特に朝鮮に於ける販路の開拓は此時期に於ける同出張所の活動によるものである。昭和二年五月京城出張所開始と同時に主任來山源藏氏京城に轉任し、土崎分工場の主任たりし久須美泰治氏其後を襲ひて益々事業の發展に努め、ディーゼル機關、工作機械の外藥液槽車、空氣壓縮機等各種の製品を關西方面に供給して居る。就中、臨時に工場を設けて大容量の鐵槽を短期間に製作し顧客の急需に應ずる等は當出張所でなくては出來ぬことである。事務所は最初北區堂島日本製鋼所大阪支店の一室を借受けたが、間もなく西區江戸堀北通一丁目に移轉し、超えて昭和七年現在

の北區中之島朝日ビルに移つたのである。

重役の更迭

大正九年八月九日取締役社長山口達太郎氏逝去せられた。氏は先代權三郎氏の後を繼いで日本石油株式會社の取締役たり、當社獨立以來十年間社長として社業に盡された人で、當社事業の發展は氏の力に負ふ所頗る大である。後任は日本石油株式會社の社長にして、當社創業以來最も關係深き取締役内藤久寛氏に決定した。尙取締役補缺としては前社長の令嗣山口誠太郎氏當選就任せられた。超えて大正十一年取締役本間新作氏辭任せられ、技師長本儀正氏補缺として之に代り、同時に長島吉次郎氏新に支配人に任せられた。又同年新潟工場長木川行藏氏病没し、技師鈴木春雄氏之に代つた。

關東大震災

大正十二年九月一日突如として關東一帯を襲ふた大震災は實に今古未曾有の大災害であつて、到る處見るに忍びざる慘狀を現出した。震害固より甚しかつたけれども、之に伴ふて起つた大火の災殃は一層慘酷で、帝都の大

部を灰燼に歸せしめ、無数の生命財産を一日にして奪ひ去つた。此際當社の本社事務所は倒壊した上に焼失し、東京工場も全部烏有に歸した。従業者の生命に異状のなかつたこと、蒲田工場の被害の比較的輕かつたのは不幸中の幸であつた。

之より先蒲田工場には労働争議が起つて七月一日以來罷業中であつたが、震災の爲に争議も解消した有様となり、災後復舊整理に一ヶ月を費して、十月一日より操業を開始した。

又東京工場は此際復興を止め、工作機械の製作を蒲田工場の一部に移して再開したが、其後之を擴張することとなり、大正十三年八月完成した。

減資

大戦後の反動として一般事業界甚しく不振に陥つた矢先、震火の爲に月の島の東京工場を失ひ、多大の損失を蒙つたので、遂に大正十三年六月定時株主總會に於て資本金を四百萬圓に減じ、既拂込金四百五十五萬圓中九十一萬圓を以て繰越損失金を補填するに決した。

ノベル・ディーゼル

機關の製造權買収

當社ディーゼル機關は製作開始以來各方面に好評を博し、其用途の擴まると共に漸次大馬力機關が要求される情勢となつて來た折柄、マーリース社から勧誘を受けたので、技師仲谷新治氏を派遣調査の結果、大正十三年七月瑞典ノベル會社から二サイクル式ディーゼル機關の製造權を買収した。此機關は掃除空氣裝置其他に種々の特長を有し、成績優秀で、船用及發電用として今日までに製作したものが五百馬力より千六百五十馬力まで相當多數に上つて居る。

蒲田工場合併問題

大正十五年後期に於て當社經營上の大問題が起つた。之より先經濟界の不況益々深刻となり、當社の營業愈々困難を加へて來た爲に、其打開策として有力なる經營者を求めつゝあつたところ、其の協議進行中當社より蒲田工場を分離して之を某會社に合併する提案と變じ、數次の交渉を重ねたけれども、相互の主張條件に著しい懸隔があつて遂に不調に終つた。此一事が刺激と

なつて社内上下一致、社運の挽回に全力を傾倒し此難局を切抜けんと決心を固むるに至つた。

重役の更迭

大正十五年十一月取締役社長内藤久寛氏は健康勝れざるの故を以て、又常務取締役本儀正氏は一身上の都合により共に退職せられ、補缺選挙の結果橋本圭三郎氏及長島吉次郎氏當選就任せられた。尙社長は當分缺員の儘で専務取締役笹村吉郎氏が主宰し、長島氏が常務取締役として之を補佐することゝなつた。

技術者の海外視察

製品の改良進歩、作業上の能率増進を圖り、歐米先進國に遜らざる發達を遂ぐる爲に彼地の状況を調査することは、大正年代に於て特に必要であつた。當社は此意味より屢々技術者を派して歐米に於ける技術、經營法等の視察研究に努めしめた。今此時代の渡航者を左に列記する。

技師木川行藏(前新潟工場長) 機械製造業調査の爲、大正二年六月出發、三年五月歸朝

- 同 野口善平(現柏崎工場長) 石油關係機械類調査の爲、大正四年二月出發、六年十月歸朝
- 同 加藤重男(現蒲田工場長) 大正元年十月農商務省海外練習生として渡米、機械製造及工場管理に關する調査研究を終へて大正四年十一月歸朝したが、更に五年六月出發、内燃機關の調査及設備機械購入の爲歐米に出張、六年一月歸朝
- 同 山口八次(現支配人) 工作機械に關する調査の爲、大正五年六月出發、七年五月歸朝
- 同 本儀 正(前常務取締役) 内燃機關に關する調査及英國マリーリス社とディーゼル機關製造特許權買収に關する交渉の爲、六年七月出發、七年十一月歸朝
- 同 山下良彦(現調査部長) 同上
- 同 松浦春吉(現鑄造部長) 鑄造術の調査研究の爲、大正七年二月出發、八年九月歸朝
- 同 技手内山惣吉(現蒲田工場職員) 内燃機關製作技術に關する實習の爲、大正七年二月出發、同年十一月歸朝
- 同 小原貞次郎(現蒲田工場職員) 同上
- 同 技師仲谷新治(現蒲田工場設計部長) 内燃機關の調査及ノベル・ディーゼル機關製造特許權の買収に關する要務を帯び大正十二年二月出發、十三年十二月歸朝

運輸部の閉鎖

近來海運界不振の爲運輸部の成績舉らざるに加へて、所屬船の遭難等あり、強めて之を存續するは却て不利であるから、大正十四年九月之を閉鎖した。

大正年代概観

明治の末年より大正の初期に互つて我經濟界は沈靜期にあつたが、大正三年大戰勃發の爲、同年末より好況に轉じ、戰時中未曾有の繁榮活躍を續けた。然るに大戰終局を告ぐると共に世界的反動期に入り、續いて關東地方大震災の爲に二重の打撃を受けて極度の不況に陥り、萎靡沈衰の裡に大正時代を終つた。

世界大戰は我工業界に著しき刺激を與へて其發達を促がし、各方面共規模の擴張、組織の變革の行はれたるは勿論、技術上の進歩は國産品の實質を向上して歐米一流製品に比し遜色なきに至つたものが多數あつたにも拘はらず、一般國民は尙ほ明治年間の遺風たる盲目的舶來品崇拜の陋習を脱せず、爲に國家經濟上の不利甚大なるに鑑

み、大正の末期に及んで朝野有識者の間に國産振興、國産品愛用の運動が擡頭するに至つたことは、悲境から生れた一快事たるを失はぬ。

當社は日本石油株式會社から分離獨立後間もなく大正時代を迎へ、事業は石油界偏倚の状態より次第に一般的方面に膨脹して來たので、諸事業の盛衰消長の影響を直接全面的に受けることゝなつた。従て大正後半の營業不振は漸次深刻を加へて來たのである。

大正時代に特筆すべきは當社のディーゼル機關製造開始である。其當時は我國に於て製造せられたものは至て少數の軍用に止まり、産業用としては製造する處もなく使用せられたのも極めて僅少であつて、一般にはディーゼル機關の名稱すらも知る人が少なかつたのである。此際、當社が卒先して其製造を始めたのは確かに我産業界に對する一大貢獻であると思ふ。特に本機の利用を最も急速に普及したのは水産方面であつて、之については農林省水産當局の獎勵に依るもの甚だ多い。爾來燃料重油の

供給潤澤となり、其市價の低下するに従て各方面に使用せられ、今日に於ては海陸あらゆる方面に本機關を見ざるなき盛況を呈するに至つた。

四〇

昭和時代

京城出張所開設

昭和二年五月京城府旭町一丁目に京城出張所を開設した。當時朝鮮總督府は産米増殖、鐵道網完成、河川改修等を始め、産業上諸般の施設に大に努力しつゝ、あつたので、從來大阪出張所の主任として朝鮮方面の販路を開拓した來山源藏氏を京城出張所長とし、専ら此方面に當らしめた。其結果頗る良好の成績を擧ぐるを得、特にディーゼル機關は耕地揚水、發電等の原動機として大なる信用を博し、歐米及内地の競争者を凌駕して殆ど獨占的に全鮮各地に供給し、同地方の産業開發に少なからず寄與し得たことは本懷の至である。出張所は昭和七年長谷川町京城ビル内に移轉した。

土崎出張所

大正十五年末閉鎖した土崎分工場の營業事務を繼承して秋田地方の取引に資する爲、昭和二年二月土崎出張所を開設したが、六年六月閉鎖した。

臺北出張員

又臺灣方面販路開拓の目的を以て昭和六年七月から臺北市東門町に臺北出張員を置いたけれども、人員配置の都合上、業務其緒に就くを待たずして翌七年九月廢止した。

二千指示馬力ディーゼル

昭和三年二月四日蒲田工場に於て二千指示馬力ニイガ

ゼル機關の試運轉公開

タ・ノベル・ディーゼル機關の試運轉を公開し、在京の斯界専門家其他官民有力者の觀覽に供した。本機關は瑞典ノベル社から製造特許權を買収した二サイクル式で、新潟水力電氣株式會社の註文に應じ、發電機用として製作したのであるが、我國で現今使用せられて居る陸用機關の最大なるものである。

工作機械工場の移轉

昭和四年十月、豫て新潟工場構内に建設中の工作機械専門工場落成し、同機製作を蒲田から移轉した。同時に蒲田工場は全部之を内燃機關製作に充當して其製産増加を計り、特に機關の修理、部分品の供給等を敏活にして顧客の便を圖ることにした。然るに工作機械の需要は近來急激に増加し、製産力の不足を感ずるに至つたので、最近工場の擴張を行つた。

發動機工場

の分離移轉

当社が多年製作して來た石油發動機は幾多の改良を経て所謂無注水式重油發動機となり、品質優秀の故を以て普く漁業界に顧客を有して居る。同機は從來蒲田工場に於てディーゼル機關と共に製作して來たが、其製産高を増加し、且一層の改良を加へ、價格の低下を圖るには、之を分離するを得策と認め、工作機械の例に倣つて新潟に工場を新設することとし、昭和六年落成した。主なる技術者は蒲田から轉任して操業を開始したが、其後小馬力の二サイクル式ディーゼル機關をも製作することになつて最近工場の擴張を行つた。

之によつて蒲田工場は純粹のディーゼル機關工場となつた譯である。

社長及専務の就任

昭和四年六月定時株主總會終了後互選の結果、専務取締役笹村吉郎氏は取締役社長に、常務取締役長島吉次郎氏は専務取締役に就任した。同年一月蒲田工場長山口八次氏は支配人に轉じて、同工場加藤工作部長は工場長に昇任し、部長を兼ねることになつた。

高速型ディーゼル機關製作

輓近ディーゼル機關の發達は著しく其用途を擴大し、新方面の需要は又新なる研究を促し、互に因となり果となつて、加速度的の進歩を示して居る。就中高速型機關の要求は各種の用途に對して益々熾烈となり、製造者は競ふて其研究に熱中して居る有様である。当社蒲田工場に於ては夙に此趨勢を看取し、久しく研究實驗を重ねて來たのであるが、昭和八年十月、愈々第一回試作品として百馬力機關の竣功を見、同月十二日より三日間に互り試運轉を施行し、主として鐵道、軍部等の關係専門家の觀覽を乞ひ、賞讃を博した。

第二回増資

久しく不振に苦みたる事業界は漸く活況を呈し、当社各工場とも繁忙を告ぐるに至つたので、昭和八年十月十八日臨時株主總會の議を経て資本金を六百萬圓に増額した。之に依つて各工場の内容を整備充實し、多少の擴張を加へて、將來の發展に備へんとするものである。

昭和年代の概観

大正の後期より引續いた經濟界の不況は昭和に入りて一層深刻を加へ、特に二年の財界恐慌はさらでだに氣息奄々たる事業界に殆ど致命的の重壓を加へたる如き觀があつた。今回の不況は其根底甚だ深く、其範圍は世界的で、如何に刻苦惡闘するも我國獨り滔々たる悲況の濁流から脱出することは不可能なりと稱せられた。此時に方つて昭和六年より七年にかけ滿洲事變及上海事變の突發あり、次で帝國の國際聯盟脱退となり、茲に國際的難局を招來して所謂非常時局を生み、今や我國の前途益々多事ならんとして居る。

幸に我政府の不況對策により最近に於ては部分的ながらも景氣回復の兆を見るに至

れると同時に、滿洲國の開發、軍備の充實等工業界の活動を要すること大なるものあり、加之我製造業者の異常なる努力は對外爲替の低落と相俟つて輸出増進の情勢を作り、茲に我工業界は久しく苦んだ悲境から脱出して漸く活況を呈せんとするに至つた。

既往十餘年の受難時代は我國經濟界にとつては誠に困苦其ものであつたけれども、此間に於て我工業界は、内容の整理、設備の改善、能率の増進等あらゆる方面に研究を積み改良を加へて、實質的に歐米先進國を凌駕するに至り、需要者も亦國産品の眞價を認識して無批判的なる舶來品崇拜の舊思想を一掃したる事實は、我國家の爲に貴重なる産物として慶賀に堪へざるところである。

當社の現状

当社創業以來茲に四十年、微々云ふに足らざる北越の小工場から發足して、兎も角

も今日の状態に迄進んで来た。今にして創業時代を顧みて轉た今昔の感に堪へざるものがある。固より今日と雖も尙誇るに足る程のものでは無いが、微力能く幾多の困難を凌いで茲に至つた事は一に江湖の深厚なる御同情の賜として感謝する次第である。左に當社の現状を略記する。

一、資本金六百萬圓 (内拂込金四百五十萬圓)
一、主なる營業品目

- ディーゼル機關 石油鑿井及製油機械
- 重油發動機 鐵槽及水力鐵管
- 工作機械 船舶新造及修理
- 鐵道車輛 蒸汽及空氣鏈
- 汽機及汽罐 浚渫船及掘鑿機

一、所在地
 本社 東京市麴町區丸ノ内三丁目四番地(有樂館内)
 大阪出張所 大阪市北區中之島三丁目三番地(朝日ビル)

京城出張所 京城府長谷川町百十六番地(京城ビル)
 蒲田工場 東京市蒲田區新宿町

新潟工場 (造機部、發動機部) 新潟市山ノ下
 (造船部、工作機械部) 新潟市入船町

柏崎工場 新潟縣柏崎町

長岡工場 長岡市西神田町

一、工場敷地 總計 五九、一二六・二四^坪

一、同 建坪 總計 一六、五一・二六

一、重役及従業員

取締役社長	笹村吉郎
專務取締役	長島吉次郎
取締役	橋本圭三郎
同	鍵富三郎
同	山口誠太郎
支配人	山口誠太郎
監査役	齋藤庫之助

務所階上會議室に御少憩の後、笹村社長、長島専務取締役、山口支配人及同工場各部長に謁を賜ひ、笹村社長の言上する會社沿革及營業概要を聞召され、引續き同工場を隈なく御巡覽あり、十一時頃記念の撮影を差許され、諸員奉送裡に御歸還あらせられた。

李王殿下台臨

昭和九年二月十五日午前十時、李王殿下には當社新潟工場へ御成あり、山ノ下の事務所に御少憩の後笹村社長、鈴木工場長等に拜謁仰付られ、笹村社長の言上する會社沿革并に現況を聞召されたる上、同工場を隈なく御巡覽、同十一時記念の撮影を差許され、諸員奉送裡に御歸還あらせられた。斯の如く屢々皇族各殿下の台臨を辱うしたるは、當社無上の光榮である。重役以下一同有難き御思召に感激して、將來一層努力奮勵し、以て聊か國家産業の發達に貢献せんと欲する次第である。

歴代社長小傳

前々社長 故山口達太郎氏

當社獨立後最初の社長故山口達太郎氏は山口權三郎氏の長男にして、安政五年六月九日新潟縣刈羽郡横澤村に生れた。山口家は中越の素封家にして、特に權三郎氏は政治、實業、教育等公共の事に盡瘁し、内藤久寛氏等と共に日本石油株式會社を創立せる外、或は獨力實業學校を起し、實業に熱心なる學生を選抜して貸費修學せしめ、或は巨費を投じて道路を修め、或は基金を寄附して備荒組合を組織する等美譽頗る多く、從て同地方に於て甚だ重きをなして居た。

達太郎氏は幼にして穎脫の聞えあり、父翁權三郎氏が公共の用務繁多にして家に在ること少なかつたので、氏は少時より常に其留守を處理し、山口家の基礎をして益々

鞏固ならしめた。

明治三十五年十月權三郎氏病歿の爲家督を相續し、父君の遺業を繼ぎて各種の事業に盡力さるゝこと、なつたが、其關係の銀行會社は頗る多數に上り、日本石油會社、長岡銀行、柏崎銀行、新潟農工銀行、百三十九銀行、北越製紙會社等に各重役たる外、明治四十三年當社が日本石油會社より分離獨立すると共に其社長に推され、或は東京山口銀行、北越水力電氣會社、日本水力電氣會社、日本電氣會社等を起し、何れも社長として盡瘁する等、中央、地方の事業界に貢献せられたること甚だ多い。

氏は年少時代より衆望を負ふて村政に參與し、地方の振興に盡さるゝ所少なくなかつたが、明治三十七年には新潟縣郡部より推されて衆議院議員となり、日露戰役の功に依り勳四等に敍せられた。氏は育英事業に最も志厚く、多年學生の養成に力められた中にも、新潟縣山口獎學資金の如き、實に其の寄附に係るものであつて、之に依り學を修め、身を立てた秀才頗る多數に上つて居る。

大正六年十二月、氏が多年公共事業に盡力せるの故を以て、賞勳局總裁より勅定藍綬褒章を賜ひ、其善行を表彰された。

氏資性明敏にして質實、家に巨萬の富あるに拘らず儉素自ら持して敢て誇らず、勤勉力行、其の關係する會社銀行等諸事業の繁榮を樂みつゝ、一生を終始された。大正九年八月九日病を以て逝く、享年六十三歳。其の危篤の報天聽に達するや、特旨を以て從六位に敍せられた。

氏三男一女あり、長男誠太郎氏家を繼ぎ、當社及び日本石油會社を始め、父君關係の諸會社銀行に重役として盡力し、隱然財界に重きをなして居られる。

前社
長 内 藤 久 寛 氏

當社前社長内藤久寛氏は安政六年七月二十二日新潟縣刈羽郡石地町に生る。父久之氏、母貞子の君。

内藤家は越後に於ける舊家で、大名に亞ぐの門閥として知られ、代々各藩の知行米を預り或は之に金融をなし、非常の勢力を有して居たものであるが、家運次第に衰へて、久寛氏の出生當時から少年時代に於て生計の不如意特に甚しかつた。氏は此間に在りても青雲の志止まず、明治六年十五歳の時無斷出奔して横濱高島學校に英學を學んだが、病の爲幾何も無く歸國し、爾來専ら家業の酒造業に従事して、一家の恢弘に努力された。

明治二十一年五月、山口權三郎、牧口莊三郎、本間新作、久須美秀三郎、岸宇吉諸氏と共に日本石油株式會社（資本金十五萬圓全額拂込）を創立し、内藤氏は其の常務理事となり、三島郡尼瀬の海面を埋立て、石油井を掘鑿した。是れ本邦に於て石油事業が近代的産業として發足せる第一歩である。越えて二十三年には米國より綱索式鑿井機械を輸入して機械掘に成功し、大に出油量の増加を來した。明治二十八年、氏は山口氏等と謀り日本石油株式會社の附屬事業として新潟鐵工所を新潟に新設した。

之より先明治十八年、氏は新潟縣會議員に選舉されたが、明治二十七年三月、改進黨より推されて衆議院議員に當選し、六月議會解散の後を承けて九月執行の總選舉に再選された。

明治三十年五月、氏は農商務省の囑託を受けて歐米石油事業視察の途に上つた。先づ米國に渡航して各地の石油事業を視察せる上歐洲に渡り、英、佛、獨其他の諸國を経て露國に到り、其石油事業を調査して十二月初歸朝された。外遊半歳、親しく歐米の富強を見て深く感ずる所あり、歸來一切の政治的關係を斷つて専心一意、其の社長として主宰する日本石油株式會社の事業に盡力さるゝことゝなつた。

日本石油株式會社は其後順調に發達して明治三十二年には本社及製油所を柏崎に移し、明治四十年には紐育スタンダード石油會社經營のインターナショナル石油會社の事業財産を買收し、明治四十二、三年頃よりは新潟縣下各油田の外、秋田油田の開發に著手する等、其事業の發展、誠に目覺ましきものあつた。此間、明治三十七年、氏

は再び米國に渡航し、各地石油事業を視察して、自社の事業發達に資する所多かつた。大正三年秋田黒川の日本石油株式會社油田に日産一萬石の巨井の出づると共に、石油事業は一段の躍進を告げ、同社は東京に移轉された。大正十年日本石油株式會社は寶田石油株式會社と合併して資本金八千萬圓の大會社となつた。斯くて氏は依然其社長として我國石油事業の發達に努力されつゝあつたが、大正十五年三月に至り健康勝れざる爲め辭任された。

内藤氏の石油事業に於ける、拮据實に四十年、其功其勞誠に大なるものがある。其昔、山師の仕事として輕んせられた石油事業が今日國家重要な産業として目せられるやうになつたのは、時勢の變化に因るとは云へ、斯業の中心に内藤氏の如き人物ありて銳意努力せられたるに本づくもの多い。其功勞に依り氏は明治四十二年六月賞勳局より勅定綠綬褒章を賜はり、大正四年十一月大正天皇御即位の大典に際して正六位に敘せられ、大正十四年十二月貴族院議員に勅選された。又大正十二年社會局參與

仰付られ、現に其任に在る。

其の當社に於けるや、創設以來事業の發達に盡力せらるゝ所多く、特に開業當初、各種の災厄相次ぎ、經營困難を極めたる際には、之を有利に展開せしむる爲、百方苦心せられたものである。明治三十年笹村現社長の入社するや、氏は深く之を信任して、社内の改革、事業の向上につき自由に手腕を揮はしめ、爲に大に社業の發展を見るに至つた。明治四十三年當社が日本石油株式會社より分離獨立せる際には之が社長に推されたるも、辭して山口達太郎氏を推薦し、側面より之を助けられた。大正九年山口氏逝去の爲社長に就任し、直接社業を管掌されたが、同十五年日本石油株式會社社長を辭せる後、間も無く當社長をも辭された。當社の今日あるもの、氏に負ふ所のもの頗る多きは呶々を要せざる所である。

氏爲人篤敬にして寛厚、自ら長者の風あり、しかも其の事業に對し、國家に對するや、熱誠人を動かさざれば止まざるものがある。當年七十有六にして尙ほ風月を友と

するの隠遁生活に甘んぜず、依然各種の公共事業に盡力されて居るのは、國家の爲誠に慶すべきである。

尙ほ令夫人佐賀子刀自は溫良恭儉、夙に賢夫人の聞えあり、夫君を助けて専ら家事に任じ、五十餘年の久しき、敢て渝る所が無い。内藤家の今日あるもの其力に依るもの多しとは、久寛氏の常に人に向つて語らるゝ所である。

現社 笹村吉郎氏

當社現社長笹村氏は舊長州萩藩士笹村吉郎氏の長男として慶應三年四月十一日萩町（現萩市）川島村に生る。初め萬藏と稱したが、大正五年三月二十九日先考の名を襲ひて吉郎と改名した。

先考吉郎氏は山口縣美禰郡太田村平民笹村清左衛門氏の長男なるも、分家して士族に列したのである。維新革命後多少の貯蓄もあつたが、明治八年頃同志と共に山林事

業に投資せるに、所謂士族の商法の例に漏れずして失敗し、其後製藍業に著手して又失敗を重ね、爲に氏の少年時代には家政不如意にして衣食にすら窮するに至つた。氏は初め寺小屋式の私塾に漢籍其他を學び、後小學校制度の行はるゝと共に之に入れるも、卒業後進んで中學校に入るの資無く、家に在りて製藍業を手傳ひ、父子共に勞働に従事した。其傍ら岡田謙道、中村鼎兩氏に就き漢籍類を、又友人木川榮一氏（故大審院判事堀榮一氏）より數學、英語を學んだが、此間に於ても刻々に加はり來る一家の窮狀は氏の發奮を促して止まざるものあり、百方苦慮の末、明治十六年春山口縣立師範學校に入學した。是れ同校に入れば縣費を以て修學し卒業後は小學教師として相當の收入を得るの便があるからである。

明治十八年師範學校卒業、同縣下船木小學校長兼訓導に任せられ、月俸十二圓を給せられた。是れ氏の俸給生活の初である。茲に於て家庭は其の潤ひを受けて、漸く窮迫の底から脱することが出來た。しかも向上の念鬱勃たる氏は更に高等の學を修めて

實業界に入らんことを志し、在職四年間に貯へ得た若干の資金に加ふるに叔父の援助を得て、明治二十一年初夏上京、翌二十二年職工學校（後の東京高等工業學校）機械科に入學し、螢雪の效を積みて明治二十五年卒業した。

氏は卒業後先づ東京石川島造船所に製圖見習として入社し、同所長工學博士進經太氏の推薦にて幾何も無く島根縣銅ヶ丸鑛山に轉じ、初めは日給三十錢の手當に甘んじて、刻苦精勵、大に其の才幹を認められ、累進して機械課長に迄なつたが、明治三十年銅價下落の爲同鑛山は非常の悲境に陥り、事業縮小の方針を取るに至つたので、鑛長以下氏等幹部は辭任することゝなつた。偶々前々年創立して尙建設途上にある新潟鐵工所に於て人事刷新の議あり、氏は工學博士阪田貞一氏の推薦に依り八月其招聘を受け、入つて技師長となつた。

時恰も當所は創業早々設備未だ完からざるに、能力不相應なる註文品を引受け、製作頗る困難の状態にあり、加ふるに一時に多數の職工を東京方面より雇入れたる爲め

綱紀の弛廢甚しかつたが、氏は能く之に善處健闘して幾難關を突破し、二個年にして漸く前途の光明を認むるに至つた。此間の事情は詳しく當社沿革概要の中に述べられてあるが、氏は實に身命を賭して日夜不休の奮闘を續けられたのであつた。其の熱誠と手腕とは大に日本石油株式會社社長内藤久寛氏の認むる所となり、爾來内藤氏は鐵工所經營の一切を擧げて笹村氏に一任せらるゝに至つた。

氏の入社以後に於ける新潟鐵工所の歴史は即ち氏自身の傳記にして、當社の大事小事、一として氏の關與せざるものが無い。明治三十三年米露に渡航して斯業を視察し、歸來只管我が鐵工所の發展に盡瘁せられ、明治四十三年當社が日本石油會社より分離獨立して株式會社組織となるや、擧げられて専務取締役となり、時運に應じて益々社業の充實擴張を計り、以て今日の基礎を確立した。昭和四年六月取締役社長に選任せられ、引續き現在に造んで居る。斯くの如く當社の進展隆昌はすべて氏の力に負ふて居るのであつて、世間にて新潟鐵工所の笹村か、笹村の新潟鐵工所かと噂する者あ

るも故あることである。

氏は事業上に於て一人一業主義を厳守し、入社以來三十八年一意専心社業に精勵するの外、一切他に力を頼たない。当社が相當發展を來したる後も、其經營は必しも常に順調ならず、或は不慮の災厄を蒙ること數次に及び、或は深刻なる不景氣の影響を受け、爲に屢々困難の状態に陥り、大正十二年の大震火災の爲遂に減資を餘儀なくせらるゝに至つたが、かゝる際にも氏は他日の飛躍の爲によく忍び、よく耐へて、其盡す可き道を盡すに餘念なかつた。而して今や漸く其苦心は酬らられて、当社々業は再び繁榮の春を迎へ、資本金の如きも一躍六百萬圓に増資せらるゝに至つた。

茲に特記す可きは氏が多數従業員を見ること恰も子の如く、常に之を慰撫して措かず、従業員亦氏を見ること父の如くにして、爲に社中協力一致、一絲紊れざるの美風を形作つて居ることである。現幹部はすべて氏の薫育を受け、苦樂を共にし來つた者で、勤續二十五年以上の者多數を占めて居るが、是れ偏に氏の徳望の然らしむる所と

いふて差支無い。氏は又自己の縁者は一人といへども會社に使用せざることゝし、嚴重に之を實行して居るので、社中に偏頗、依怙の沙汰を聞くこと絶えて無い。

氏は大正十五年十月、日本産業協會總裁伏見宮博恭王殿下より多年内燃機關其他の鐵工業に従事し斯業の發展に資せる廉により、又昭和五年十月、大日本水産會總裁同宮殿下より漁船用ディーゼル機關を完成して漁業の發達に寄與する所尠なからざる廉により何れも表彰せらるゝの光榮に浴した。氏、公共事業に志深く、現に商工省工業品規格統一調査會委員、東京鐵工機械同業組合代議員會議長、漁船機關士協會顧問、藏前工業會理事長、機械學會監事等たる外、多數團體に盡力して、我國産業の發達に貢獻されて居る。

氏、エイ子夫人との間に二男三女あり、夫人は貞淑賢明にして内助の功頗る多く、且つ常に懇切に社員職工を遇せられたので、従業員之之を見ること慈母の感あつたが、不幸病を得て昭和四年八月他界された。氏の哀痛はいふも更なり、当社従業員は

何れも今に之を惜み合つて居る。

重役支配人の異動

<p>山口 達太郎</p>	<p>笹村 吉郎 (萬藏改)</p>	<p>内藤 久寛</p>	<p>本間 新作</p>
<p>明治四十三年六月十七日創立總會に於て取締役に選任、互選により取締役會長に就任、大正六年六月二十三日定款の改正により取締役社長に就任、大正九年八月九日逝去。</p>	<p>明治三十年八月七日日本石油株式會社新潟鐵工所技師長に就任、明治三十二年四月二十日同所長に就任、明治四十三年六月十七日創立總會に於て取締役に選任、互選により専務取締役に就任、昭和四年六月二十四日互選により取締役社長に就任。</p>	<p>明治四十三年六月十七日創立總會に於て取締役に選任、大正九年九月二十七日臨時株主總會に於て互選により取締役社長に就任、大正十五年十一月三十日辭任、大正十五年十二月二十三日定時株主總會に於て相談役に推薦、昭和三年十一月三十日辭任。</p>	<p>明治四十三年六月十七日創立總會に於て取締役に選任、大正十一年六月二十三日辭任。</p>

鍵 富 三 作	明治四十三年六月十七日創立總會に於て取締役に選任。
中 野 貫 一	明治四十三年六月十七日創立總會に於て監査役に選任、明治四十五年五月十三日辭任、昭和三年二月二十五日逝去。
松 方 乙 彦	明治四十三年六月十七日創立總會に於て監査役に選任、大正三年六月二十日辭任。
齋 藤 喜 十 郎	明治四十三年六月十七日創立總會に於て監査役に選任、大正四年三月八日辭任。
久 須 美 秀 三 郎	明治四十五年六月二十日定時株主總會に於て監査役に選任、大正十一年六月二十三日辭任、昭和三年一月十八日逝去。
中 野 忠 太 郎	大正三年六月二十日定時株主總會に於て監査役に選任、昭和四年六月八日辭任。
齋 藤 庫 之 助	大正四年六月二十日定時株主總會に於て監査役に選任。

山 口 誠 太 郎	大正九年九月二十七日臨時株主總會に於て取締役に選任。
本 儀 正	明治四十一年三月十八日日本石油株式會社新潟鐵工所造船部主事に就任、大正十一年六月二十三日定時株主總會に於て取締役(常務)に選任、大正十五年十一月三十日辭任。
久 須 美 東 馬	大正十一年六月二十三日定時株主總會に於て監査役に選任、昭和三年十月二十三日辭任。
橋 本 圭 三 郎	大正十一年六月二十三日定時株主總會に於て相談役に推薦、大正十五年十二月二十三日定時株主總會に於て取締役に選任。
長 島 吉 次 郎	明治四十三年六月二十五日監事兼經理課長に就任、大正十一年六月二十三日支配人に選任、大正十五年十二月二十三日定時株主總會に於て取締役(常務)に選任、昭和四年六月二十四日互選により専務取締役に就任。
中 野 孝 次	昭和四年六月二十四日定時株主總會に於て監査役に選任。

結城豊太郎	昭和五年六月二十三日定時株主總會に於て監査役に選任、同年九月三十日辭任。
山口政治	明治二十八年六月八日日本石油株式會社新潟鐵工所支配人に就任、同三十年九月二十五日辭任。
大塚太平治	明治三十年九月六日支配人心得に就任、明治三十二年四月二十日辭任。
山口八次	昭和四年一月一日支配人に就任。

新潟鐵工所年表

年次	會社記事	社會記事
明治二七	八月五日日本石油株式會社支店新潟鐵工所創立の議決す。工場的位置を新潟市山ノ下に定め、建設の準備に着手す。	七月二十五日日清兩國間に戦端開かる。
二八	六月八日山口政治氏を支配人に、野村亭作氏を技師長に任す。 六月十六日創立事務所を設く。 八月三十日事務所新築成り、創立事務所を撤す。 九月自用コーニッシュ型汽罐の製造に着手す。 此年事務所、工場、倉庫等六棟竣成す。	四月二十七日日清媾和條約締結。 四月二十三日佛、獨、露の三國干涉。 五月十日遼東還付に關する詔勅下る。
二九	二月六日英國製主要機械到着す。 五月八日第一回の製品なる汽機汽罐竣工す。 六月二十三日北越鐵道株式會社との間に車輛製造契約を締	四月七日改正船舶検査法公布。

結す。
十一月十一日鑄工場より發火、工場悉く烏有に歸す。
十一月二十五日工場復舊、操業を開始す。

三月十七日汽船松前丸機關修理を依頼せらる。機關の引受は之を以て嚆矢とす。(五月二十九日竣成)
三月三十一日安進丸より汽機汽罐の製作、五月二日六甲丸より同様の註文を受く。

八月七日笹村萬藏氏(後吉郎と改名)技師長に就任す。
九月六日大塚太平治氏支配人心得を命ぜらる。
九月二十五日山口支配人辭任。
十二月三日、米露兩國へ出張の日石本社事務取締役内藤久寛氏歸朝。

四月十九日安進丸汽機汽罐の据付を了したるも、成績不良の爲め九月二十六日解約の通知に接す。

三月二十二日六甲丸の汽機汽罐の試運轉を行ふ(受註後實

二月八幡に製鐵所設立。

三月遠洋漁業獎勵法公布。
同月二十九日貨幣法公布。
(十月一日より實施)

此年機械學會、造船協會創立。

七月十六日より民法實施。
日本石油會社西山油田勃興。

三月商法改正(六月十六日

に一年十一月)。
四月十一日東京石油商小倉常吉氏より註文のタンクカー十輛の内三輛、九月三日試運轉を行ふ。是れ當社に於ける油槽車製作の嚆矢なり。

四月二十日大塚支配人辭任、笹村技師長新潟鐵工所長に就任す。
四月笹村所長米露兩國へ出張、十二月歸朝。
十月柏崎分工場を設置し、林嘉政氏に主任を命ず。

八月新潟市に一府十一縣聯合共進會開催に付鑿井機械一式出品。
此年石油業旺盛にして鑿井及製油機械の註文續到す。

三月二十四日長岡市鈴木常作氏所有の鐵工所を買收して長岡分工場を設け、春山鍵太郎氏に主任を命ず。
此年新津分工場を設立し、岡島數之助氏に主任を命ず。

實施)、特許法、意匠法、商標法制定。
三月八日船舶法公布。

一月シベリヤ鐵道浦鹽迄開通。
二月八幡製鐵所より作業開始。
五月山陽鐵道本線全通。

一月日英同盟成る。
五月、東宮殿下(大正天皇)有栖川宮威仁親王殿下御同

十月十二日日石本社取締役山口權三郎氏逝去。

七二
行、新潟縣石油産地に行啓
あらせらる。

三六
六月二十九日より九月二十六日迄米國機械技師エーチ・エ
ー・スチーブンス氏を備聘す。
大阪市に開催の第五回内國勸業博覽會に鑿井機械一式出
品、一等賞を授けらる。
九月十六日社用渡船石油發動機裝備第一鐵工丸竣功す。
十月七日技師木川行藏氏を採用し、新潟工場長を命ず。
十月インターナショナル・オイル會社石狩油田用タンク五
個組立の註文を受く。
十一月二十五日直江津分工場を設立開業す。

三七
一月技師野口善平氏に柏崎分工場主任を命ず。
三月三十日日石本社内藤社長石油業視察の爲渡米す。
五月米國聖路易市に於て開催の萬國博覽會に鑿井機械外十
八點を出品、名譽銀牌を受く。
此年造船業開始の緒に就き、十一月二十八日入船町に地所

二月十日日露兩國間に戦端
開かる。

三八
九千七百餘坪を買収す。
此年軍需品の急需あり、工作機械の註文は五十臺に及び、
非常時操業に従事す。

三月十日皇軍奉天占領。
五月二十七日日本海々戰大
勝。
九月五日日露媾和條約締
結。

三九
三月二十四日長岡分工場全焼、直ちに再築に着手、一週間
後には操業再開す。
三月二十八日日石本社臨時總會に於て當所資本金を拾萬圓
より五十萬圓に増額の件を議決す。
四月二十日森泰次郎氏入社、當所經理部主事に就任す。
六月十日造船部建造の第一船木造汽船竣功、第一日本海丸
と命名進水す。
六月品川沚朗氏新津分工場主任を命ぜらる。
七月十日日石本社に於て第一回分工場主任會議開かる。
七月二十一日日石本社常務取締役渡邊忠氏老齡に付辭任。
八月一日造船部技師として鈴木春雄氏を採用す。小宮技師
病氣辭職に付其後任とす。
高谷出張所を設置し、新津分工場の設備を之に移して同工

三月鐵道國有法公布。
平和克復後外資輸入等の爲
金融緩漫、事業勃興、一般
に活況を呈す。

	<p>場を廢止す。 十一月一日、日石本社臨時總會に於て資本金二百四十萬圓を金五百萬圓に増資することに議決す。</p>	七四
四〇	<p>三月七日造船部第二船二百噸汽船建造中大竹貫一氏に賣約成り、間宮丸と命名進水す。 三月十二日臨時株主總會に於て日石本社は更に増資して資本金を一千萬圓とすることを議決し、同時に附屬鐵工所の元入金五十萬圓を二百萬圓に増加す。 六月一日日石本社はインターナショナル・オイル會社を買收し、其引繼を了す。 十一月八日より徒弟教育に學科を加へ、從來の實地作業教育の足らざるを補ふ。 十二月四日、豫て製作販賣權を得たる淺川權八氏發明石油發動機用噴油器を當所製二サイクル式發動機に附し發賣す。</p>	三月八日新潟市に大火あり
	三月八日工學士本儀正氏造船部主事に就任す。	

四一	<p>四月二十五日東京市京橋區本材木町三丁目日石本社販賣店內に鐵工所東京出張店を置き、高谷出張所品川主任此に轉任す。加藤鏡松氏に高谷出張所主任を命ず。 五月十八日鋼鐵製帆走油槽船寶國丸進水す。是れ本邦に於ける油槽船建造の嚆矢なり。 六月二十四日造船部鐵船機械工場建築を入札により新潟市高橋某に請負はしむ。 七月坂田貞一博士、寺野精一博士及内務省技師中川吉造氏來所、造船工場及修船架の位置を調査せらる。 此年ダン式船用石油發動機の製作販賣を開始す。</p>	<p>燒失千百數十戸に達す。 九月四日同市に再び大火あり、二千百數十戸烏有に歸す。 十月十三日戊申詔書煥發。</p>
四二	<p>六月五日鐵工所運輸部所管船にして小樽西谷氏備船中の第五日本海丸青森灣内にて火を發して沈没し、行衛不明約百二十五名に達す。 六月十一日日石社長内藤久寛氏勅定綠綬褒章を授けらる。 十月四日逡信大臣兼鐵道院總裁男爵後藤新平氏當所を視察せらる。 十二月九日日石本社監査役山口萬吉氏逝去。</p>	七五

十二月十八日長岡分工場主任春山健太郎氏死去に付、同工場は當分柏崎分工場主任野口善平氏に兼掌せしむ。

一月二十七日造船部製材工場より發火、同工場及附屬建物二棟、機械工場一棟を焼失す。

三月五日當所經理部樓上に於て重役會議開催、新潟鐵工所を日本石油株式會社より分離獨立せしむる件を株主總會に附議することを議決す。

三月六日臨時株主總會開催、滿場一致を以て資本金二百萬圓の株式會社新潟鐵工所を創立し、日本石油株式會社新潟鐵工所の財産全部を買収し、其營業及一切の權利義務を繼承することを議決す。

四三

四月一日より株式を募集す。

五月英國倫敦に開催の日英博覽會に鑿井機械十三點を出品名譽金牌を受く。

六月十七日株式會社新潟鐵工所創立總會を開き、附議の案件を可決す。

當夜新潟市鍋茶屋に於て創立披露會を開催す。

六月幸徳一派の大逆事件發覺。
八月二十九日韓國併合條約締結。

六月二十五日法學士長島吉次郎氏入社、監事兼經理課長に就任。
七月直江津分工場を閉鎖す。
十一月造船部修船架工事成り、續々上架の申込あり。

四月五日内務省新潟土木出張所註文エキスカベーター二臺竣成す。引續き東京土木出張所其他より十數臺の註文あり。
十一月十九日越後鐵道會社より客車貨車全部の註文を受く。

四四

三月電氣事業法公布。
四月工場法公布。(四十五年實施の處延期せられ大正五年實施)
十月二十日越後鐵道起工式舉行。

五月十三日監査役中野貫一氏辭任す。
六月二十日定時株主總會に於て久須美秀三郎氏監査役に當選就任す。
此年名古屋より初めて鋤鏈式浚渫船白鳥丸の註文あり。
十月九日技師加藤重男氏各種内燃機關製造業視察の爲め渡米す。
十二月二十日東京市月島に分工場設立の爲め建築に著手す

四五
大正
元

七月三十日明治天皇崩御。
日本石油會社新式ロータリ
1 鑿井機械を購入し、本邦
鑿井技術に一新生面を開く。

<p>二</p> <p>五月一日東京分工場建設成り運轉を開始す。同日東京出張店を新事務所に移し東京出張所と改稱、技師山口八次氏に主任を命ず。</p> <p>六月四日工作課長木川技師歐米視察の爲め横濱を出發す。富山市に開催の一府八縣聯合共進會に陸船用石油發動機を出品し、一等賞金牌を受く。</p>	<p>五月二十五日日本石油會社秋田黒川油田ロ式五號井大噴油をなす。</p> <p>六月二十八日奧國皇太子及同妃暗殺せらる。七月世界大戰勃發。八月二十三日對獨宣戰。</p> <p>十一月十四日青島占領發表。</p>
<p>三</p> <p>三月東京に開催の大正博覽會に鑿井機械、石油發動機を出品、二等賞銀牌を受く。</p> <p>木川工作課長滯米中病を得て五月歸朝す。</p> <p>日本石油會社より五十輛の二十噸タンクカー外多數の油槽の註文を受く。</p> <p>六月二十日監査役松方乙彦氏辭任す。</p> <p>九月二十三日東京出張所主任山口八次氏に東京工場主任を命じ、設計課長本儀正氏に東京出張所長を命ず。</p> <p>十二月重役會に於て秋田地方に分工場設立の件議決せられ、準備に著手す。</p> <p>此年製罐工場を山ノ下より入船町に移し、造船部に合併す。</p>	<p>十一月十日大正天皇御即位大禮を行はせらる。</p>

<p>四</p> <p>一月柏崎兼長岡分工場主任野口技師の兼務を免す。</p> <p>二月六日柏崎分工場主任野口善平氏歐米機械工業視察の爲渡米す。</p> <p>三月八日監査役齋藤喜十郎氏辭任す。</p> <p>五月十五日土崎分工場の建築落成し、作業を開始す。</p> <p>十一月十六日、機械製造業研究の爲米國に渡航せる加藤技師歸朝す。</p> <p>歐洲戰爭の爲め東京砲兵工廠より多數旋盤類の註文あり。</p>	<p>三月戰時利得稅法公布。</p> <p>四月十五日英國造船材料の輸出を禁止す。</p> <p>十一月三日迪宮裕仁親王(今上陛下)立太子の禮を行はせらる。</p>
<p>五</p> <p>二月十日より當社株式東京株式取引所定期取引に上場す。</p> <p>四月一日より新潟米穀株式取引所に於て定期及直取引の賣買を開始す。</p> <p>此年春東京工場内に小規模の工作機械部を併設す。</p> <p>三月十六日東京出張所を東京工場内より麴町區有樂町三丁目五番地に移轉す。</p> <p>東京に開催の海事水産博覽會に船用石油發動機を出品、金牌を受く。</p> <p>六月七日山口技師は機械製作工業視察の爲め、加藤技師は機械購入の爲め何れも米國に向け渡航す。</p>	

八月二十日朝香宮鳩彦王殿下新潟市山ノ下工場を台覽あらせらる。

九月一日より工場法施行につき各工場夫々工場管理人を選任す。

十二月東京工場内工作機械工場擴張工事に著手す。

十二月二十日技師渡邊儀助氏に長岡分工場主任を命ず。

一月二十二日、機械購入の爲め歐米出張中の技師加藤重男氏歸朝す。

昨冬來東京工場構内に建築中の工作機械工場竣功す。

六月二十四日新潟市改良座に於て創業二十周年祝賀會を舉行す。

七月一日當社本店を東京市麴町區有樂町三丁目五番地に移轉す。

七月六日技師長本儀正、技師山下良彦兩氏ディーゼル機關製作の用務を帯び横濱出帆米國を経て英國に渡航す。

八月二十九日東京工場職工同盟罷業し、九月一日迄休業す。

三月九日露國に革命起り、皇帝退位す。
四月六日米國對獨宣戰布告、歐洲へ出兵。

六

十月一日築地精養軒に於て本店移轉の披露會を開催す。
十月三十一日渡米中の技師野口善平氏歸朝す。
十一月東京工場内鑄工場落成し、技師松浦春吉氏新潟工場より東京工場に轉勤す。

一月英國マリーリス・ピッカートン・エンド・デー社より四サイクル式ディーゼル機關の製造及特許權を買收す。
二月よりディーゼル機關製作工場敷地として東京府下蒲田村に土地の買收に著手す。

二月二十七日技師松浦春吉氏及職長二名ディーゼル機關製作研究の爲米國經由英國に渡航す。

三月十二日夜本社渡船石油發動機艇第一鐵工丸信濃川に於て顛覆し、社員職工三十名溺死す。

四月七日農商務大臣仲小路廉氏新潟工場を視察せらる。

五月二日、渡米中の技師山口八次氏歸朝す。
六月運輸部を新潟工場に再開す。
十一月二十七日技師長本儀正氏、技師山下良彦氏及二職長歸朝す。

十一月九日獨帝退位宣言。
十一月十一日世界大戰休戰條約調印せらる。
同日チエッコ共和國成立發表。
十二月五日英國鐵製品輸出解禁の旨七日着電、關西鐵商破綻。

七

十二月二十三日定時株主總會に於て資本金を五百萬圓に増額の件議決せらる。

一月八日本店を麴町區有樂町一丁目三番地に買入れたる木造三階建事務所に移轉す。

五月二日、豫て試作中のディーゼル第一機船用百馬力運轉臺上に回轉を始む。

五月十八日より大阪市北區堂島濱通り日本製鋼所支店內に當社派出員を置く。

七月下旬蒲田工場内機械工場一千七百三十七坪の新築工事を清水組に請負はしむ。

九月十三日英國出張中の技師松浦春吉氏歸朝す。

十月一日大阪市西區江戸堀北通一丁目十一番地に大阪出張所を置き、技師來山源藏氏に主任を命ず。

十一月十日より八時間制實施、同時に職工の日給を時給に改む。

十二月十四日新潟工場入船町事務所改築成り、之に移轉す。

六月二十八日歐洲大戰の媾和條約締結せらる。

八

<p>九</p> <p>六月十九日東京工場に於て最初のマリーリス型四サイクル空氣噴油式陸用三百馬力ディーゼル機關完成し、試運轉を行ふ。</p> <p>八月九日當社取締役社長山口達太郎氏逝去。</p> <p>九月二十三日蒲田鑄物工場九百二十四坪の新築を清水組に請負はしむ。</p> <p>九月二十七日臨時株主總會開催、取締役補缺として山口誠太郎氏當選就任す。同日取締役の互選により内藤久寛氏社長に就任す。</p> <p>九月技師長本儀正氏を蒲田工場長に、技師加藤重男氏を同工場主任に任ず。</p> <p>九月下旬より蒲田工場一部の操業を開始す。</p> <p>此年東京蒲田兩工場財團を設定し、之を擔保として日本興業銀行より金五十萬圓を借入る。</p>	<p>三月十五日俄然財界に大反動起る。</p> <p>四月七日恐慌來の爲銀行取付頻發し、政府財界救済を聲明す。</p> <p>五月二日我國最初のメーデー上野公園に舉行せらる。</p>
<p>本年下半年より新潟工場は鐵道省指定工場となる。</p> <p>七月十日海軍大臣加藤友三郎氏、海軍大將島村速雄氏新潟工場を視察せらる。</p> <p>八月日本興業銀行よりの借入金五拾萬圓を返済し、日本勸</p>	<p>此年日本石油株式會社は寶田石油株式會社と合併す。</p> <p>十一月十二日米國華盛頓に於て第一回海軍々縮會議開</p>

一〇

業銀行より財團擔保にて金壹百萬圓を借入る。
十一月大阪市に開催の農商務省主催工作機械展覧會に工作機械三種を出品し、一等賞状を授與せらる。
十一月二十七日蒲田工場機械工場及鑄造工場落成につき、其披露會を同工場廣場に於て開催す。

八四
かる。
十一月十四日總理大臣原敬氏東京驛に於て遭難薨去せらる。
十一月二十五日皇太子殿下攝政の任に就かせらる。

一一

一月二十四日新潟工場長木川行藏氏病死す。
二月七日技師鈴木春雄氏を新潟工場長に任す。
四月十二日山階宮萩麿王殿下蒲田工場に台臨、工場を御視察あらせらる。
四月東京市に開催の平和博覽會に發電機直結三百馬力ディーゼル機關及工作機械三種を出品し、名譽賞牌を受く。
六月二十三日取締役本間新作氏、監査役久須美秀三郎氏辭任、其補缺として取締役に本儀正氏、監査役に久須美東馬氏當選就任す。同日監事長島吉次郎氏支配人に選任せらる。
尙橋本圭三郎氏を相談役に推薦す。
六月新潟工場内製材工場を閉鎖し、其設備一式を瀬賀金五

一月十六日海軍協約成立。
(比率日3、英5、米5)
十一月十二日各地に銀行の取付あり。

郎氏に賃貸す。

十二月より取締役本儀正氏の職名を取締役技師長と稱す。

二月一日蒲田工場技師仲谷新治氏ディーゼル機關調査の爲め歐洲に向け出發す。

三月蒲田工場職工の一部怠業し、續いて爭議状態に入り、同月二十日より臨時休業、四月十二日に至る。

五月十八日農商務大臣荒井賢太郎氏新潟工場を視察せらる。

七月一日社員の職格を改めて職員、雇員及傭員に分つ。

六月二十六日蒲田工場職工再び怠業状態に入り、東京工場職工亦之に同ず。依て同月三十日より休業、九月一日の關東大震災に至る。此間八月十四日には大學蒲田工場に來襲する等の騷擾事件を惹起す。

九月一日關東大震災あり、本社倒潰焼失、東京工場類焼、蒲田工場一部損傷す。

九月一日午前十一時五十八分關東地方大震災あり、直後支拂猶豫令發布せらる。
十一月十日國民精神作興に關する詔書煥發せらる。
十二月二十七日虎ノ門大逆事件あり。

一二

震災後假事務所を麴町區丸ノ内久原ビルディング内に置く。
九月十日蒲田、東京兩工場職工代表者本社に來訪、爭議は
無條件解決す。
十月本社假事務所を八重洲町一丁目一番地(三菱十二號館)
に移す。

八六

一月東京工場を蒲田工場に合併し、工作機械部と稱す。
一月當社本店を麴町區有樂町一丁目一番地(三菱二十一號
館)に移す。

一月二十六日皇太子殿下御
成婚式を挙げさせらる。

三月七、八兩日陸用四サイクル空氣噴油式五百馬力ディー
ゼル機關の試運轉を行ひ、關係名士を招待す。

三月二十八日日本儀取締役東京を出發滿鮮地方を視察し、四
月二十七日歸京す。

四月新潟工場財團を設定し、之を擔保として日本興業銀行
より金五十萬圓を借入る。

五月二日顧問大貫龍城氏逝去。

六月二十四日定時株主總會に於て大震災災に因る損害の爲
め資本金五百萬圓を四百萬圓に減額することを議決す。

一三

七月一日海軍機關大佐八卷萬次氏を技術顧問に招聘す。
七月二十四日蒲田工場工作機械部二百七十坪増築に著手
す。

八月新潟市に開催の奥羽六縣及北海道聯合羽越線全通記念
博覽會に船用五十馬力ディーゼル機關及輕便ターレット・レ
ースを出品す。

十月二十七日蒲田工場購買會新築四十一坪、十一月一日同
工作機械工場増築落成す。

十二月一日日本儀取締役の蒲田工場長兼務を解き、技師山口
八次氏を工場長に任ず。

十二月十六日歐米視察中の技師仲谷新治氏はスウェーデー
ン、ノベル・ディーゼル社より二サイクル式ディーゼル機關
の製造權を買収の上歸朝す。

此年新潟市入船町所在土地一千八百餘坪を株式會社入船倉
庫へ賣渡す。

一月二十二日工學士池田正彦氏を顧問に招聘す。
四月十五日元東京工場敷地二千三百二十一坪餘の内現作業
場敷地二百八十五坪を除く借地權を内務省復興局に賣渡

一月十四日露條約成り、
我國は北樺太油田經營の利
權を獲得す。

八七

す。
 六月の常例取締役會に於て取締役技師長本儀正氏の職名を常務取締役と改む。
 八月二十三日新潟港に於て第三古志丸火災の爲め廢船となりたるにより、九月運輸部を廢止す。
 九月四日土崎分工場内鑄物及木型工場を閉鎖す。

六月新潟市に開催の新潟築港記念博覽會に船用五十馬力ディーゼル機關を出品す。
 八月十八日蒲田工場職工の組織する労働組合たる勞友會を公認す。
 八月日本硫曹株式會社註文の十二噸硫化炭素タンク車一輛を納入す。本邦に於ける此種タンク車の嚆矢なり。
 十月一、二兩日蒲田工場に於て製作中の陸用二サイクル空氣噴油式五百馬力ノベル・ディーゼル機關及四サイクル式百馬力ニイガタ・エアレス・ディーゼル機關完成につき其試運轉狀況を披露す。

三月普通選舉法可決せらる。
 四月一日農林、商工兩省分設せらる。
 同年治安維持法公布。

四月労働爭議調停法公布、七月一日より實施。
 六月二十五日漁業用發動機檢査規則公布實施。
 十二月二十五日午前一時二十五分大正天皇崩御遊ばされ、今上陛下御踐祚あらせらる。

十月大阪市に開催の電氣協會主催電氣大博覽會に發電機直結七十五馬力ディーゼル機關を出品し、名譽賞牌を受く。
 十月二十日、多年内燃機關其他鐵工業に従事し産業貿易上功績尠からざる廉に依り日本産業協會總裁伏見宮博恭王殿下より表彰狀を授けらる。
 此年新潟市入船町所在土地二千二百餘坪を賣渡す。
 十一月二十三日土崎分工場職工怠業状態に入り、同工場は經營の見込なきにより、十二月二日閉鎖す。
 十一月三十日内藤社長、本儀取締役辭任につき十二月二十三日定時株主總會に於て補缺選舉を行ひ、橋本圭三郎氏、支配人長島吉次郎氏當選就任す。同日内藤氏を相談役に、本儀氏を顧問に推薦す。
 十二月十七日蒲田工場健康保險組合設立認可せられ、新潟縣下三工場は健康保險署に加入の手續を了す。
 十二月二十七日參事制度を設け、蒲田工場長山口八次氏、新潟工場長鈴木春雄氏を參事に任ず。

二月七、八日大正天皇御大葬儀御執行。
三月以來全國的の銀行取付騒ぎあり、四月廿二日より三週間の支拂猶豫令布かる。

二

一月土崎分工場跡に土崎出張所を開設す。
三月大阪市に開催の大坂國産振興會主催國産原動機博覽會に船用二百馬力ディーゼル機關を出品す。之に依り近藤記念海事財團より表彰せらる。
三月福岡市主催東亞勸業博覽會に船用七十五馬力ディーゼル機關を出品す。
五月長崎縣平戸に開催の同縣松浦郡水産會主催小型發動機漁船及發動機共進會に參考品として三十馬力石油發動機を出品す。
五月十二日京城出張所を京城府旭町一丁目二十番地ノ一に開設し、大阪出張所主任來山源藏氏に其主任を命じ、久須美泰治氏に大阪出張所主任を命ず。
五月新潟市山ノ下所在土地九千七百餘坪を新潟水力電氣株式會社に、東京府蒲田町所在土地八百三十九坪を久保井氏に賣渡す。
五月顧問本儀正氏辭任。
六月富士身延鐵道百人乘全鋼製電車六輛受註す。

六月加納盛吉氏を顧問に招聘す。

三

一月九日商工省よりディーゼル機關用氣筒鑄造に關し工業研究獎勵金交附の件認可せらる。
二月四日、昨年四月新潟水力電氣株式會社より受註の二千指示馬力ディーゼル機關完成し試運轉を行ふ。
四月東京に於て開催の東京商業會議所主催大禮記念國産振興東京博覽會に陸用三十三馬力ディーゼル機關及工作機械二種を出品し、優良賞牌を受く。
五月三十一日顧問八卷萬次氏辭任。
六月二十二日農林大臣山本悌二郎氏蒲田工場に來場、昨年六月同省より註文の蟹工船取締船用二サイクル式千五百馬力ディーゼル機關完成につき其試運轉狀況を視察せらる。
七月十二日新潟工場に於て森八郎氏註文冷蔵船第一越丸及内務省土木出張所唧筒式浚渫船浦濱號進水す。
十一月十日今上天皇御即位の大禮を行はせらるゝに付奉祝

六月四日張作霖奉天にて爆死す。

の爲休業、當日滿二十年以上勤績者に記念盃を贈り表彰す。
(爾後毎年會社記念日に之を行ふ)。

九二

四

一月一日蒲田工場長山口八次氏支配人に任ぜられ、同工場長兼務を命ぜらる。
二月一日海軍機關大佐松村貞雄氏を顧問に招聘す。
四月、本社所在地有樂町一丁目一番地は丸ノ内三丁目二番地と町名番地變更せらる。
六月二十四日定時株主總會に於て監査役中野忠太郎氏辭任に付其補缺として中野孝次氏當選就任す。
同日取締役互選を以て笹村吉郎氏取締役社長に、長島吉次郎氏專務取締役に就任す。
九月朝鮮總督府主催朝鮮博覽會に陸用百三十馬力ディーゼル機關を出品す。
十月二十日新潟工場内工作機械工場三百坪の新築竣功し作業を開始す。
十一月一日柏崎分工場新築事務所及工場落成に付移轉す。

十月二日伊勢神宮遷宮式舉行せらる。
十月東京に於て萬國工業會議及動力會議開催。

五

一月十三日蒲田工場主任加藤重男氏を參事に任じ、工場長代理を命ず。
二月十七日北樺太石油會社註文のタンク製作の爲め私設保税工場を設置し五月十八日廢止す。
三月東京に於て開會の日本産業協會及三笠保存會主催海と空の博覽會に船用百馬力エアレス・ディーゼル機關ユニバーサル・ターレットレースを出品、前者に對し名譽大賞牌を受く。
五月二十四日笹村社長は多年發動機の製作に従事し、殊にディーゼル機關を完成し、漁業發達に寄與せる廉により、大日本水産會總裁伏見宮博恭王殿下より表彰狀を授けらる。
五月顧問池田正彦氏辭任。
六月二十日新潟第三車輛工場八十一坪落成す。
六月二十三日定時株主總會に於て結城豐太郎氏監査役に就任、九月三十日日本興業銀行總裁に就任に付辭任。
十月十二日日本社を麴町區丸ノ内三丁目四番地(有樂館三階)

三月二十六日帝都復興祭。十月倫敦に於ける軍縮會議成立。
十一月十四日濱口首相東京驛にて狙撃せらる。
十一月二十六日伊豆地方激震、被害甚大なり。

九三

に移轉す。
十二月九日新潟市山ノ下工場構内に新築中の發動機工場三百七十五坪落成作業を開始す。

六月三十日土崎出張所を閉鎖す。

七月十一日臺北出張員を臺北市東門町百十三番地に置く。

八月十八日新潟工場に於て同縣註文自走鋼製唧筒式浚渫船萬代丸進水す。同船は其主機補機共に當社製ディーゼル機關を据付く。

八月長岡市主催上越線全通記念博覽會に三十三馬力ディーゼル機關、五十馬力重油發動機、ユニバーサル・グラインダー等を出品す。

十二月二十六日柏崎分工場、長岡分工場を夫々柏崎及長岡工場と改稱す。同日本社に營業部、調査部を、蒲田工場に工作、鑄造、設計及經理の四部を、新潟工場に造船、造機、營業の三部を置く。尙各所主任の名稱を廢し、夫々各部長、柏崎長岡各工場長、各出張所所長に任命す。

九月一日鐵道省上越線全通。

九月十八日滿鐵柳條溝鐵路爆破問題にて滿洲事變突發す。

十月十八日上海排日暴動化す。

十月二十四日國際聯盟に於て十一月十六日を期限とする滿洲撤兵完了勸告決議案十三對一にて可決す。

十一月一日入營者職業保障法實施。

十二月十五日金輸出禁止。

六

七

二月二十八日笹村社長滿鮮視察の爲東京出發、三月十四日歸京す。

三月東京市に開催の帝國發明協會主催第四回發明博覽會にV型高速百馬力ディーゼル機關及陸用四サイクル式五十馬力ディーゼル機關を出品し、有功章を受く。

四月金澤市に開催の産業と觀光の大博覽會に二サイクル、エーアレス式二十五馬力ディーゼル機關及五十馬力無注水式重油發動機を出品す。

四月二十八日賀陽宮恒憲王殿下蒲田工場に台臨あらせらる五月十日工學士小穴宗次氏を顧問に招聘す。

八月一日大阪出張所を大阪市北區中之島三丁目三番地（朝日ビルディング）に移轉す。

九月二十二日長島專務取締役滿鮮地方視察の爲め東京出發十月十六日歸京す。

九月三十日臺北出張員を廢止す。
十月十日京城出張所を京城府長谷川町百十六番地（京城ビルディング）に移す。

一月八日櫻田門外不敬事件突發。

一月二十八日上海排日形勢惡化し、我陸戰隊支那街占據。

二月一日上海へ陸軍派遣決定す。

三月一日滿洲國成立、溥儀氏執政に就任し、大同元年と稱す。

五月十五日帝都に未曾有の大不穩事件突發、犬養首相射殺せらる。

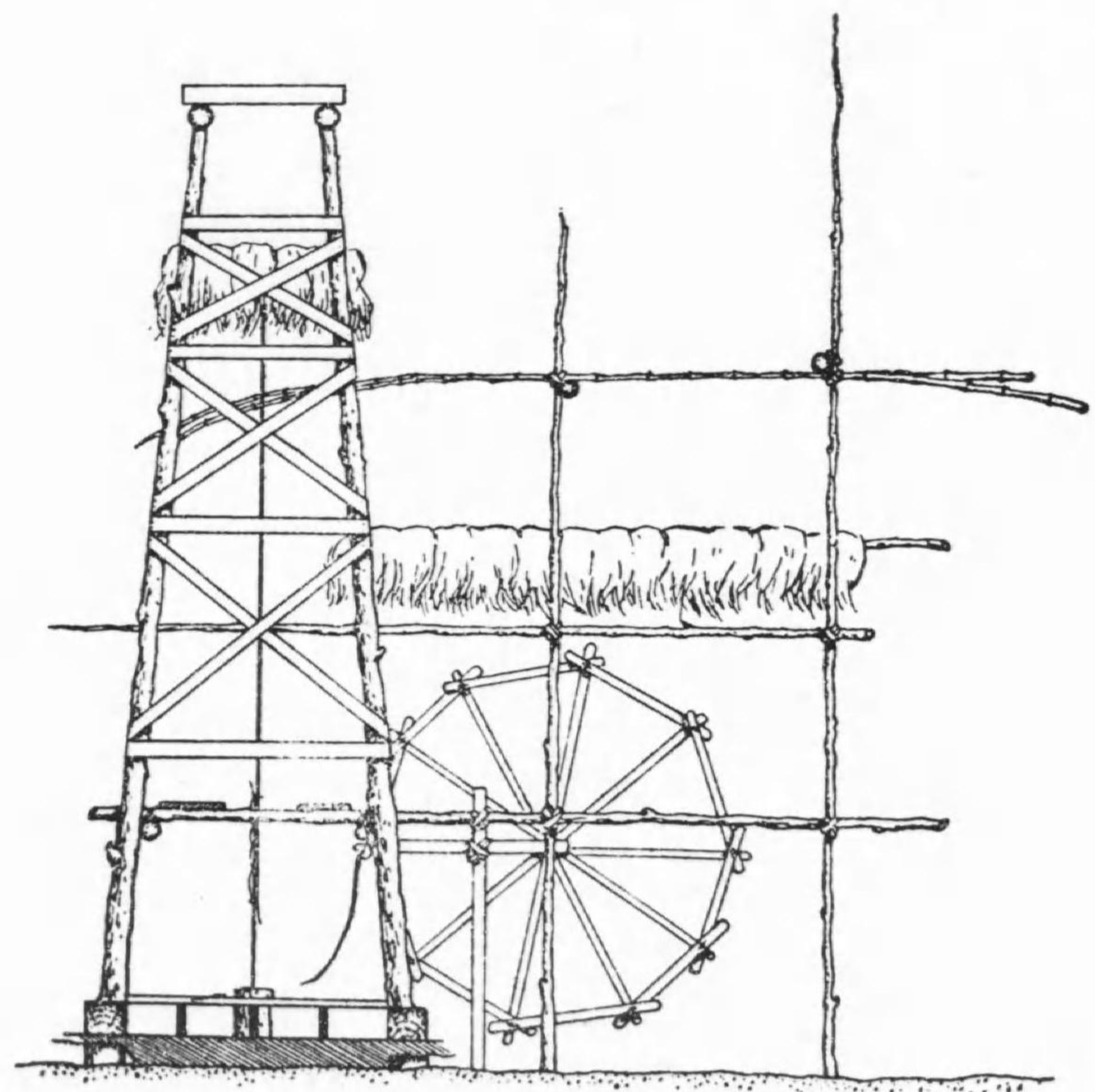
九月十五日帝國は滿洲國を承認し、新京に於て調印式行はる。
十一月一日東京市は隣接の

<p>十一月一日蒲田工場所在地は其地名を東京市蒲田區新宿町と變更せらる。</p> <p>十一月二十三日新潟工場内鑄物工場増築百卅二坪竣功す。</p> <p>十二月一日陸軍砲兵中佐久留島丈一郎氏を顧問に招聘す。</p>	<p>五郡八十二箇町村を合併す。</p> <p>十一月二日奉天造兵所株式組織となる。</p>
<p>一月一日支配人兼蒲田工場長山口八次氏の兼務を解き、同工場工作部長加藤重男氏蒲田工場長兼工作部長を命ぜらる。</p> <p>四月十五日新潟工場内工作機械工場増築百八十坪竣成す。</p> <p>四月工場彙報第一號を發行す。</p> <p>六月一日新潟工場内木型工場新築百四十四坪及鑄物工場第二次増築九十九坪落成す。</p> <p>七月蒲田工場に於て鐵道省註文の百馬力ガソリン機關二臺竣功す。</p> <p>八月二十五日新潟工場銅工場増築八十三坪落成す。</p> <p>九月一日新潟工場各係主任者分擔を定む。</p> <p>十月蒲田工場に於て車輛用高速型百馬力ディーゼル機關を</p>	<p>二月二十四日松岡全權日本の國際聯盟脫退を宣言す。</p> <p>三月三日三陸地方強震あり海嘯を伴ひ被害夥し。</p> <p>三月十五日船舶安全法公布。</p> <p>十二月二十三日皇太子繼宮明仁親王殿下御誕生あらせらる。</p>

八

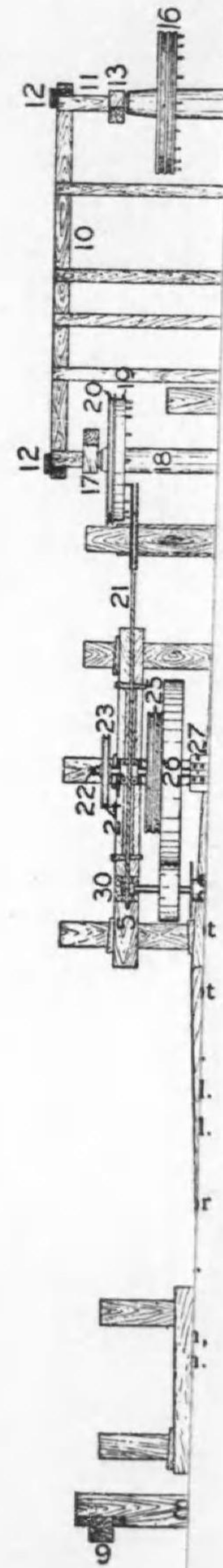
<p>完成す。</p> <p>十月十八日臨時株主總會に於て現在資本金四百萬圓を六百萬圓に増加の件及定款改正の件議決せらる。</p> <p>十月三十日新潟山ノ下發動機工場増築百五十坪落成す。</p> <p>十一月五日新潟山ノ下旋盤工場電氣室より發火、百五十餘坪を燒失す。</p> <p>十一月滿鐵納ディーゼル機關車用七百五十馬力ディーゼル機關二臺竣功す。</p> <p>十二月二十日長岡工場内砲彈工場三十一坪半落成す。</p> <p>十二月二十五日同職工食堂落成す。</p>	<p>三月一日滿洲帝國溥儀皇帝即位式舉行、康徳元年と改元せらる。</p> <p>五月三十日東郷元帥薨去せらる。</p>
<p>九</p> <p>一月六日新潟鑄物工場第三次増築四十五坪落成す。</p> <p>二月十五日李王垠殿下新潟市山ノ下工場へ台臨御視察あらせらる。</p> <p>四月十九日蒲田工場に工事計畫部を新設す。尙各係の主任分擔を定む。</p>	

九

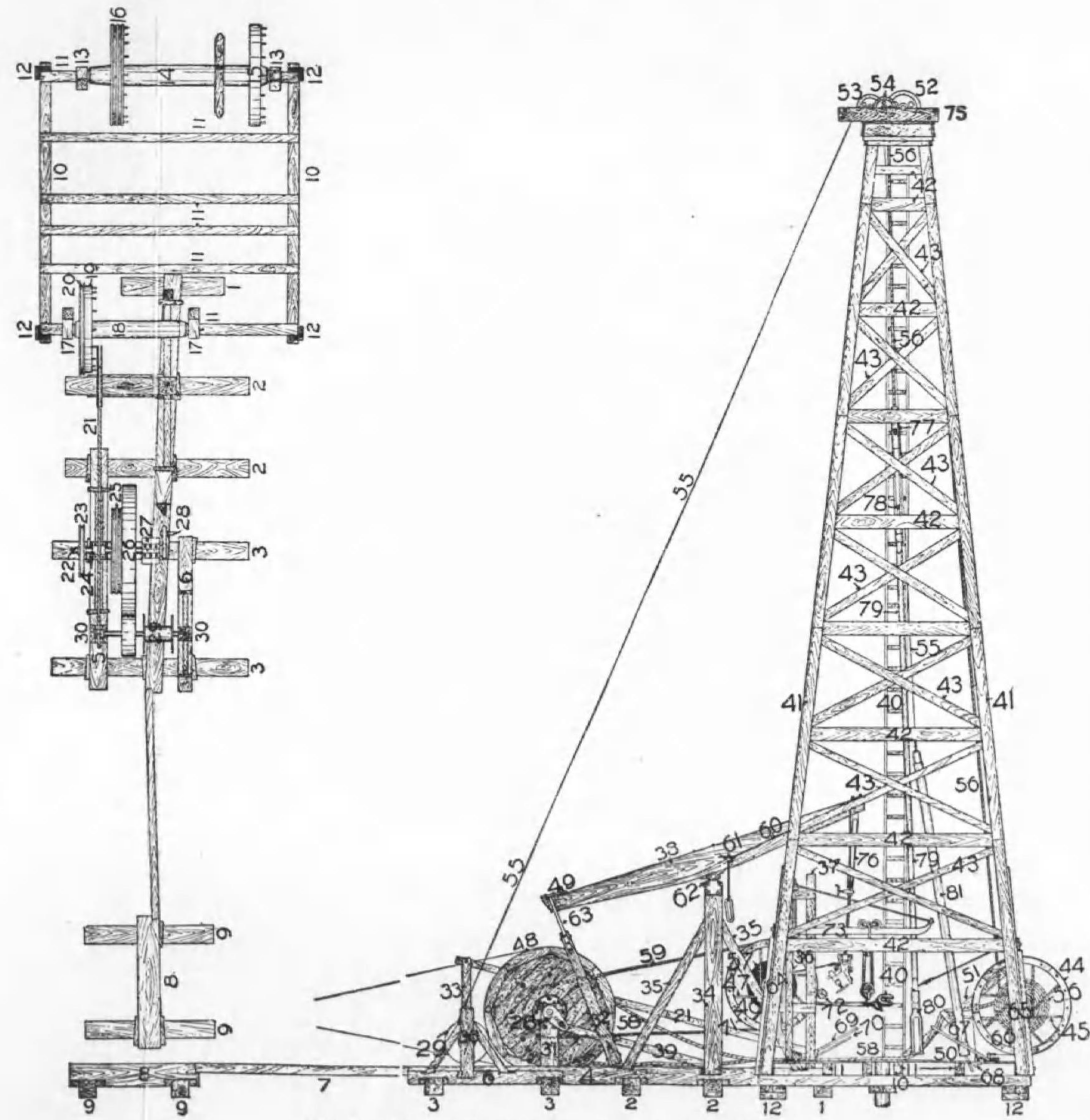


置 裝 搨 總 上

- No.
- 1 Nose Sill.
 - 2 Mud Sills.
 - 3 Mud Sills.
 - 4 Main Sill.
 - 5 Sub Sill.
 - 6 Sand Reel Sill.
 - 7 Bumper. Engine Block to Main Sill.
 - 8 Engine Block.
 - 9 Engine Mud Sills.
 - 10 Derrick Mud Sills.
 - 11 Derrick Floor Sills.
 - 12 Foundation Posts.
 - 13 Bull Wheel Posts.
 - 14 Bull Wheel Shaft.
 - 15 Bull Wheel, Brake Side.
 - 16 Bull Wheel, Tug Side.
 - 17 Calf Wheel Posts.
 - 18 Calf Wheel Shaft.
 - 19 Calf Wheel.
 - 20 Calf Wheel Skeleton Rim.
 - 21 Sand Reel Reach.
 - 22 Band Wheel Shaft.
 - 23 Iron Tug Wheel for Calf Wheel.
 - 24 Black Jack Post Box.
 - 25 Tug Pulley.
 - 26 Band Wheel.
 - 27 Front Jack Post Box and Cap.
 - 28 Shaft, Crank, Wrist Pin and Flanges.
 - 29 Iron Sand Reel.
 - 30 Sand Reel Posts.
 - 31 Jack Post.
 - 32 Pitman.
 - 33 Sand Reel Lever.
 - 34 Sampson Post.
 - 35 Sampson Post Braces.
 - 36 Derrick Crane Post.
 - 37 Headache Post.
 - 38 Walking Beam.
 - 39 Jack Post Brace.
 - 40 Derrick Ladder.



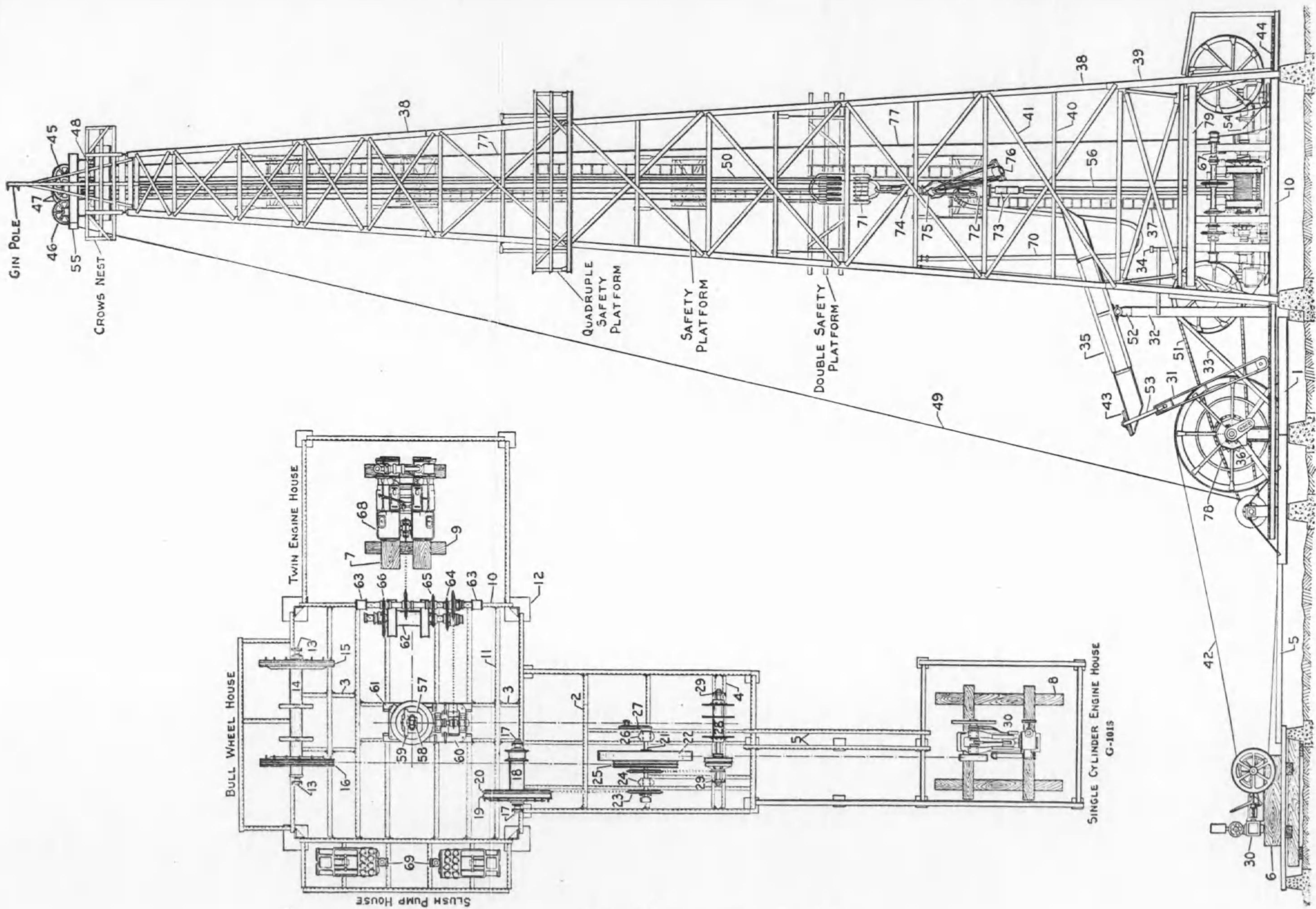
- No.
- 1 Nose Sill.
 - 2 Mud Sills.
 - 3 Mud Sills.
 - 4 Main Sill.
 - 5 Sub Sill.
 - 6 Sand Reel Sill.
 - 7 Bumper, Engine Block to Main Sill.
 - 8 Engine Block.
 - 9 Engine Mud Sills.
 - 10 Derrick Mud Sills.
 - 11 Derrick Floor Sills.
 - 12 Foundation Posts.
 - 13 Bull Wheel Posts.
 - 14 Bull Wheel Shaft.
 - 15 Bull Wheel, Brake Side.
 - 16 Bull Wheel, Tug Side.
 - 17 Calf Wheel Posts.
 - 18 Calf Wheel Shaft.
 - 19 Calf Wheel.
 - 20 Calf Wheel Skeleton Rim.
 - 21 Sand Reel Reach.
 - 22 Band Wheel Shaft.
 - 23 Iron Tug Wheel for Calf Wheel.
 - 24 Black Jack Post Box.
 - 25 Tug Pulley.
 - 26 Band Wheel.
 - 27 Front Jack Post Box and Cap.
 - 28 Shaft, Crank, Wrist Pin and Flanges.
 - 29 Iron Sand Reel.
 - 30 Sand Reel Posts.
 - 31 Jack Post.
 - 32 Pitman.
 - 33 Sand Reel Lever.
 - 34 Sampson Post.
 - 35 Sampson Post Braces.
 - 36 Derrick Crane Post.
 - 37 Headache Post.
 - 38 Walking Beam.
 - 39 Jack Post Brace.
 - 40 Derrick Ladder.



- 41 Derrick Cornice.
- 42 Derrick Girts.
- 43 Derrick Braces.
- 44 Bull Wheel Cants.
- 45 Bull Wheel Arms.
- 46 Calf Wheel Cants.
- 47 Calf Wheel Arms.
- 48 Belt.
- 49 Adjuster Board.
- 50 Derrick Floor.
- 51 Bull Wheel Post Brace.
- 52 Crown Pulley.
- 53 Sand Pump Pulley.
- 54 Casing Pulley.
- 55 Sand Line.
- 56 Drilling Cable.
- 57 Casing Line.
- 58 Bull Rope.
- 59 Calf Rope.
- 60 Temper Screw Elevator Rope.
- 61 Temper Screw Pulleys.
- 62 Center Irons.
- 63 Stirrup.
- 64 Calf Wheel Gudgeons (not Visible).
- 65 Bull Wheel Gudgeons (not Visible).
- 66 Brake Band for Bull Wheel.
- 67 Brake Lever for Bull Wheel.
- 68 Brake Staple for Bull Wheel.
- 69 Sand Reel Hand Lever.
- 70 Brake Lever and Staple for Calf Wheel.
- 71 Brake Band for Calf Wheel.
- 72 Telegraph Wheel.
- 73 Derrick Crane with Chain, Hoist and Swivel Wrench.
- 75 Crown Block.
- 76 Temper Screw.
- 77 Rope Socket.
- 78 Jars.
- 79 Stem.
- 80 Bit.
- 81 Bailer or Sand Pump.

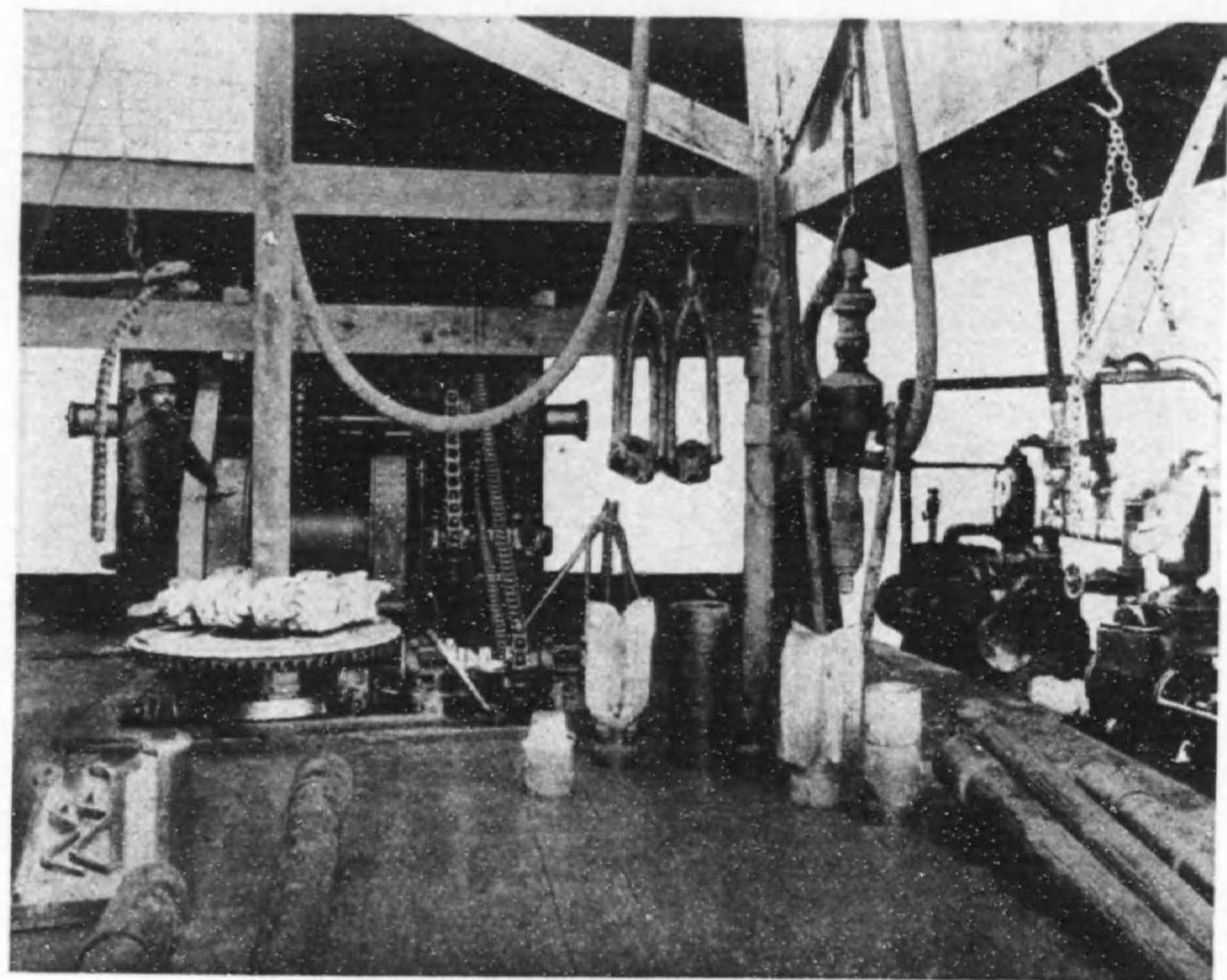
NOTE: Boiler and Engine are not shown on this diagram.

置 裝 抽 綱

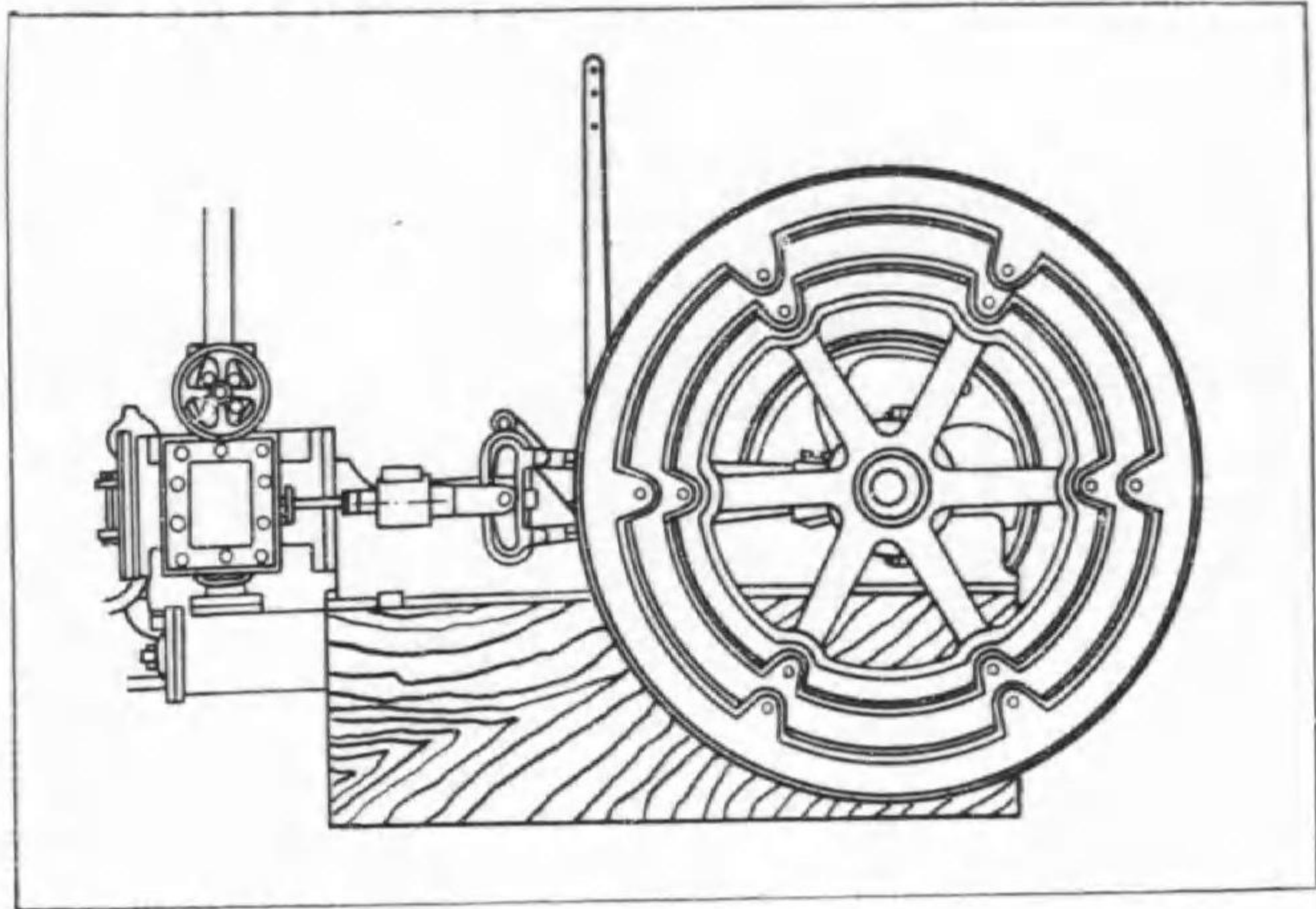


置 装 - リ タ - ロ

- | | | |
|---|--------------------------------|--------------------------------------|
| 1 Main Sill | 28 Chain Driven Sand Reel | 55 Crown Block |
| 2 Sub Sill | 29 Sand Reel Posts | 56 Drill Stem |
| 3 Spreaders | 30 Single Cylinder Engine | 57 Split Stem Bushing |
| 4 Sand Reel Sill | 31 Pitman | 58 Drill Stem Bushing |
| 5 Bumper, Engine Block to Main Sill | 32 Sampson Post | 59 Bushing Locking Bar |
| 6 Engine Block, for Single Cylinder Engine | 33 Sampson Post Brace | 60 Rotary Machine |
| 7 Engine Block, for Twin Cylinder Engine | 34 Headache Post | 61 Rotary Machine Skid |
| 8 Engine Mud Sill, for Single Cylinder Engine | 35 Walking Beam | 62 Draw Works Drum |
| 9 Engine Mud Sill, for Twin Cylinder Engine | 36 Jack Post Brace | 63 Draw Works Cat Head |
| 10 Derrick Base, Exterior | 37 Ladder | 64 Draw Works Second Speed Sprockets |
| 11 Derrick Base, Interior | 38 Derrick Leg | 65 Draw Works High Speed Sprockets |
| 12 Foundation, for Derrick Leg | 39 Derrick Starting Leg | 66 Draw Works Low Speed Sprockets |
| 13 Bull Wheel Box | 40 Derrick Girt | 67 Telegraph Wheel |
| 14 Bull Wheel Drum | 41 Derrick Diagonal | 68 Twin Drilling Engine |
| 15 Bull Wheel, Brake Side | 42 Band Wheel Belt | 69 Rotary Slush Pumps |
| 16 Bull Wheel, Tug Side | 43 Adjuster Board | 70 Rotary Hose |
| 17 Bull Wheel Drum | 44 Derrick Floor | 71 Traveling Block |
| 18 Bull Wheel Drum | 45 Crown Sheave | 72 Swivel |
| 19 Bull Wheel Tug Rim | 46 Sand Line Sheave | 73 Swivel to Drill Stem Coupling |
| 20 Bull Wheel Shaft and Flanges | 47 Casing Line Sheaves | 74 Spring Casing Hook |
| 21 Band Wheel Drum | 48 Cat Line Sheave | 75 Safety Latch |
| 22 Bar d Wheel | 49 Sand Line | 76 Side Door Drill Pipe Elevator |
| 23 Clutch Sprocket, for Calf Wheel Drive | 50 Drilling and Casing Cable | 77 Catline |
| 24 Back Jack Post Box and Cap | 51 Calf Wheel Chain | 78 Sand Reel Chain |
| 25 Tug Pulley | 52 Center Irons | 79 Headboard |
| 26 Front Jack Post Box and Cap | 53 Stirrup | |
| 27 Crank and Wrist Pin | 54 Brake Lever, for Bull Wheel | |



部内置装 - リターロ



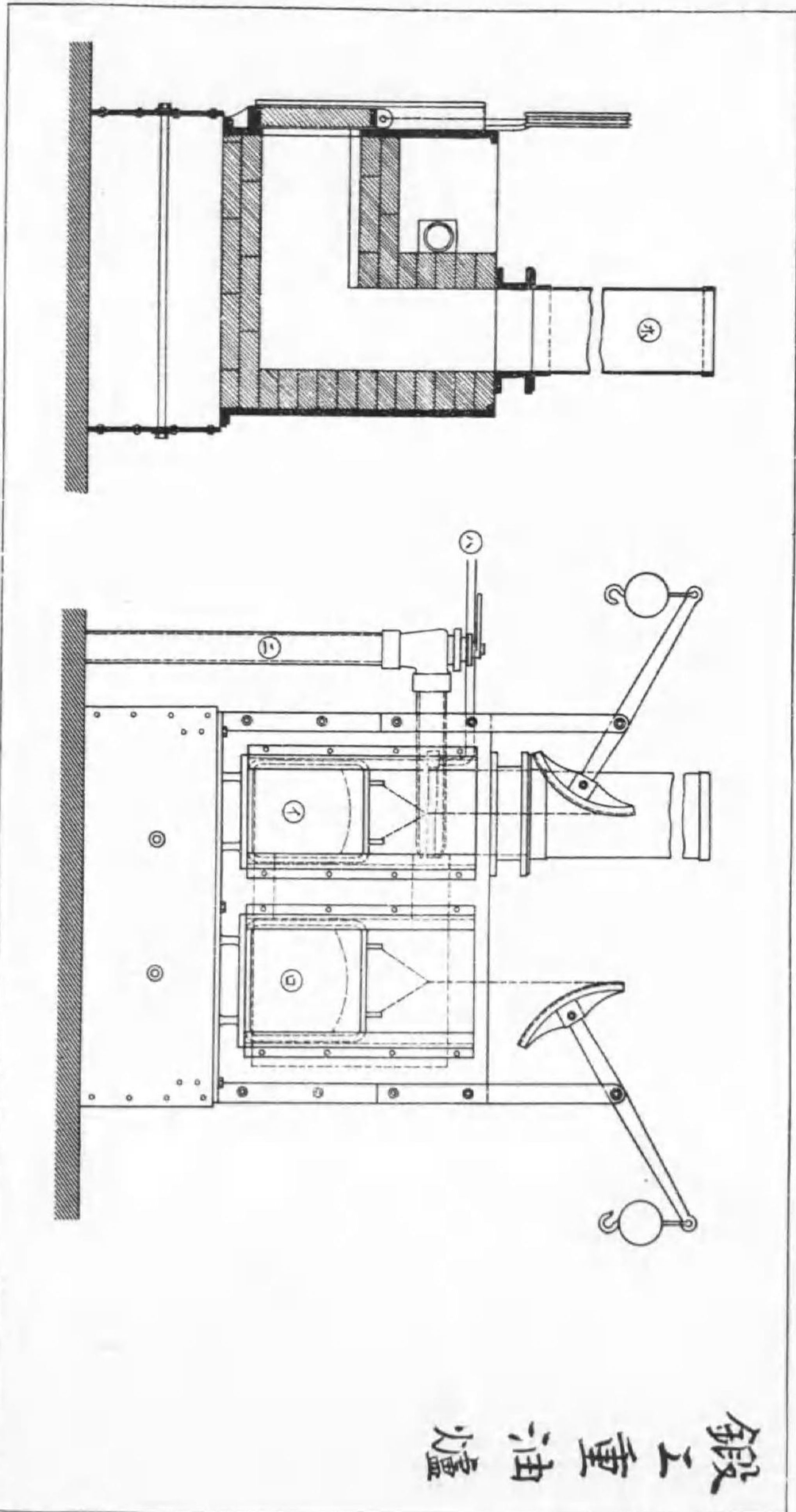
モーガール式汽機

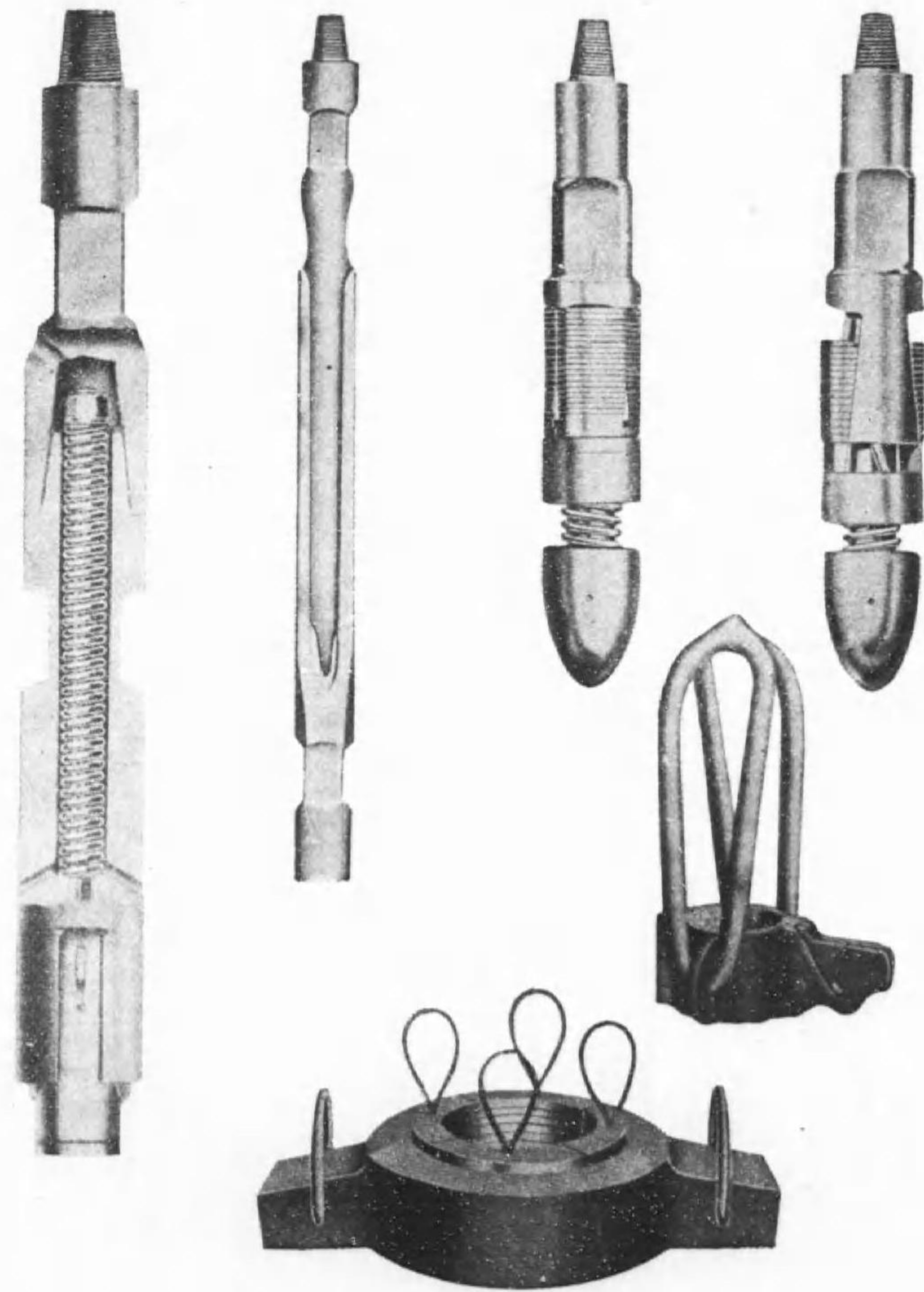


複筒汽機(密閉型)

鍛工重油爐

イロ 豫加 熱 爐 爐 熱 加 入 重 送 油 風 管 煙 水 突



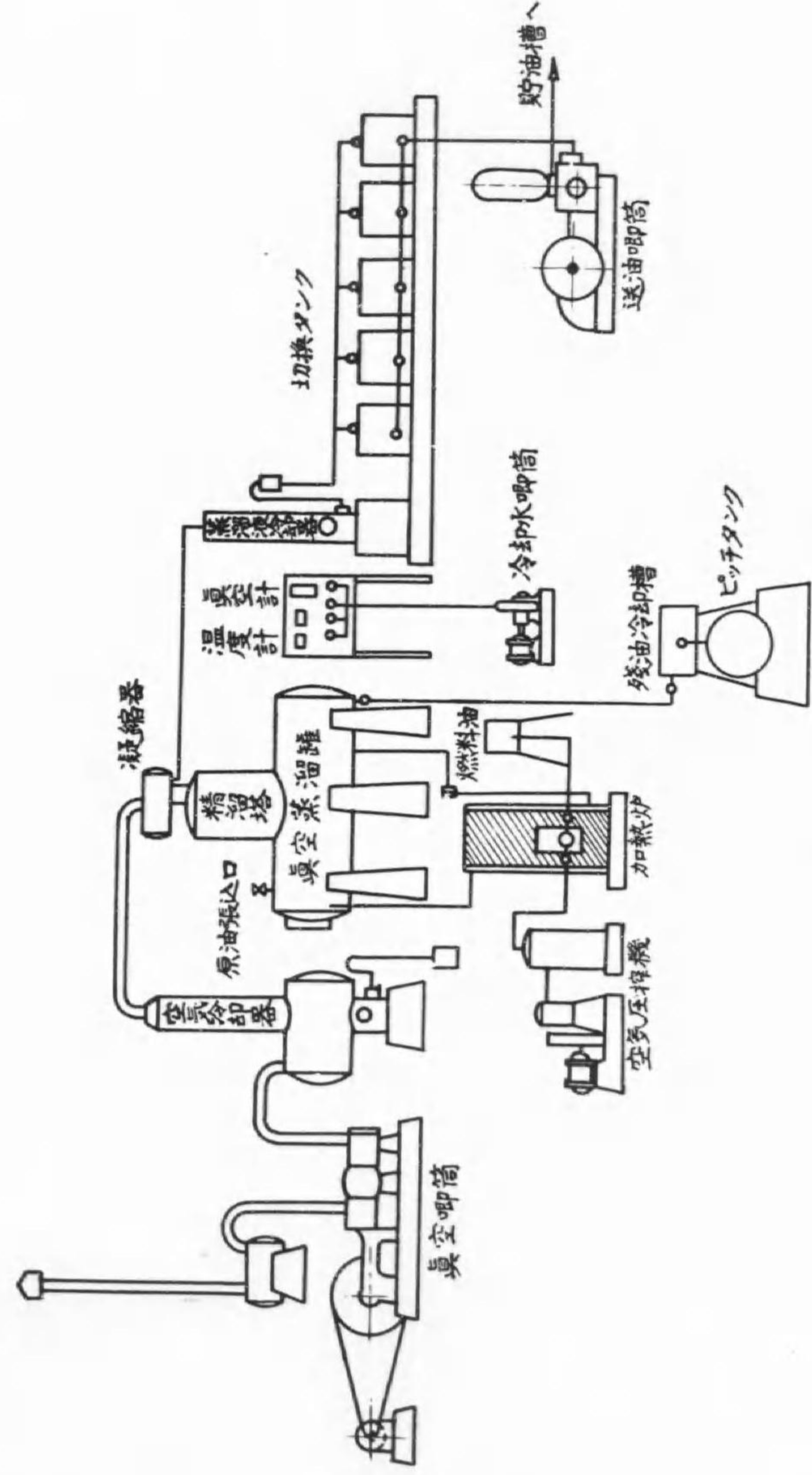
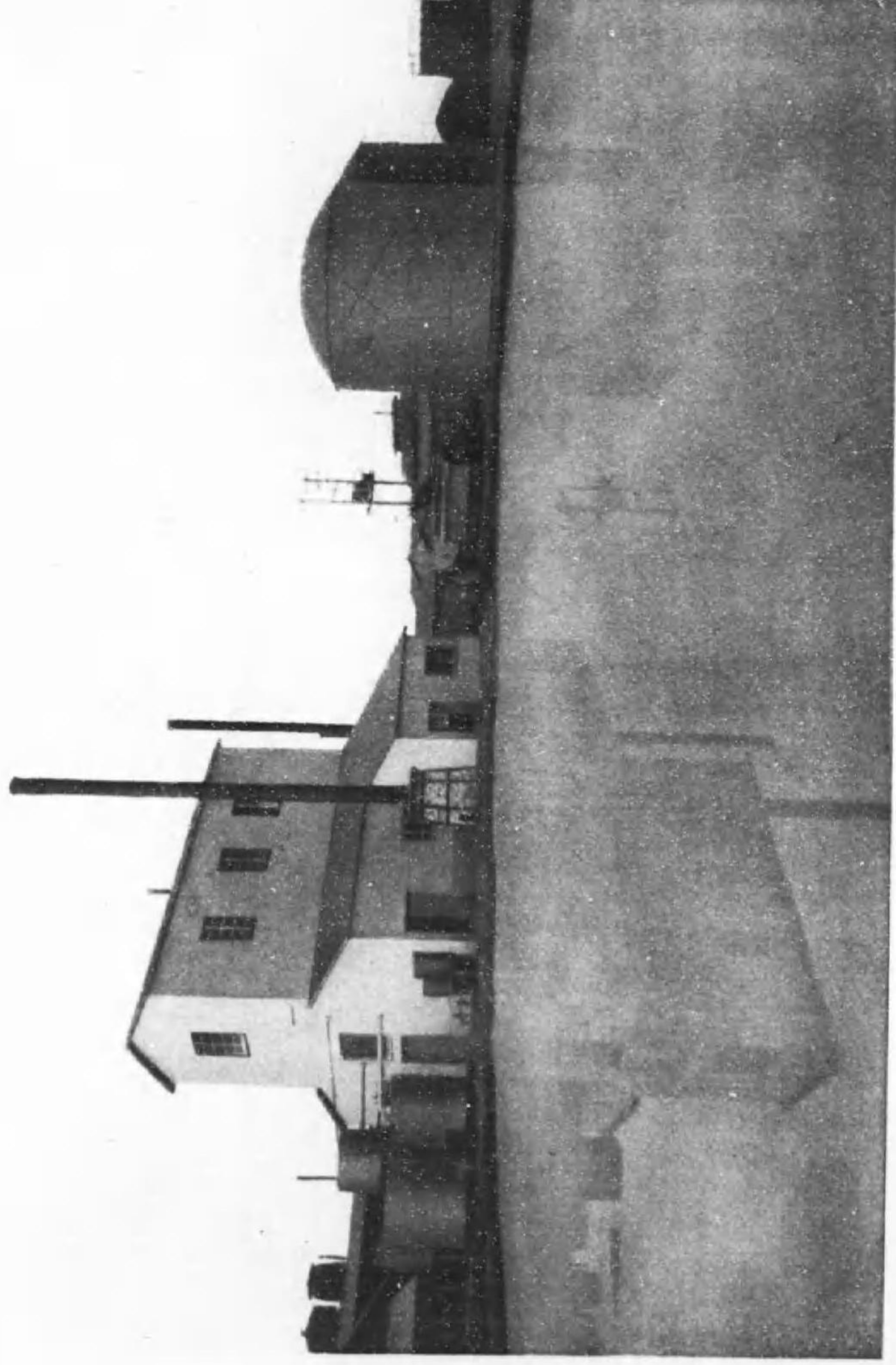


他其及スルーヤジ



類トッピ種各

眞空蒸餾裝置圖



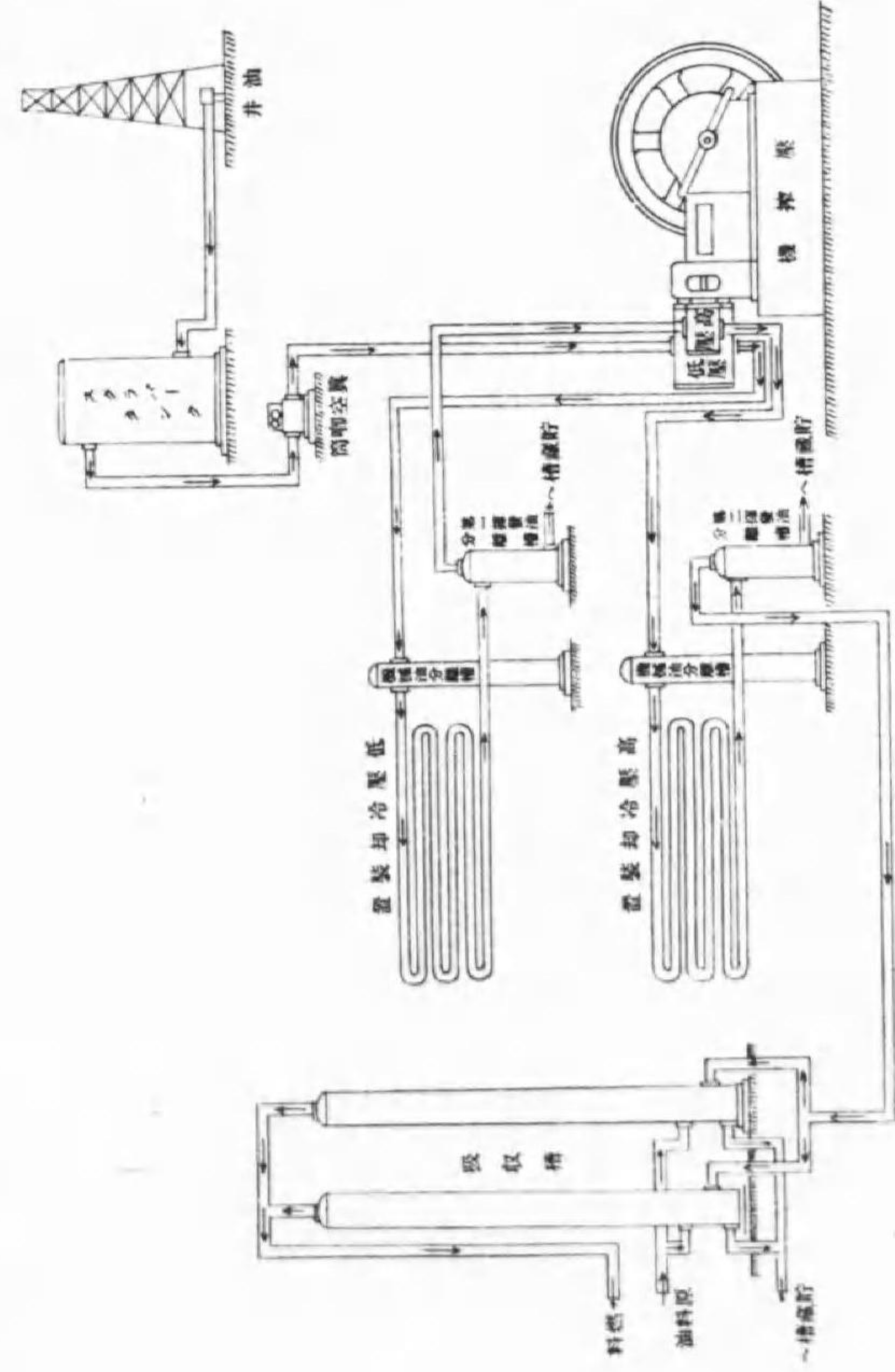
眞空蒸餾裝置說明圖

(法縮壓)置裝收採油發揮



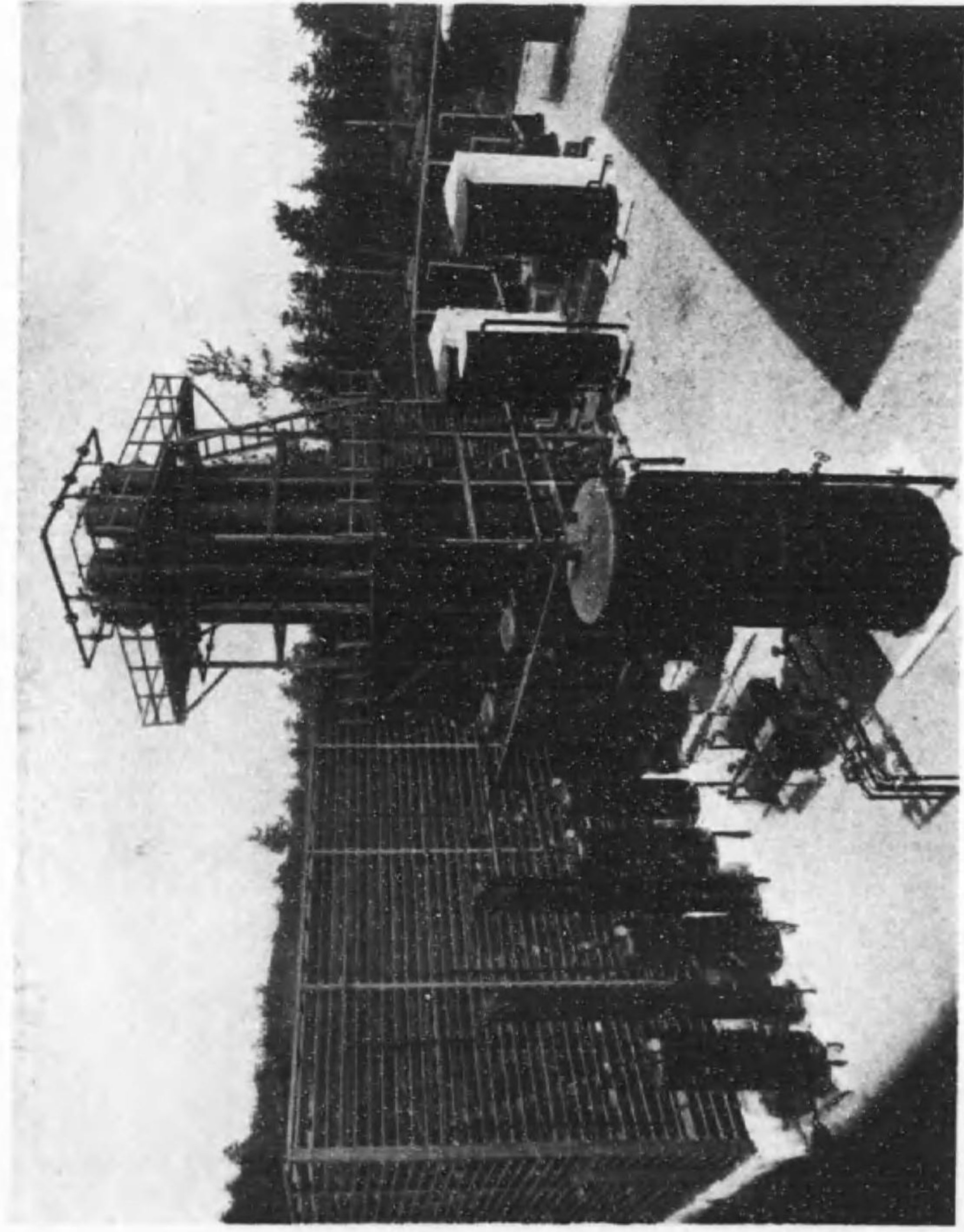
説明

油井より天然瓦斯スクリューポンプを通り大気温度より凝縮シタル低揮發油水分を除去シ清浄ナル瓦斯トシテ風送機ヲ轉テ風機内ニ母キ先ノ低揮發油ニテコト付内外ニ壓搾シ此ヲ凝縮品トシテ移シテ冷却ス此際凝縮セル比較的低揮發油ハ第一揮發油分離槽ニ於テ瓦斯ト分離シテ貯留槽ニ送ラス次ニ第二揮發油分離槽ニ出テタル瓦斯ノ高揮發油ニテコト付内ニ凝縮シタル高揮發油ガ凝縮セル第一揮發油分離槽ニ於テ瓦斯ト分離シテ貯留槽ニ送ラス第三揮發油分離槽ニ出テタル瓦斯ハ凝縮槽内ニテ原料油(低揮發油)ト成ルル揮發油ヲ吸取セラレ所謂凝結瓦斯トナリテ燃料ニ供セラレ而シテ凝縮槽内ニテ揮發油ヲ吸取シタル原料油ハ一定時間ノ後所定ノ比重差ニ容積ニ達スルヲ以テ此コト揮發油ヲ回収シテ貯留槽ニ入レ更ニ原料油ヲ凝縮槽内ニ充タン如此作業ハ繰返ス



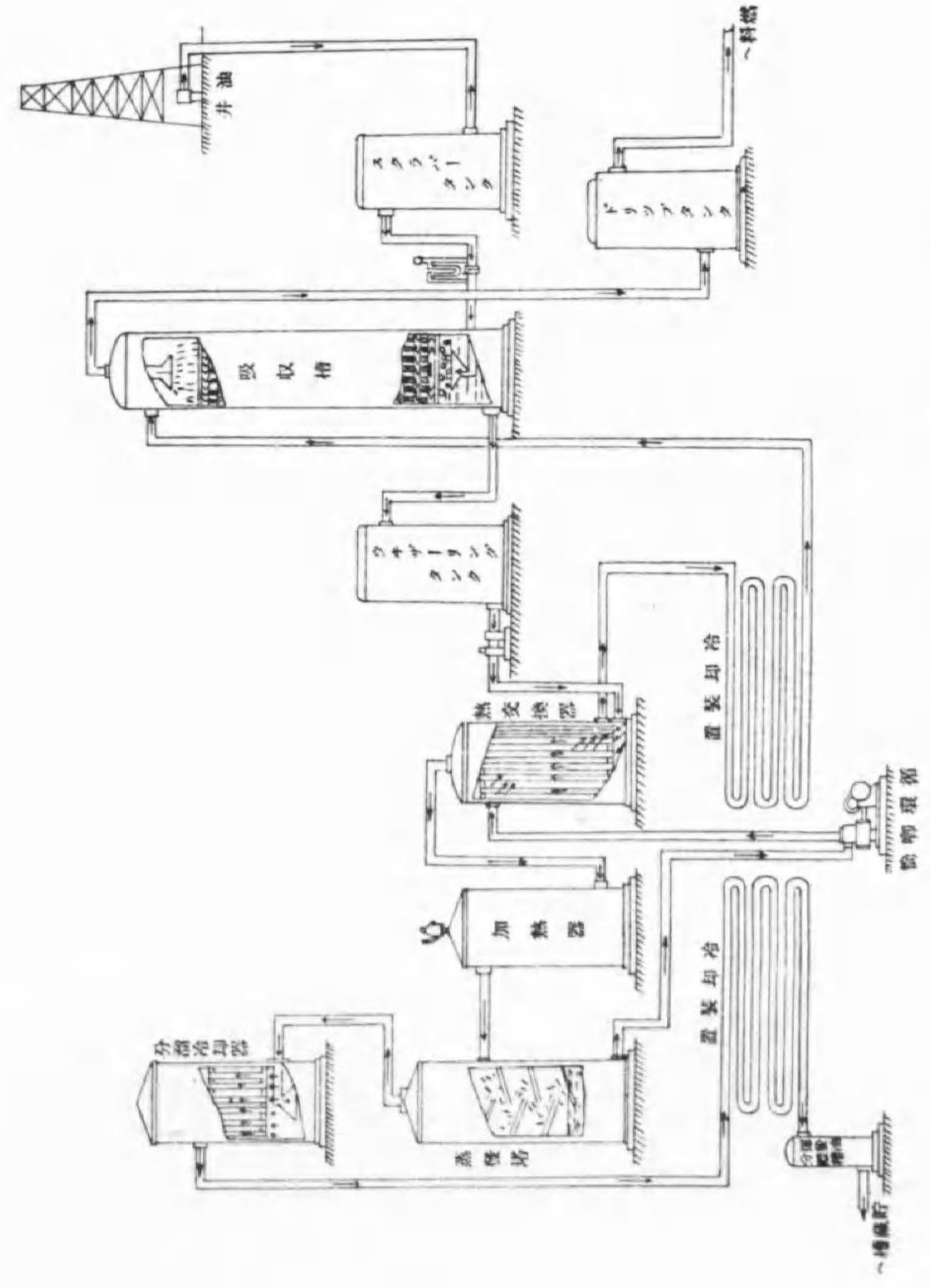
圖明説(法縮壓)置裝收採油發揮

(法收吸)置裝收探油發揮

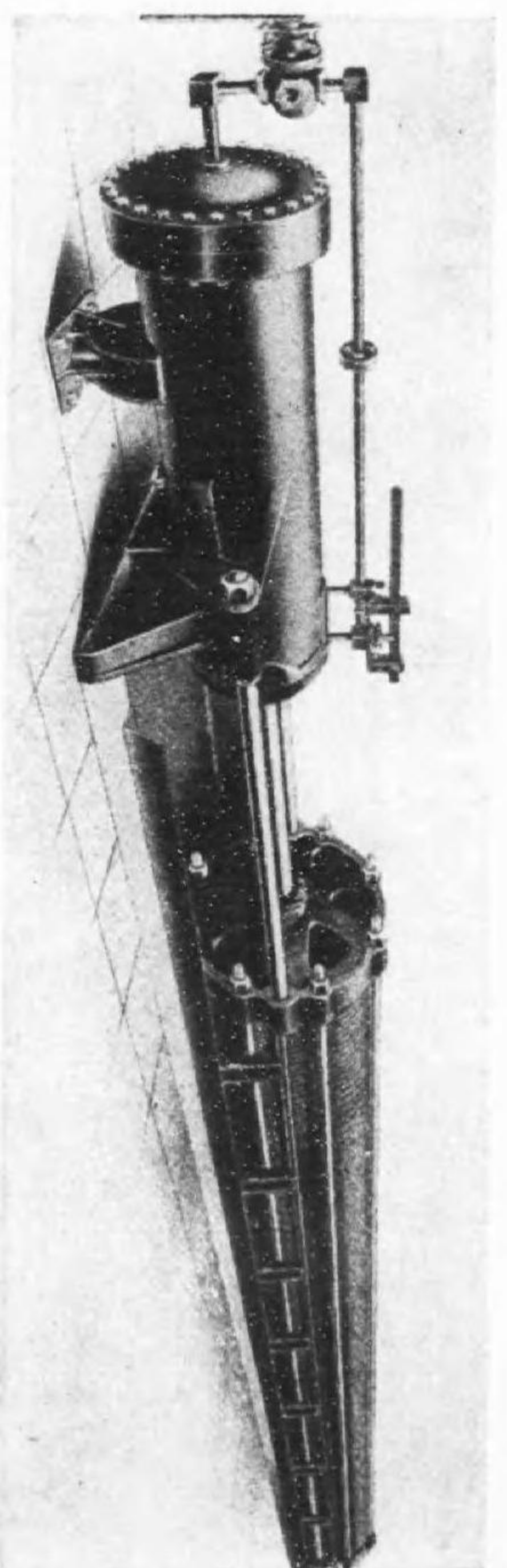


説明

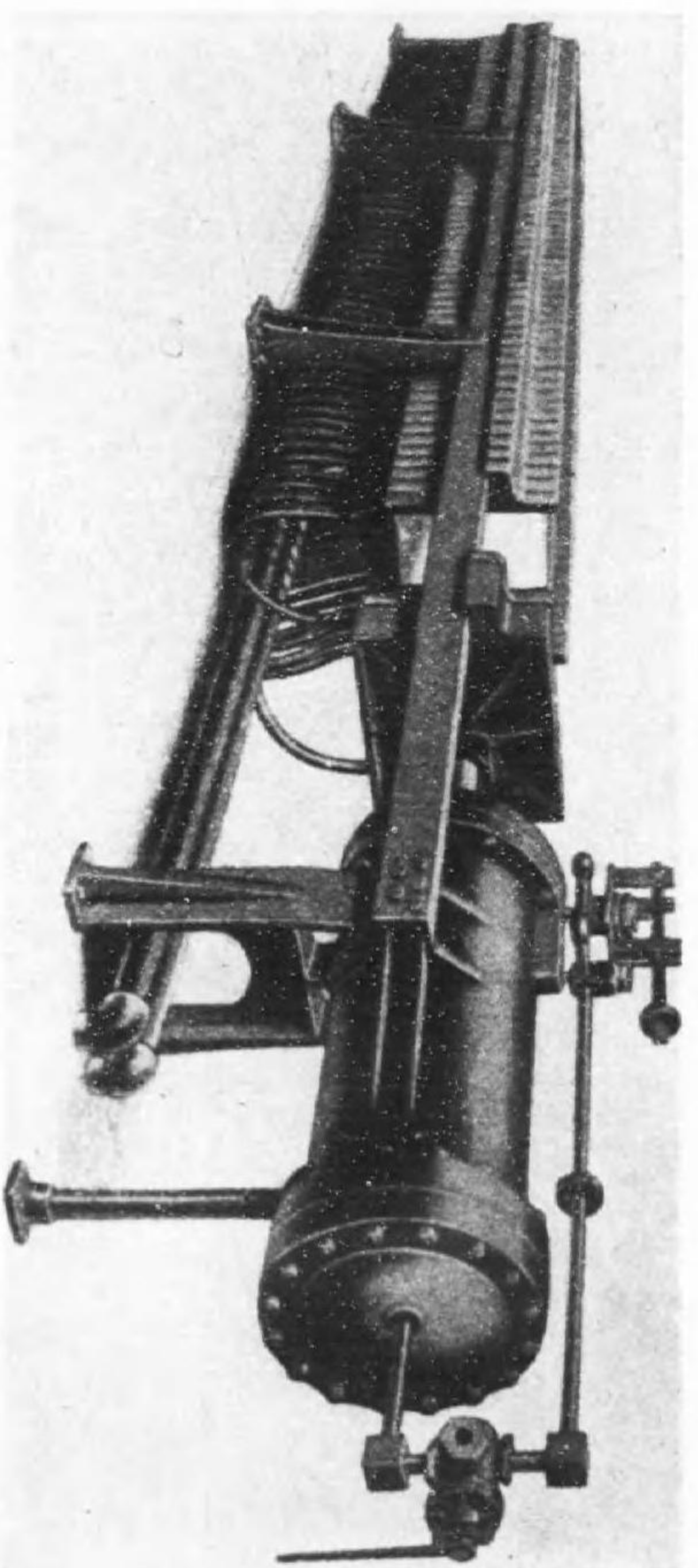
油井又は産搾機ヨリノ天蒸気所ニカクハ一タンクニテ洗淨セラレ設備内ニ下層ヨリ入ラト上層ノ
 此ト逆流スル原料油(揮發油)ニ揮發油ヲ吸収セラル後原料供セラル、揮發油ヲ吸収シテ蒸餾油
 内ニ付一リングタンクニテ熱交換器ノ内側ニ入り更ニ加熱器ニ於テ熱セラレ蒸餾塔ニ入ル此所ニテ
 生ズル揮發油ノ蒸汽ハ分溜冷却器ニテ輕油分ヲ分離シタル後抽出管ニヨリテ冷却セラレ揮發油トナ
 リ分溜槽ニ集リ水ヲ貯蔵槽ニ入ル蒸餾塔内ニ殘レル熱輕油ハ循環槽ニ依リテ熱交換器ノ外側ヲ過リ
 管ニテ冷却セラレタル後吸収槽ノ上部ヨリ戻リ込マレ此ノ作業ヲ繰リ返ス



圖明說(法收吸)置裝收探油發揮

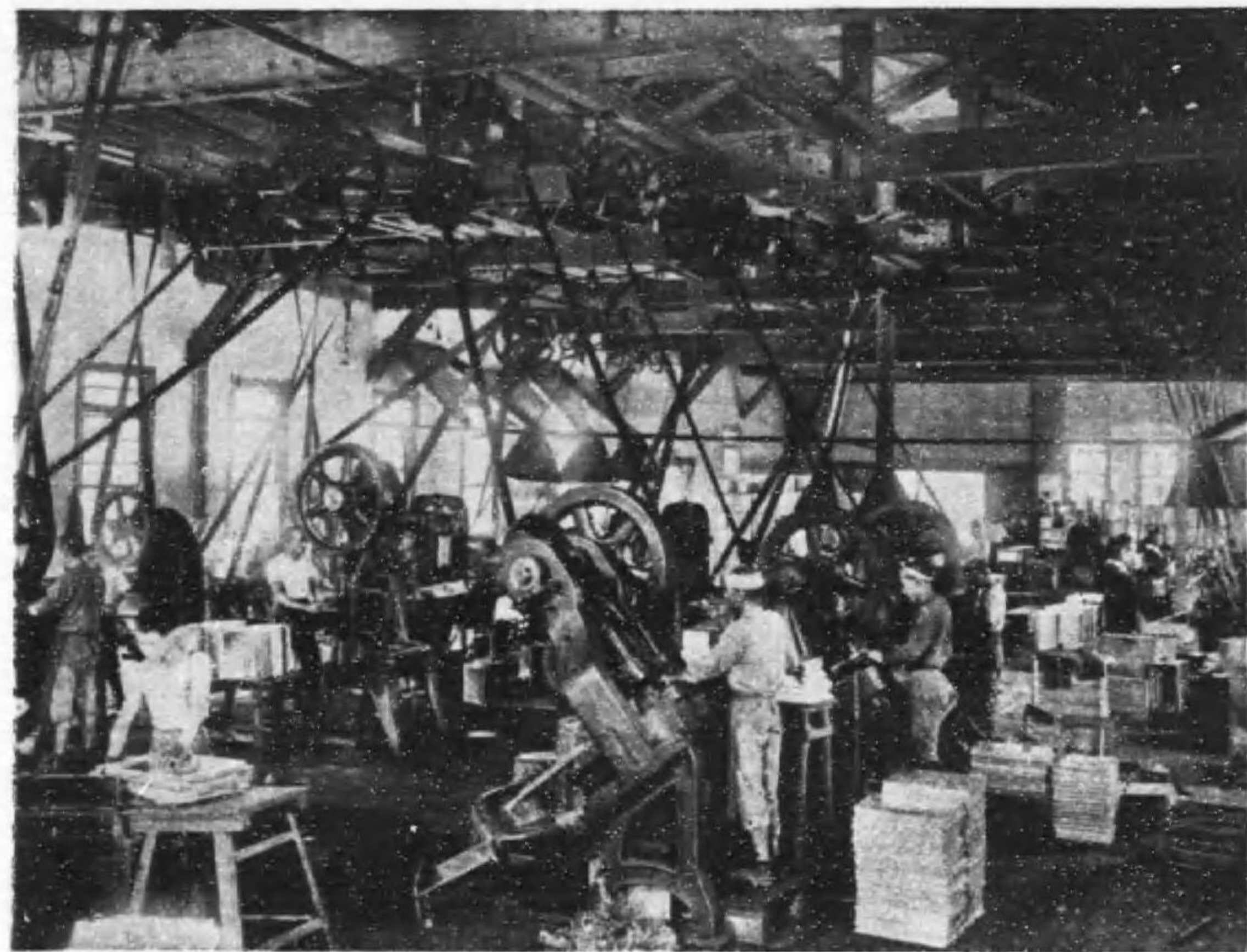
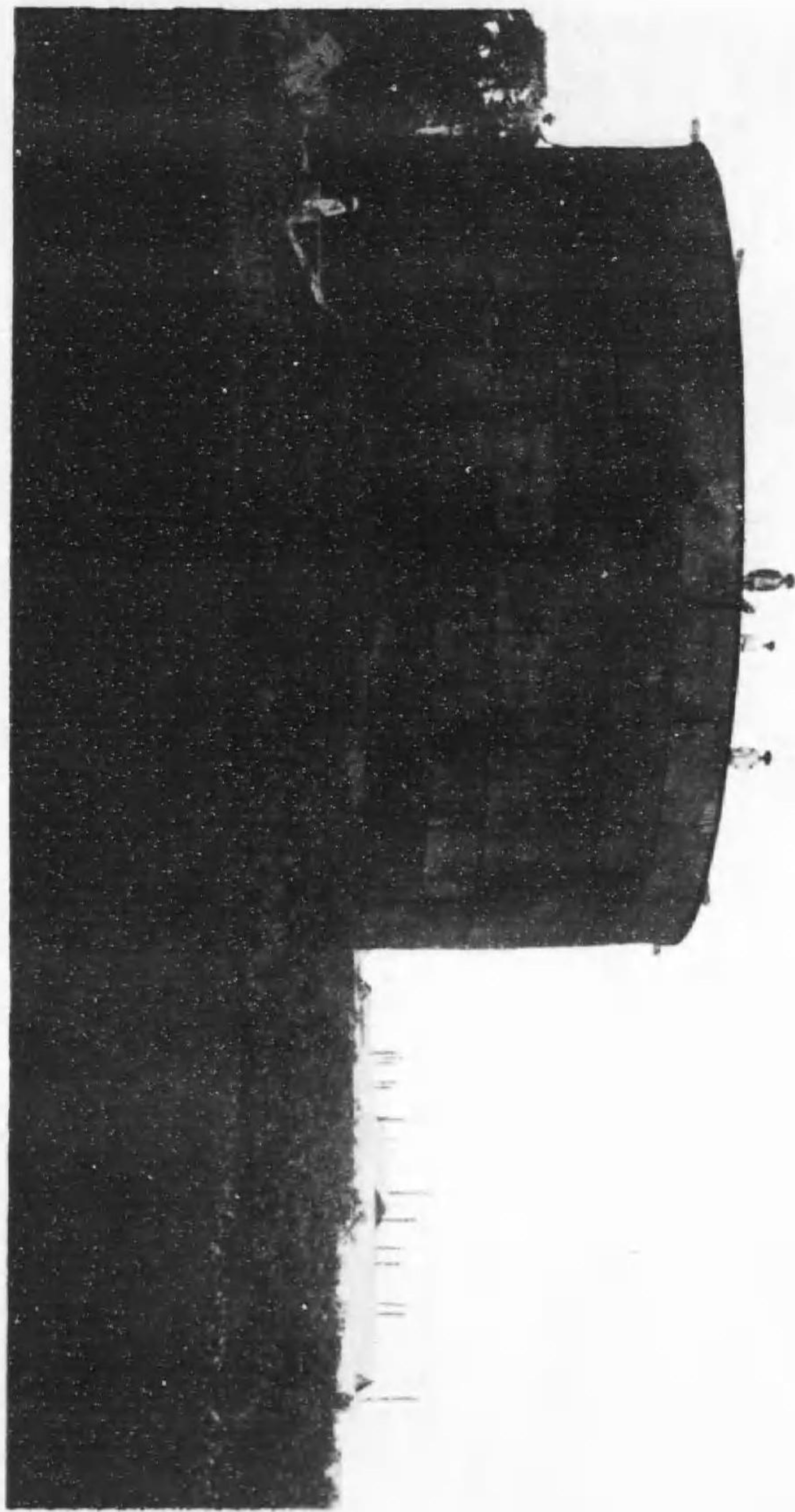


一 其 械 機 螺 製

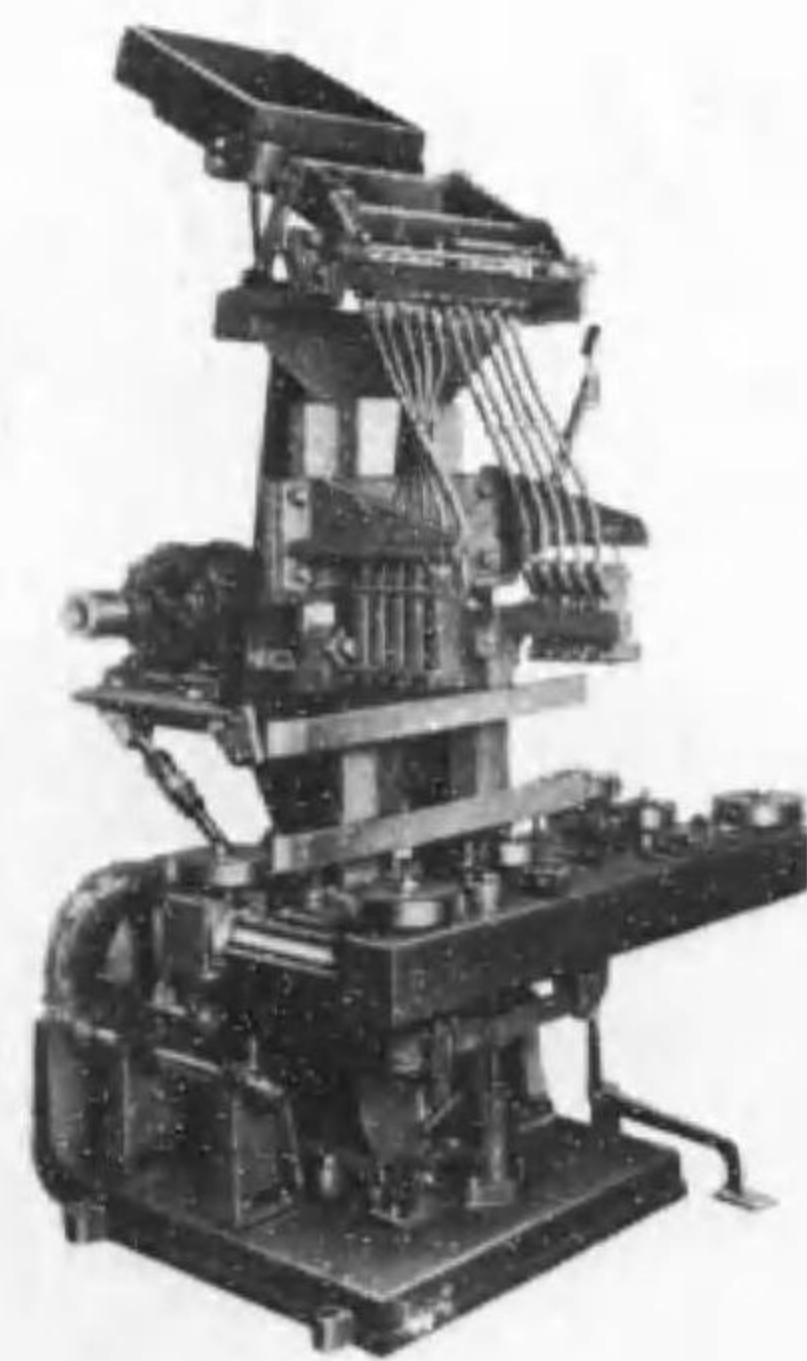


二 其 械 機 螺 製

石 油 槽

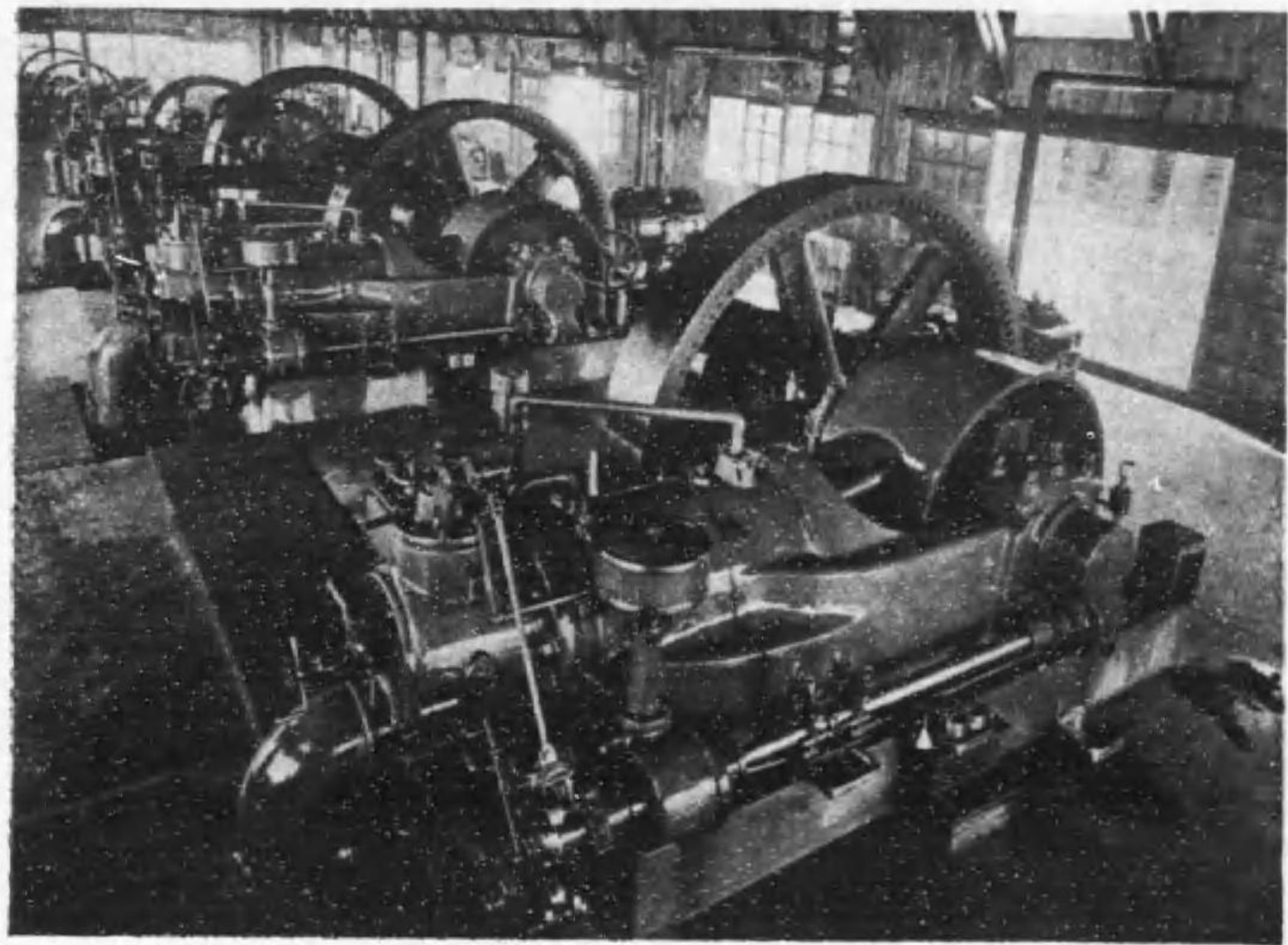


↑
製 罐 機 械

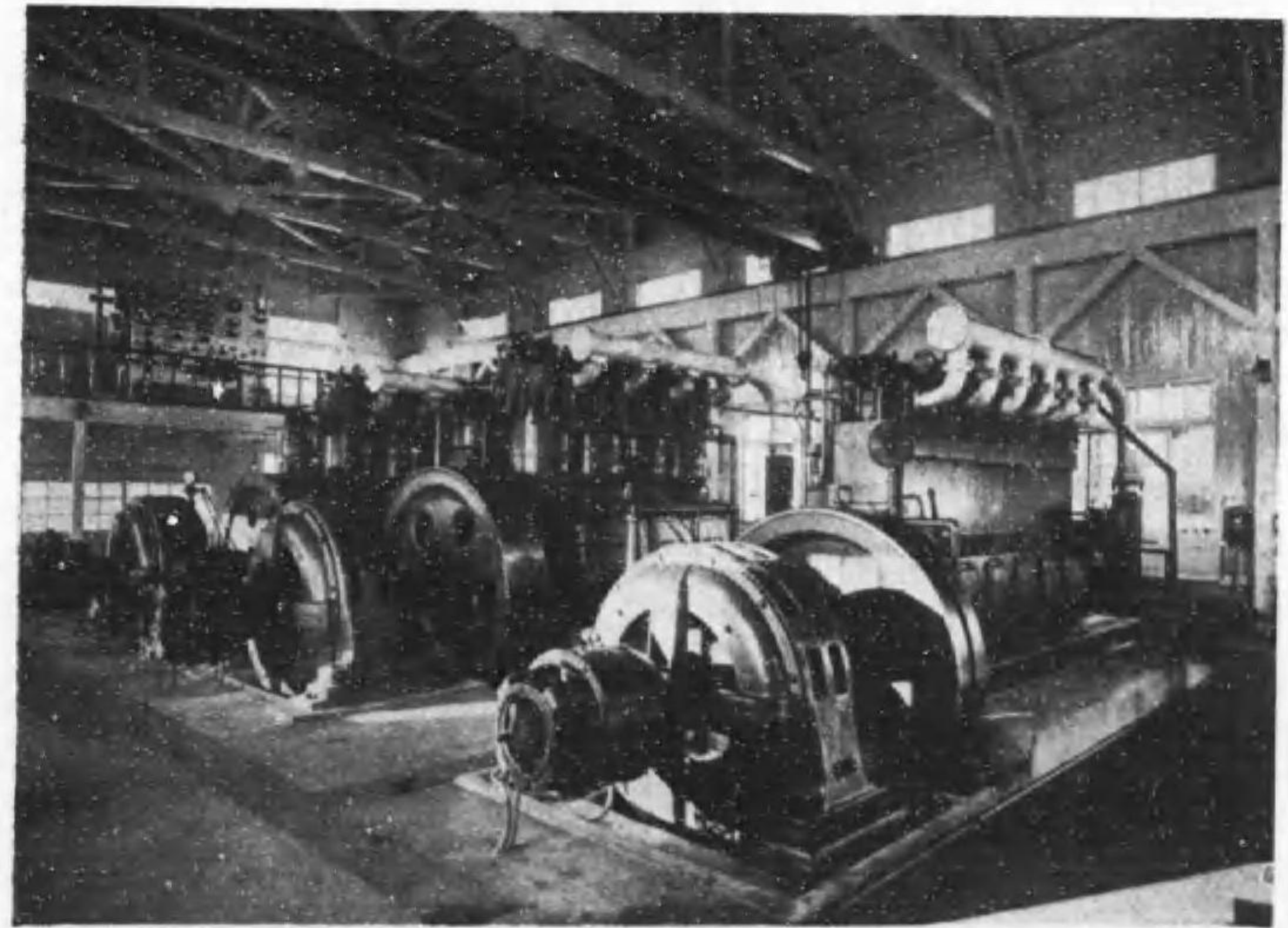


←
釘 打 機 械

天然瓦斯機關(横型)



天然瓦斯機關(豎型)



手前の第一基はゼーゼル機關
奥の第二基は天然瓦斯機關
豎型第三基の内

主要製品發達史

一、石油機械

總說

石油井の掘鑿及び製油其他一般石油に關係ある機械器具の製作並に修繕は當社企業の重要使命で、創業以來現在迄繼續して居る所である。

當初數年は新潟工場(現造機部工場)に於て専ら此等機械類を製作したが、石油事業の發達に伴ひ、油田に近く工場を設けた方が常に急需に應ずることが出來て相互の利益であるので、明治三十三年西山油田(新潟縣刈羽郡)の活躍に鑑みて柏崎に分工場(現柏崎工場)を設け、又東山油田(新潟縣古志郡)の發展により明治卅五年長岡に分工場(現長岡工場)を設け、新潟工場と相俟つて其製作に當つた。次で熊澤、高谷、直江津(何れも新潟縣下)及び土崎(秋田縣下)にも夫々分工場を設置し、各油田の活況に應

して相當の繁昌を來したが、其後油田の衰微するものもありて此等工場の多くは其必要を認めざるに至り、次第に柏崎又は長岡工場に併合するに至つた。従て兩工場は逐次改築や小擴張を重ね、今や相當設備の下に其製品の分野を定めて研究改良に力めつゝある。而して特殊のものに限り新潟工場に於て之を分擔製作して居る。蓋し交通機關の普及發達せる今日に於ては、往時の如く必しも油田に近く工場を設くるの要なく、寧ろ之を集中統合して多量製産に導くを以て經營上得策とする。而して當社は今や内地は勿論、南は臺灣より北は樺太に至る油田及び各地に散在する製油所其他石油關係事業に必須の機械器具を迅速に供給するの施設と用意とを有して居るのである。

創業當時の石油機械は進歩せる今日のそれに比較してはもとより幼稚のもので、今より之を見れば其製作に敢て困難を感じたとは想像し得ない程度のものであるが、當時工場設備完全ならず、技術も亦未熟であつた爲、此簡單なる機械類も、其各々の性能を究めて之を實用化するまでには尋常ならざる苦心と努力を拂つたものである。

明治三十三年笹村所長(現社長)は、農商務省の囑託を受け米露兩國に於ける油田及び石油機械の製作業を視察して歸朝したが、其當局に提出せる報告書は當時の我國石油事業に甚大の貢獻をなした。所長歸朝後は製品の改良、設備の完整に渾身の努力を拂ひ、成績大に擧つたが、當時石油事業亦爆發的の勢を以て發展し、之に要する機械器具の需要急且つ大なるものあつたので、當社は之に應じて専ら其の製作供給に當つた。當時當社の製品が頗る實用に適し、石油事業の發達を助くること如何に大なりしかは、明治三十五年十二月寶田石油株式會社及び同三十六年一月インターナショナル・オイル・コムパニー産油部と共に「所長外國視察以來一層精巧堅牢にして價格亦低廉實用に適し外國品に比し遜色なきのみならず、今や其必要なきに至る云々」の意味の感謝狀を寄せられたるに徴して明かである。

大正四年技師野口善平氏(現柏崎工場長)は米國に出張、同六年歸朝し、製品の改良に盡力する所あつた。

明治三十六年大阪に開催されたる第五回内國勸業博覽會に鑿井汽機及器具類を出品して一等賞牌を、同三十七年米國聖路易萬國博覽會にも同様出品して名譽銀牌を受け、又同四十三年英京倫敦に開催の日英博覽會に同様出品して名譽金牌を受けた。其他内地各博覽會に出品して賞を得たること一再のみでない。

明治四十三年五月清國陝西省に鑿井機械一式を輸出したが、是れ輸出の嚆矢にして、爾來南洋スマトラ、ボルネオに輸出し、北はカムチャッカ及樺太に相當量を輸出して居る。最近滿洲國にも製油機械、製罐機等の需要を見るに至つた。

石油事業は過去四十年間に驚く可き進歩發達を遂げた。此發達の狀況は石油の利用方面より極めて明瞭に窺ふことが出来る。明治廿八年創業當時は石油は單に燈火用としてのみ用ゐられ、製油上當然生ずる重油は之を「ムラ」と稱して、製油家が其始末に困つて居た事實は、今日想像も出来ない所である。今日石油が揮發油、燈油より、下つて道路のアスファルト、靴墨のカーボンブラックに至るまで其百パーセントを利

用せられ、尙且つ足らざるを憾むの狀況に發達せるは、近代科學の偉大なる成功と云はざるを得ぬ。之と同様に鑿井、製油其他石油關係の技術は皆躍進的の發達を遂げ、從て之に要する機機器具も亦殆んど隔世の感ある迄に改良進歩を見るに至つた。以下項を別つて之を概説しよう。

鑿井機器具

石油鑿井用の機械及器具の發達の狀況を敘するには鑿井法進歩の狀況を概説するを便とする。

手掘 普通の水井戸掘と同一にして人力にて掘下げ、木杵を篋めて土砂の崩壞を防ぎ、更に掘進む。相當の深さに達すれば空氣の流通不完全なるが故に足踏の輪カマを以て送風換氣を計り、其深さ普通百間と稱せられる。石油事業の創始期には主として此方法に依つたが、今は一部地方に行はれて居るのみである。

上總掘 上總地方に於て古くより水井戸掘りに行はれたるを明治廿五年頃石油井に應用したものである。ヘネと稱し細長き竹片を長く繼合せたるもの、端に刃物（ピッ

ト)を取付け、人力により上下し、衝撃を與へて掘進する。櫓を有し、多角形のヘネ車を備ふ。ヘネ車はビットの取替等の際ヘネを捲取る用をなす。ヘネ車の上部に丸竹を水平に取付け、一端を固定し、他端を井戸の中心上に置き、ヘネを吊し、丸竹の彈性を利用して、上下動により人力を助けしめるのである。至つて原始的ではあるが、面白く考案せられたものである。普通深さ二百間を掘り得ると稱せられる。油井には明治三十年前後までは相當に使用せられ、今日も尙一部地方に行はれて居る。

綱掘 上總掘を動力により機械的に操縦するものと謂ふも不可なく、ヘネの代りにワイヤロープを使用し、ロープの端にはチャールス、ビット等の重き掘鑿器具を備ふ。人力の代りに蒸気罐及汽機を置き、其動力をバンド・ホキールに傳へ、バンド・ホキールのクランクはウォーキング・ビームに上下動を傳へ、以て上總掘に於ける丸竹の如き用を便せしめ、井壁の崩壊を防ぐ爲に鐵管を嵌入する。掘鑿器具の取替へ、鐵管嵌入等には高き櫓上に滑車を置き、クランク軸より傳動せらるゝブル・ホキールに依て

操業する。又掘層はベラーなる汲取器をワイヤロープにて櫓上の滑車を経てサントリールに連ね、動力にて上下して井底より汲上げ排棄するのである。大體の機構巨大にして掘進甚だ速かである。もと深度四百間程度なりしも、今日は七、八百間に達し得るに至つた。綱掘機械器具は當社の永年最も多く製作せるもので、その初め明治廿三年日本石油株式會社が米國より輸入して成功し、斯界に一新紀元を劃したのである。

水壓回旋掘 綱掘と全然方式を異にし、掘鑿管端にビットを付し、之を回轉しつつ、掘進すること正に錐を揉むと同様である。掘層は掘鑿管より壓力ある泥水を送りて管と坑壁の間を経て坑外に排出せしめる。殊更に泥水を用ゐるのは掘層の排出力を増すと共に、坑壁を塗粧して之を保護する爲である。綱掘の如く掘層の排出毎に掘鑿器具を上ぐるの煩なきが故に、殆んど作業を休止する事なく連續的に掘進することが出来る。其掘進速度は綱掘式の四倍と稱せられる。

掘鑿管の回旋はロータリー・マシンに依る。マシンのテーブルには挿入鐵管の通過す可き孔を必要とする。此孔の大きさは水壓回旋掘鑿機械の大きさを表はす稱號で、例へば二十吋ロータリー・マシンは此孔徑二十吋管を通し得、各部の強度之に匹敵す可く設計されるのである。ロータリー・マシンを回轉するには汽機よりドロウウォークスを経て、鐵鎖を以て傳動するのである。

本邦に於ては明治四十五年日本石油株式會社が米國より該機械を輸入し、深さ五百間を能く二ヶ月にして掘鑿し、驚異的の成績を示した。現在にては千間以上の深度に達するもの少なくない。

以上鑿井法中手掘、上總掘は機械製作者には殆ど交渉ないが、綱掘、ロータリー掘は地質の軟硬、井戸の深淺、掘進速度等に從て適當なる能力、強度の設備を要し、且つ斷えず研究改良せらるゝが故に、鑿井機械器具の種類は今や無數と云つてもよい程に多い。此等を一々説明することは困難であるから、以下主要なるものに就いて述べる

ことにする。

汽罐 鑿井用の汽罐は殆んど全部外焚多管式である。是れ交通不便なる油田に運搬する便利を考へたるもので、現地組立を普通とする。明治三十年初めて製作した。初期のものは徑四呎、六呎、長十呎、汽壓八十五封度程度で、爾來年々相當數を製作供給したが、漸次其容量及汽壓共増大し、特にロータリー掘の出現するに及んで益々大型に進んだ。昭和二年製作せる日本石油株式會社の徑七呎長二十呎汽壓百廿五封度は最大のものにして、最近製作せる日本鑛業株式會社の徑六呎長十八呎汽壓百八十封度のものは最も高壓のものである。

汽機 鑿井用の汽機の特徴は逆轉裝置と變速裝置を有し、遠距離より操縦し得られ取扱簡單、構造堅牢にして運搬の便を考慮せることである。明治三十一年初めて製作した。直徑九吋行長十二吋にしてモーガル式と稱するものである。其後逆轉機構の異なるウルフ式と稱するものも製作した。累年頗る多數を製作供給したが、容量も漸次に

増加し、明治四十五年柏崎工場にて設計製作せるものは徑十吋半行長十二吋汽壓百廿五封度で、種々の改良を加へたるが故に改良型と稱し、斯界に賞用せられた。ロータリ掘の輸入と共に俄然其馬力増大し、單筒にて徑十四吋行長十四吋汽壓百八十封度にまで達した。最近製作せるものは徑十二吋行長十二吋汽壓百八十封度の複筒で、クラック軸及びピンにローラー・ベヤリングを使用し、全密閉式として、運動部をオイルバス中に納め、全然其形態を改めた。創業當初から今日まで製作せる數量は通計壹千臺を超え。我國油田に於ける此種原動機は大部分當社の供給する所と謂ふも過言でない。

石油發動機 明治卅六年横置二サイクル、ミーツ・アンド・ワイズ式石油發動機にレバリング・ギヤを考案して附屬し、日本石油會社狸平鑛場に於て掘鑿用に應用して好結果を收めた。此考案並に製作は長岡工場之に當り、當社の特許品である。鑿井に石油發動機の利用は汽罐汽機に比して設備輕便なると、給水不便の場合便利なるが故に、試掘井には相當に使用せられた。

ディーゼル機關 石油發動機と同一理由にて昭和四年日本鑛業株式會社岡野鑛場に於て掘鑿に使用し、深度千二百米に達するを得て良好の成績を擧げた。次で中野興業株式會社も之を採用した。エンヂンの馬力は六六乃至七五にして、蒲田工場に於て製作し、逆轉及變速裝置一切は柏崎工場に於て考案完成した。

泥水唧筒 ウォーシントン型複筒蒸氣唧筒にして、汽壓一二五封度乃至一八〇封度、泥水壓力一、〇〇〇封度乃至一、五〇〇封度である。泥水用なるが故に水筒、ライナー及瓣は特殊材料を使用する。其最大なるものは汽筒十四吋、水筒七吋四分ノ一、行長十四吋である。蒸氣に依らずして電動機に依る泥水唧筒も數種を製作した。

櫓及櫓金具 網掘の櫓は高さ八間乃至拾貳間を普通とし、木製であるが、ロータリ掘は高さ拾五間乃至廿一間で、大型のものは多く鐵製を使用せられる。最近高三十四米（十八間七）の鐵製櫓を多く製作して居る。網掘の櫓金具はバンド・ホキール軸則ちクラック軸の徑を以て全一式の金具の代表として表はす習慣であるが、明治三十

年頃のものは三吋で、クラウン・ブリーリー、サンドリール及ウォーキング・ビーム等の金具を相對關係より適切な寸度に定められた。それが漸次大型に進んで、明治四十年頃には四吋半、五吋に、同四十五年頃には六吋に達し、最近七吋半を製作した。七吋半槽金具一式は其重量十數噸に達する。

ロータリー・マシン及ドロ・ウォークス ロータリー掘は強力にして急速作業なると同時に劇しき衝撃を受くることある爲、ロータリー・マシン、ドロ・ウォークス及び其傳力装置一切は頗る堅牢なるを要し、全部鑄鋼製である。ロータリー掘渡來の頃はマシンは十六吋にして、ドロ・ウォークスは二速度であつたが、テーブルは二十吋より更に二十四吋に進み、全密閉安全装置を附し、ドロ・ウォークスは三速度又は四速度となり、其軸徑も著しく増大した。汽機、ドロ・ウォークス、ロータリー・マシン間を傳力する鋼鎖は全部輸入に俟つたものであるが、昭和四年柏崎工場にて製作を開始した。参考の爲、坑井の深度と機構の大さとの大體の關係を表示すれば左表の如く

である。

	大正初年	大正末年	昭和五年來
深 度	四〇〇間乃至六〇〇間	六〇〇間—八〇〇間	八〇〇間—一、〇〇〇間
ロータリー・マシン	材質鑄鐵 徑 一六吋—二〇吋	鑄鋼 二〇吋—二四吋	鑄鋼 二〇吋—二四吋
ドロ・ウォークス	速度二 軸徑五吋	二—三 六吋	三—四 七吋
泥水唧筒	壓力七五〇封度 大さ五・七五吋×二二吋	一、〇〇〇封度 六吋×二二吋	一、五〇〇封度 七・二五吋×一四吋 七・二五吋×二〇吋
ウォータースキベル	荷重八〇噸	一〇〇噸	一五〇噸
汽 機	汽壓一〇〇—一二五 大さ一〇・五吋×二二吋	一二五 一〇吋×一〇吋複節 一二吋×一二吋單節	一二五、一五〇、一八〇 一一吋×一二吋複節 一二吋×一二吋複節

チャールス 網掘要具の一にして、寫真に示す如く摺動する二つのリンクの兩端に雄雌の螺絲を設けたる如き構造を有し、一見其鍛造の容易ならざることが知られる。螺

絲なき内端は操業中烈しき衝撃を受けるので、其磨耗を防ぐ爲早期には此部に鋼を鎔合し、他は鍊鐵にて鍛造した。之をスチールラインド・チャールスと稱し、最大のものはストローク三十二吋、重量數十貫に及んだ。明治四十五年チャー・スチールと稱し、特殊材料を米國より輸入して全鋼製とし、大に安全性を高めた。長岡工場にては此鍛造は結局材質に悪影響を與ふるを憂ひ、一本の鋼棒より削り出し、所謂ソリッド・チャールスの製作に成功して特許を受け、注意深き鑿井家に愛用されて居る。近年チャールスの安全性を更に高むる爲特殊熱處理爐を設けて調質し、大に品位を高めた。

ビット 掘鑿最先端の錐(ビット)の變遷發達を叙するは興味あることと思ふ。上總掘のビットは管端に一文字刃を鍛合し、管は掘屑の溜る場所を形成した。綱掘のビットは目的に依て種々の形狀あるも、普通重き鑿狀を呈し、最も大なるはスバッチング・ビットと稱し、幅十八吋に及ぶ。明治四十五年前までは鍊鐵にて作り、刃先に鋼を鍛接し、此附鋼長一尺につき値若干と定めた。明治四十五年クレセント・スチール又は

ビット・スチール(含炭量〇・七)と稱する特殊鋼を米國より、次で獨逸よりも輸入して全鋼製とした。

ロータリー掘のビットは魚尾形にして、上部に泥水噴出口がある。四ツ羽根ロータリー・ビットは直徑二十二吋、重量五拾貫を超ゆるものあり、其鍛造は容易でない。ロータリー・ビットはクロム・スチールを使用する。近時、刃先にステライトを鎔接して著しく其磨耗を減ずるに至つた。又同様の目的にてタングステン・カーバイトを主成分とする種々の合成金を種々の名稱にて製出せられて居る。

ロータリー掘に於て岩石を穿鑿するビットにはロック・ビット、コア・ビット等と稱し、構造複雑にして最早工具と云はんよりも機械に近きものが製作、使用されて居る。

鍛造技術 上記掘鑿器具は殆んど鍛造品にして、構造の極めて複雑なるものあり、又硬鋼、特殊鋼の重量品多く、此等の工作には相當の技術を要する。特に當社創業後數

年間は我國の製鐵業も幼稚にして、適當なる材質は勿論、所要の大きさの材料を得ること容易ならず、又輸入も意の如くならなかつた爲、重量品（ツールレンチ、ブローリング、エレベーターの如き）の工作には、細き材料を据込み又は積金（小材を積重ねて鍛合す）して先づ所要の材料を造り、次で製品に及んだもので、其苦心と精根は非常のものであつた。之に伴つて記載すべきは、重油を燃料とする鍛工爐にして、笹村所長の發明にかゝり、明治三十六年四月二日登録、特許第七、二二四號鍛工石油爐日本石油株式會社の所有となつて居るものがそれで、我國に於て重油を鍛工に應用せる嚆矢である。此爐を職工はムラホドと稱し、加熱時間が石炭に比し著しく短く、頗る經濟的なるが故に、後年陸軍工廠にも數基を納入し、第五回勸業博覽會に出品して受賞した。今や重油價格變動により其經濟的價值に變化を來せるも、尙之を利用する場合が多い。

インターチェンジピリティーと工作技術 掘鑿器の油井内に入出するものはテーバ

ーのスクリー・ジョイントを以て連結する。テーバーは連結分離に便するのである。網掘にはV捻子を使用し、ロータリー掘にはアクメ捻子を用ゐる。此ジョイントは絶對彼我互換式にして、クロス・リミットでなければならぬ。當社は創業以來四十年、此のインターチェンジピリティーを保持して誤らず、又以て機械工作の成功と稱するを得るであらう。其他本史に特記せざるも、掘鑿器中にスベヤ、アンダー・リーマー等工作の簡單ならざるものあり、創業當初機械工具の整はざる日には尋常ならざる苦心を拂つたものである。ロータリー掘器具中ドリル・システムは長三十八尺に達する角棒であるが、往時は各邊に溝を掘り、鐵管を埋めて泥水を通じたが、今日では全長を貫通する二吋半孔を穿鑿するに成功して居る。此種工作技術の進歩については一々枚舉の違がない。此には僅に其一例を挙げたるのみである。

特殊鑿井機械

從來建築物關係の地質調査及び炭坑に於ける炭層調査の爲特殊輕便の掘鑿装置を屢々設計製作したが、近年軍部の注文にて貨物自動

車を利用せる可搬式綱掘鑿井機を設計製作した。井戸徑五呎、深さ五百尺を掘鑿し、揚水唧筒を附設して一時間約二十石を揚水せしめ得た。走行、掘鑿、揚水共に自動車自身の二十五馬力ガソリン・エンジンに依り、總自重五噸にして時速拾哩を得る。其他國産自動車に同様の装置を施して坑徑百耗、深さ百米を掘鑿し得るものも多數製作納入した。

採油機械器具

オイル・ポンプ 油井より原油を汲取るには普通唧筒による。之をオイル・ポンプと稱し、種々の形式のものがあるが、當社の製作するものはコンモン・オイル・ポンプと稱し、最も一般的のものである。ボールの長さ六、七尺にて、下端にフット・ヴァルヴを有し、アッパー・ヴァルヴ即ちプランジャーを長さロッドに連結してある。深井に於ては壓力三千封度にも達し、且つ油は常に砂を混ざるものなるが故に、此點に特別の考慮を拂つたものである。柏崎工場にて製作し、成績良好である。

ポンピング・パワー 一井に一原動機を備へて採油する單獨採油に對し、數井若しくは數十井を一括して一個の原動機により採油するポンピング・パワーは、毎分三八回程度に回轉する垂直軸に大なる偏心盤を設け、盤の數に依て二段、三段と稱する。従來はベッルギヤ・ドライブ型を多數製作したが、昭和八年長岡工場は其構造を改良してウォーム・ギヤ式強力のものとし、北樺太石油會社に納入して好評を得た。

製油機械

往時の製油法 嘉永年間越後柏崎附近半田村に製油機械の最も原始的にして簡單なるものが設置された。是は容量三斗の平釜を蒸溜釜とし、同様の釜にて覆ひコンデンサーを形成したものである。明治三十年頃までは此式の稍進歩せるもので、蒸溜釜とコンデンサーを分離して容量五石、十石程度のもものが盛に使用せられた。蒸溜釜、コンデンサー共鑄鐵製であつたが、後には鐵板製とし、當社も多少製作した。

普通蒸溜法 明治三十四年頃米國より新式蒸溜装置が輸入された。其原則は往時の

製油法と異なる所ないが、曩には單に燈油のみを製出せるに反し、揮發油、燈油、輕油と其製油の範圍を擴大し、且つ一層大規模に製出し得るやう工夫せられたものである。其後製油技術は逐年進歩發達し、機械油、石蠟等をも製出し得るやうになつて、勢ひ機械の複雑化を來せるのみならず、原油の種類により、又製品の種類により種々異なる設備が考へらるゝに至つた。蒸溜釜の容量は最初百石程度であつたが、次第に増大して、二百石、三百石の如きは小型に屬し、六百石の大型を製作するに至つた。

連續蒸溜法 普通蒸溜法を能率的に改良せるもので、數個の蒸溜釜を少し宛其高さを異にして据付け、第一の釜には日夜間斷なく原油を注入し、釜内の油は蒸溜せられつゝ次々の釜に斷えず移り行き、連續蒸溜して休止する事がない。大正三年日本石油株式會社秋田製油所に納入せる六百石六基の連續蒸溜装置一式は我國に於ける最初の試みにして、相當大規模のものである。

減壓蒸溜法 良質の潤滑油を製造するを目的とするものにして、其方式に米國のシ

ルツ式、獨逸のヘクマン式等あり、之に單獨蒸溜、連續蒸溜の別がある。當社の製作するものはヘクマン原理のものに種々の改良を加へたもので、其研究家宮本雄助氏の特許及實用新案並に當社の特許を含み、同氏と協力して已に多數の建設を見た。本製油法は蒸溜中釜内を真空に近く減壓する爲に高級のヴァキューム唧筒を必要とする。此唧筒と共に装置一切を新潟工場にて製作し、各所に供給して常に好成績を擧げて居る。目下丸新製油所註文百七十石三基の建設中である。

分解蒸溜法 輕油、重油等を分解して、需要最も旺盛なる揮發油を製出する方法にして、油を高壓の下に高溫度に置き分解蒸溜するのである。罐式、鐵管式、折衷式等あり、此等に又種々様々の方式がある。大正七年日本石油株式會社のものを初めとし、各會社の色々の形式のもの、構成に關與して來た。

ガソリン・プラント

天然瓦斯はもと燃料及點燈の外利用の途がなかつたが、明治四十五年頃米國に於て之より揮發油を採收するの法發明せ

られ、大正三年日本石油株式會社は其機械を輸入して西山油田に据付け、好結果を擧げた。此方法は瓦斯を壓縮及冷却して液化するものであるが、大量瓦斯の處理には壓縮機の容量甚だ大なるものを要するの不便あり、爲に其後吸收法の出現を見、更に進んで此等兩式の併用法が採用せらるゝに至つた。

大正四年新潟工場に於て此装置の主要機なる蒸汽機直結二段壓縮五十萬立方呎（一晝夜に壓縮するフリーガスの量）瓦斯壓縮機を製作して日本石油株式會社に納入し、好結果を得た。次で大正五年小倉石油株式會社の註文により五十萬立方呎壓縮式プラットフォームを柏崎工場にて設計製作して好果を得、二十年後の今日尙運轉しつゝある。其後小は五萬立方呎より大は百萬立方呎の壓縮式、吸收式並に併用式ガンソリン・プラットフォームを建設せるもの相當數に及んで居る。

送水、送油用機械器具

石油坑井は概ね廣範圍に亙る油田中に散在して居るので、此等に給水をなし、或は各井の産油を集收する等、送

水送油は油田に於ける重要な設備の一である。特に油田より製油所又は油槽車、油槽船等に送油する爲には數哩乃至數十哩に達するパイプラインあり、又各製油所内に於ても送水送油に關する設備を要する。従て石油事業には各種各様の唧筒及器具が必要である。當社は之に應じて蒸汽唧筒にはウォーターシントン型でピストン型、プランヂャー型、パワー唧筒には二筒三筒等を、又セントリフューガル唧筒も各容量及各壓力に對するものを頗る多數製作した。各種瓣類に至つては枚舉に遑が無い。此等唧筒に就ては一般諸機械の項に細説する。

製蠟機械

パラフィン系重油を更に濾過してピッチを分離し、冷却装置にて冷却する時は石蠟は結晶するを以て壓搾濾過し、之を精製して純白の石蠟を得。此等に用うる機械はブライン・クーラー、チリング・マシン、フィルター・プレス、スキッチング・パン、モールドディング・マシン等である。

大正四年本法の輸入せられて以來、當社にては其材質、熱處理等を研究して全部之

を製作するに至り、各所に納入した。目下滿洲石油會社の爲め装置一切を製作中である。

石油容器製造機

鋳力罐製造機

石油類が五ガロン入（約一斗）鋳力罐にて運搬せらるゝは周知の事であるが、日本石油株式會社は容器自給の目的にて其柏崎製油所に製罐工場を設け、當社柏崎工場は自然早くより其修繕等に關係する所あり、明治四十一年始めてシーム・ローリング・マシンを製作し、大正三年ドイツ・マシンを製作した。

大正八年八幡製鐵所のベンゾール罐製造プラントとして製造全工程に要する各機一切を製作納入し好評を得た。爾來各石油會社、製糖會社、軍部等に供給し、目下滿洲石油會社よりの註文品を製作中である。

鋳力罐の製作は全工程を約十二工程とし、各工程毎に特殊の機械を要し、作用巧妙にして機構複雑、マス・プロダクションを目標とするが故に概ね高速度回轉である。

且つ製品の統一を要するが故に材料を精選し、精密工作法を採つて居る。鋳力罐上端には製造會社商標を打ち出しにするを普通とするが、當社は之に要するプレス用ダイスの設計製作に獨特の經驗と技能を有して居る。

近來製罐機の能率を一層高むる爲にインディヴィデュアル・モータードリブンに改め、押釦に依り操縦することとした。此等製罐機械は何れも柏崎工場に於て製作して居る。

ドラム罐製造機

鋳力罐に比し更に大量輸送に適するドラム罐の製作も亦近來發達の傾向にあるが、當社は之に留意し、昭和六年横濱齋藤ドラム製罐工場の爲に新潟工場にて一式を製作して好成績を得、次で日本窒素肥料會社、日本石油會社にも納入した。尙此製作には一段の努力をなすつもりである。

計量注入機

鋳力罐に石油類を計量しつゝ、注入する機械にして、重質油には開放型、輕質油には密閉型を製作して居る。揮發油の計量注入機の氣化防止につき柏崎工場にて特別の考案を施し、特許を得た。計量注入機は十二罐式と六罐式を標準型とし

て製作して居る。同時に十二若しくは六罐に注入するものである。更に重量制にも進出せんとしつゝある。

石油箱製造用機 鉄力罐は更に木製箱中に二箇宛を納めて運搬するのであるが、昭和四年來此木製石油箱製作用の釘打機を製作して居る。釘打機は釘の確實なる送付困難にして、之が改良に苦心したが、昭和八年簡單なる機構を發見して特許を得、實用上賞讃を博した。軍部、小倉石油會社其他に納入した。

商標印刷機 前記木箱の外側に商標を印刷する機械にして、一色刷及二色刷を製作し、諸方に納入した。

鐵製油槽

當社は夙に石油貯藏用鐵槽を製作し、明治三十四年早くも日本石油會社柏崎製油所に一萬石鐵槽を建設した。爾來斷えず種々の大きさのものを製作し、其數擧げて數へることが出来ない。昭和五年北樺太石油會社の爲に五千噸（三萬石）及一萬噸（六萬石）各數基を北樺太の現地に組立てたが、總重量一千五百噸に

及び、所要鐵板を輸入し、大阪に保税工場を臨時建設して、下拵へをなせる上運搬し、三ヶ月にして完成した。此外國內各地、朝鮮其他に建設せるもの頗る多く、常に獨特の技能を發揮して居る。

天然瓦斯關係機械

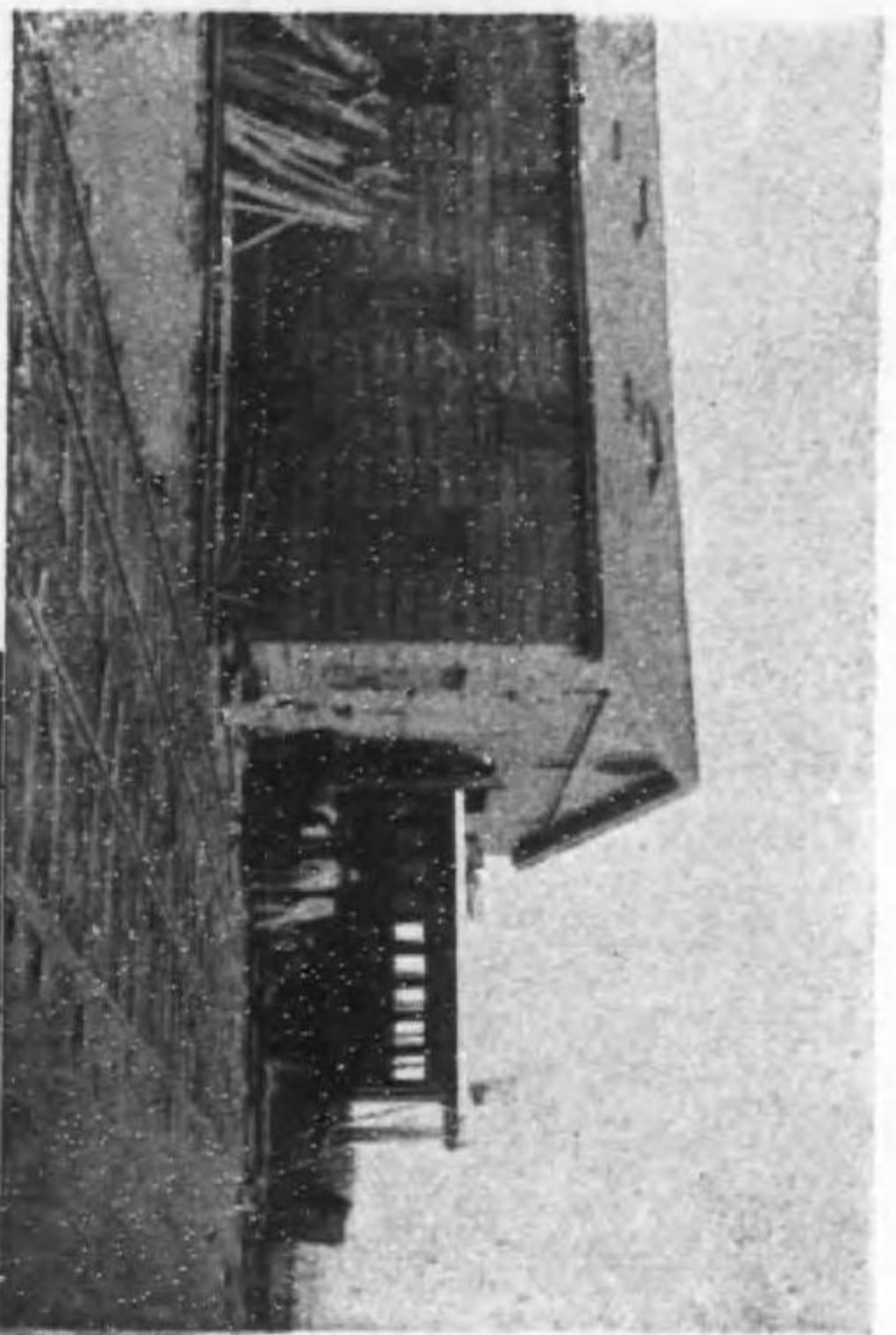
油井より發生する天然瓦斯は之より揮發油を製出する外種々利用せられ、從て之に關する機械類も少なくない。

瓦斯機關 は其主要のものであるが、天然瓦斯はタウンガスに比してヒート・ヴァリュー大なるが故に、種々研究の末之に對應する機關の製作に成功し、油田に於ける各種動力用に供した。就中中野興業株式會社の五百キロの發電所は顯著なるものである。昭和六年蒲田工場にて完成した。

汽罐燃料 としては最も早くより利用せられたが、之が經濟的燃焼につき長岡、柏崎兩工場に於て深く研究する所あり、有效なる燃焼器を製作するに至つた。

熱處理爐 に應用して理想的の高熱を得、製品を改善し、作業に便して居る。

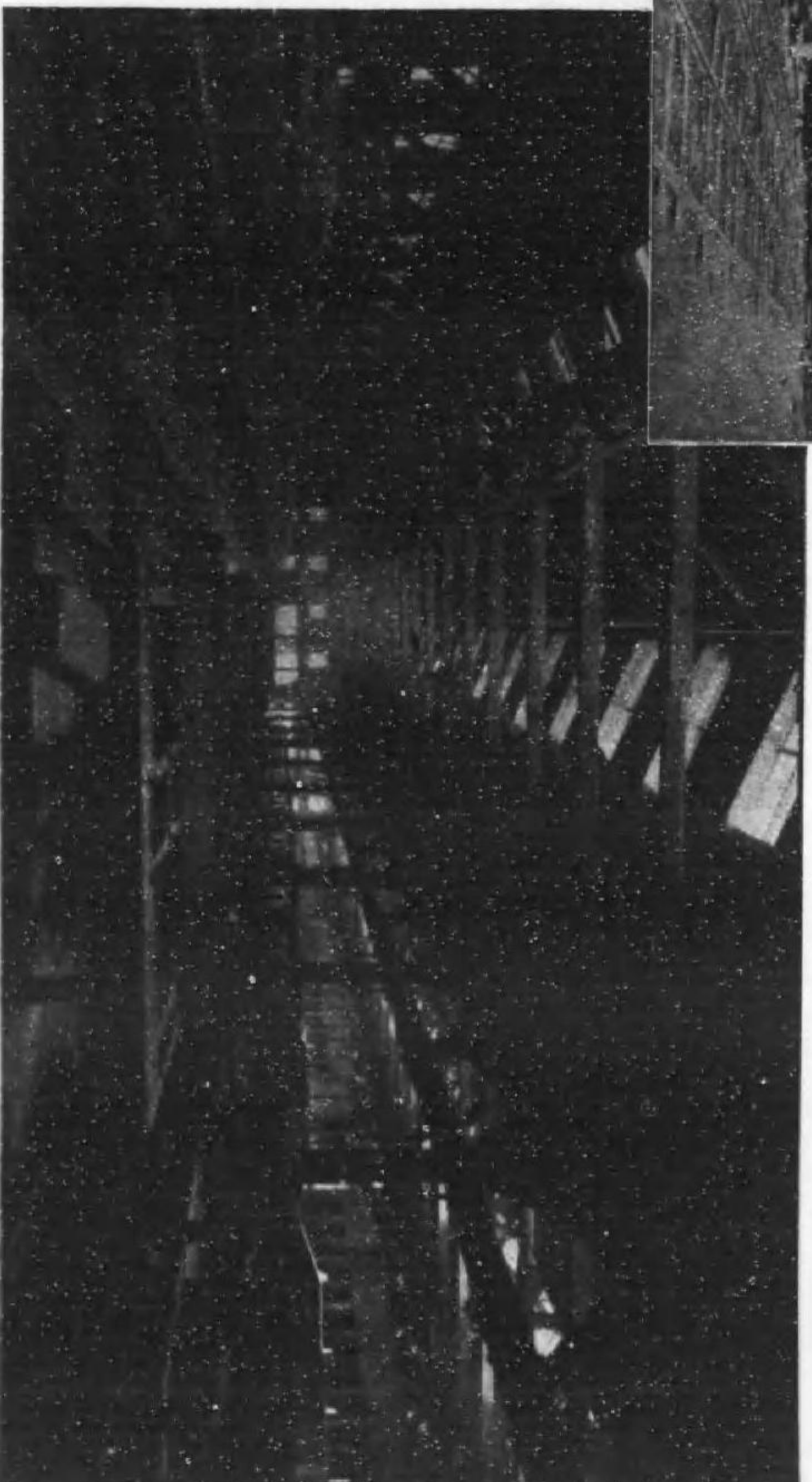
張 擴 の 場 工 輛 車 社 當



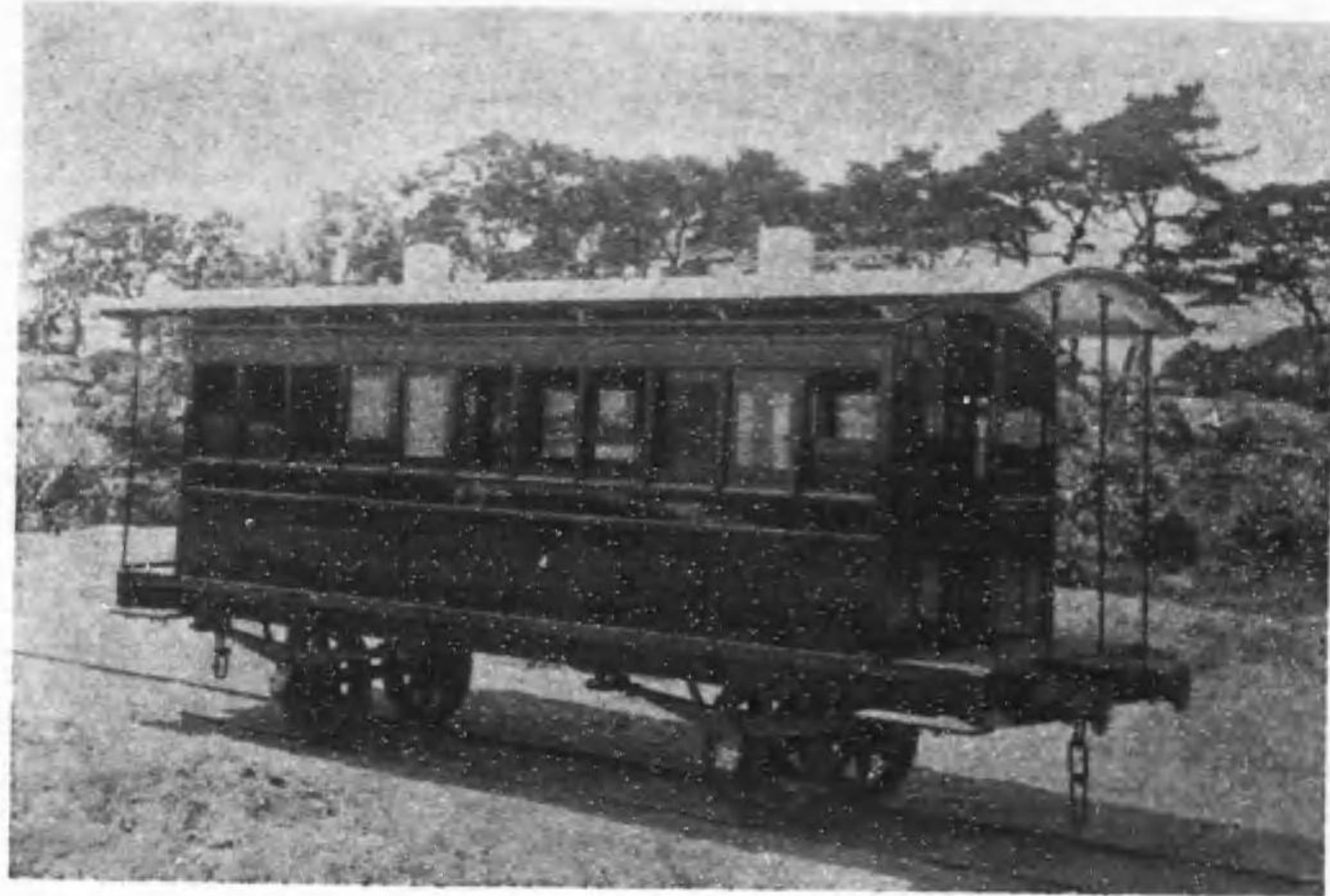
→

輛 車 の 在 現
部 内 の 場 工

←
場 工 輛 車 の 頃 年 十 三 治 明
影 撮 の 時 當 成 完 車 客 文 註 社 會 道 鐵 越 北



歩 進 の 車 客

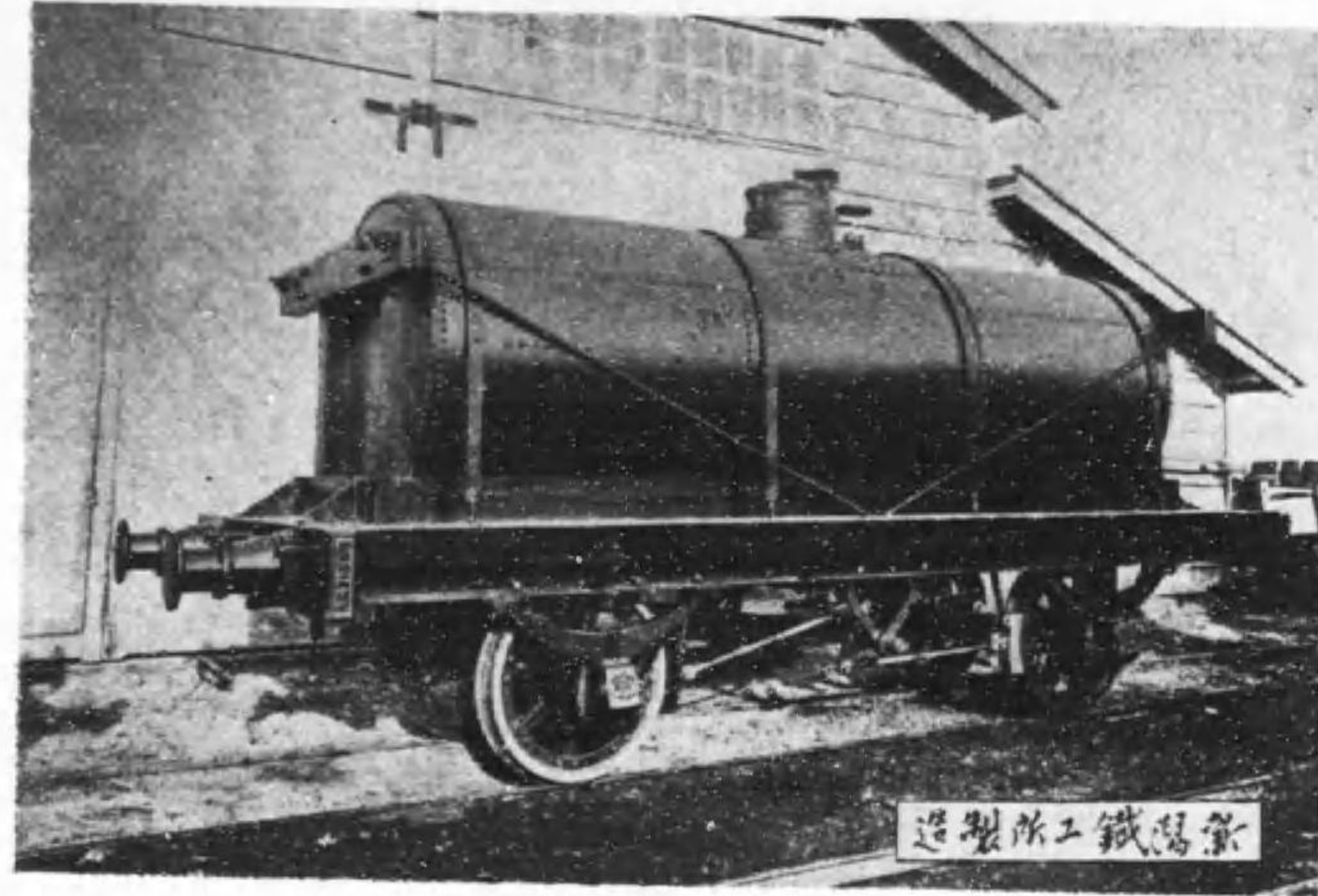


てしに車客等三るたし入納へ社會式株道鐵越北年十三治明
りな車客るたし成完に初最が社當



車臺寢等三製鋼るたし入納へ省道鐵年八和昭

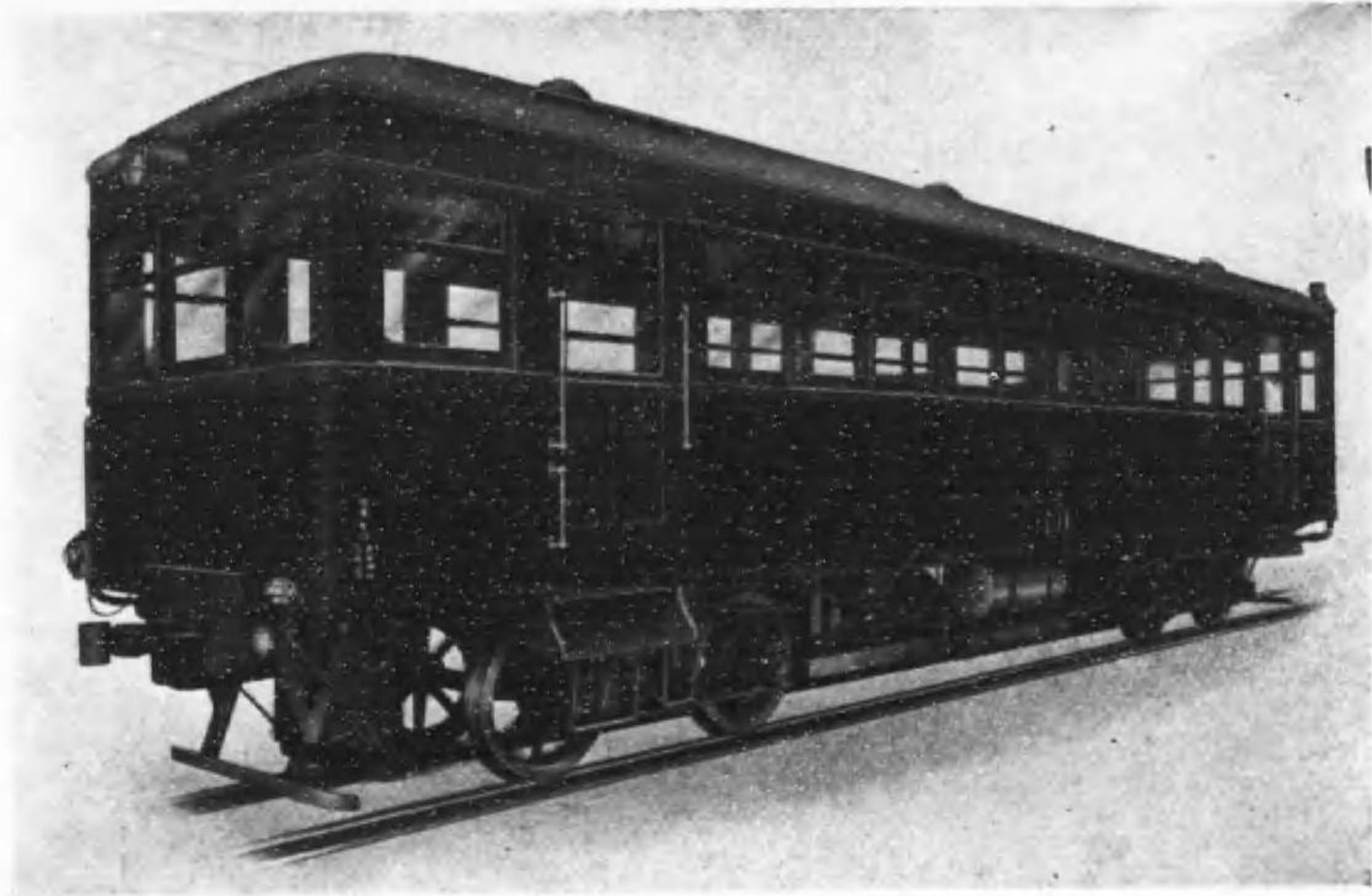
歩 進 の 車 ク ャ タ



車クッタの文註氏吉常倉小年二十三治明



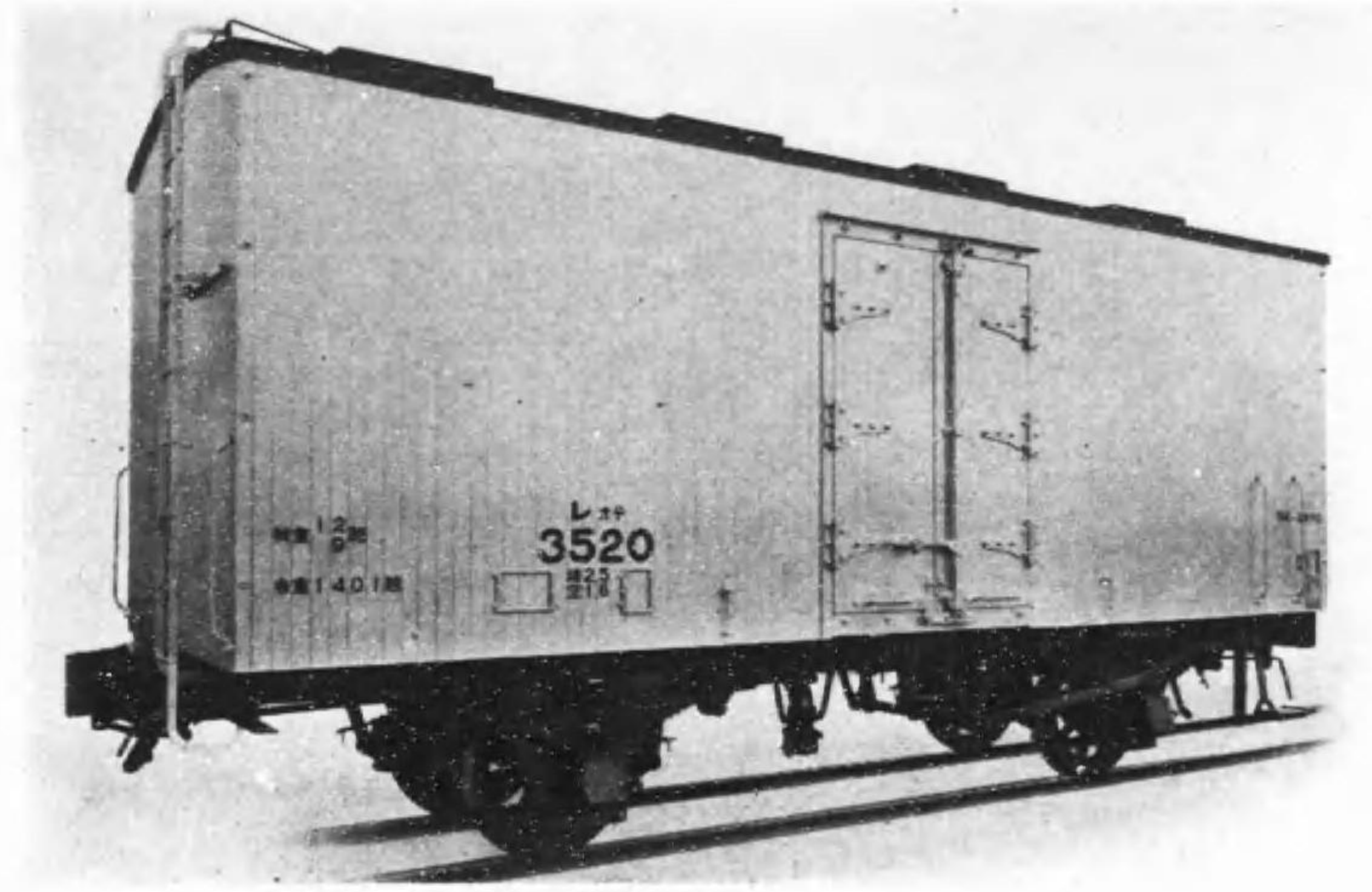
てしに車クッタ油ルーゾンべるたし入納へ社會式株山鐵井三年五和昭
りなもの初最るたし成完を輛車種の此が社當



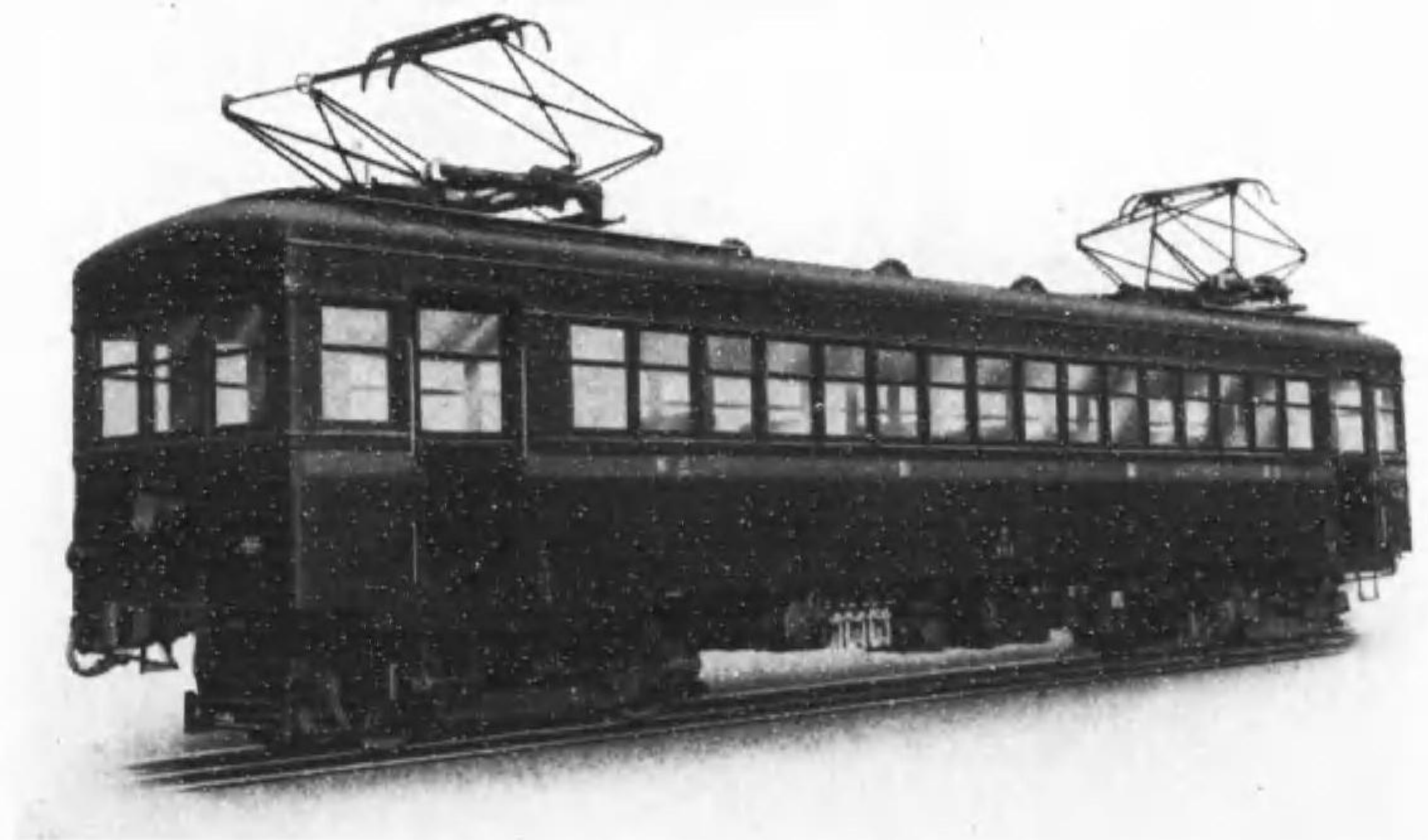
のもの初最るたし成完を輛車種此が社當 車客ルゼーイデ製鋼半
 入納へ社會式株道鐵宮參前筑年七和昭てしに



入納へ省道鐵年八和昭 車客ソリソガ等三製鋼



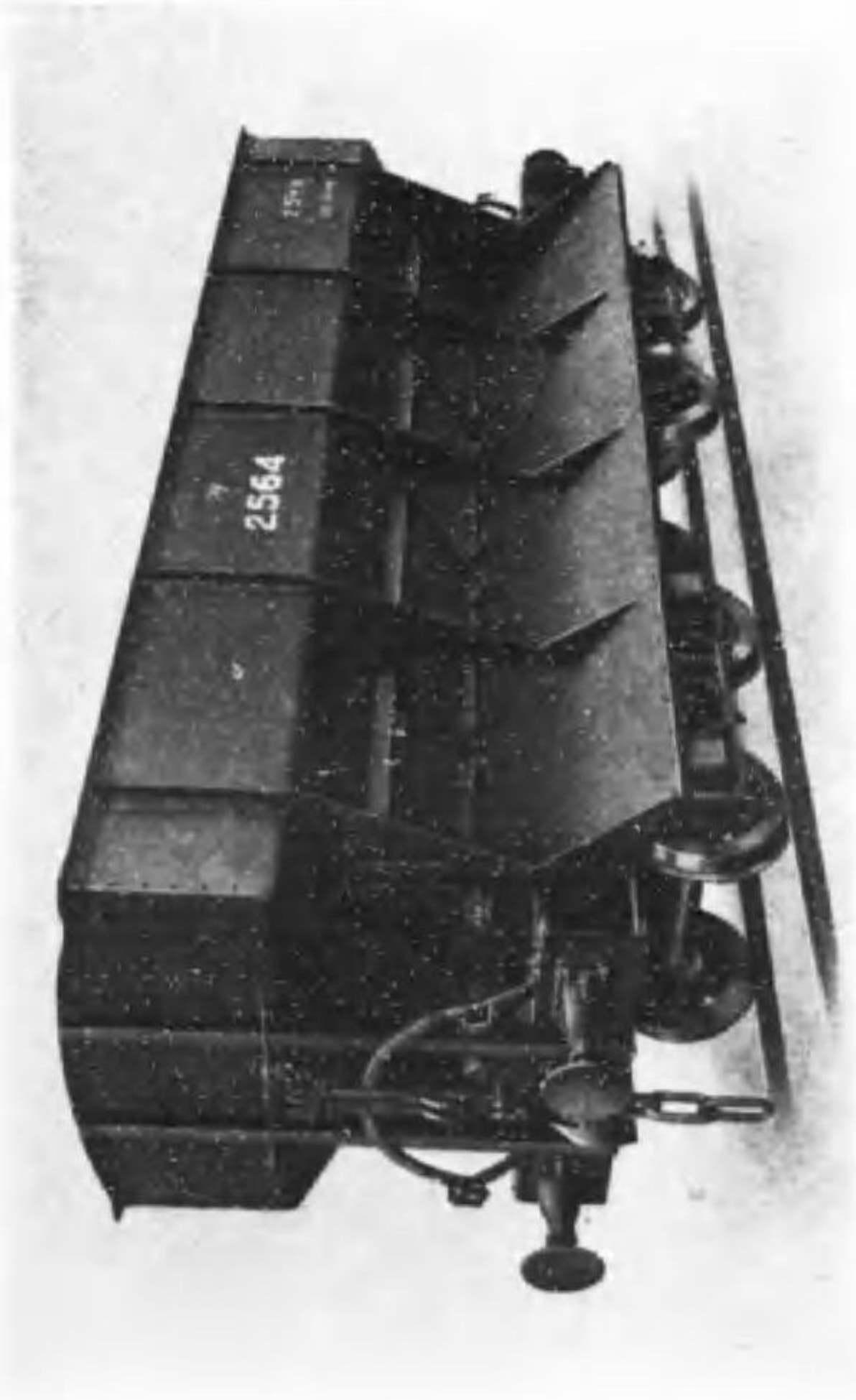
入納へ省道鐵年八和昭 車藏冷



てしにのもの初最るたし成完を輛車の種此が社當 車電製鋼全
 入納へ社會式株道鐵延身士富年三和昭

鋼製二十五年積運鐵車

鶴見臨港鐵道株式會社
半鋼製百人乘電動客車



二、車輛

車輛製作の沿革

車輛の製作は當社創業使命の一で、明治二十九年北越鐵道株式會社注文の客貨車製作を開始せる以來、正に四十年の經歷を有する。此間、時勢の變遷に伴ひ時に事業上にも消長を免れなかつたが、漸次隆盛に向つて、製作車種の増加と共に輛數亦多きを加へ、既に三千輛に及んで居る。

今、過去四十年間に於ける車輛製作關係の重要事項を擧ぐれば、明治四十二年十月、時の鐵道院總裁後藤新平男(後伯爵)當社工場を視察せられ、爾來當社は鐵道用橋梁及機械の指定工場となつた。大正十年には鐵道省の車輛指定工場となり、昭和二年始めて專任監督官の駐在を見るに至つた。昭和八年には南滿洲鐵道會社の指令により其車輛製作を開始した。創業の當初は技師本間常松氏専ら其衝に當り、大正十四年一月元鐵道技師池田正彦氏技術顧問として入社、同氏退社後昭和七年同じく元鐵道技師